

64-265

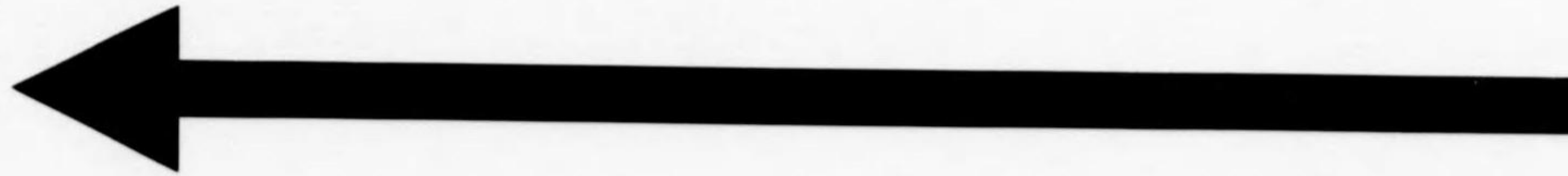


1200501278141

64  
265



始



25 33 1

## 例言

一、川路左衛門尉聖謨は江戸時代末造に於ける幕吏の俊  
 髦なり、文政元年弱齡十八歳、初めて支配勘定に出仕、爾  
 後評定所留役、寺社奉行吟味物調役、勘定組頭、勘定吟味  
 役、佐渡奉行、普請奉行、奈良奉行、大坂町奉行等に歴任、嘉  
 永年間勘定奉行の要職に就く。曾て仙石家の獄を斷じ  
 て聲名一時に高く、任に佐渡に赴きて積年の弊習を根  
 絶し、久しく南都に滞任して心血を牧民の事に注ぐ。嘉  
 永六年米使來問、幕議沸騰、國論紛起、聖謨撰ばれて海防  
 掛の一員に加はり、武備國防皆與らざるなく、同年七月

魯使來朝の事あるや、馳せて長崎に到り、折衝樽俎、克くその使命を全うし、爾來外交の大任を兼濟、人をして幕權尙ほ餘命あるを思はしむ。

一、聖謨身を微祿に起し、絶世の功業能く此の如きを得たるもの、抑々亦由て來る所なくんばあらず。父内藤歳由は元日田代官の微屬なり、聖謨を導くに切嗟嚴厲、倦まざるの努力を以てす、是れ其大を爲し、所以の一なり。且起武術を練り、徹宵學を修め、以て偉傑の眞骨頂と、古聖の眞精神とを體得し、而かも終世勉めて止まず、是れその大を爲し、所以の二也。恪勤精勵常に其責に任じ、純忠至誠常に其公に奉じ、至孝至仁、所生の老を慰藉し、

又後輩啓蒙の勞を惜まず、是れその大を爲し、所以の三也。

一人を知らん欲せば、須く先づ其交る所を見よ。水野出羽(忠邦)、大久保加賀(忠真)、脇坂淡路(安宅)、眞田信濃(幸貫)、阿部伊勢(正弘)、堀田備中(正睦)等皆聖謨を知るものなり。徳川齊昭、松平春嶽、島津齊彬、黒田齊溥、鍋島直正等亦皆聖謨を識るものなり。渡邊華山、伊能忠敬、岡本花亭、淺野樸堂、佐久間象山、藤田東湖、筒井政憲、岩瀬鷗所、江川坦庵、間宮林藏等亦皆聖謨を友とするものなり、以て聖謨の異常人たりしを察すべし。

一、聖謨資質嚴明、一面古武士の風格ありと雖も、又黽めて

文學を修む。遺著「語言概覽」は其篤學の風を見るべく、隨筆「遊藝園雜筆」は其博識を窺ふべし。任に佐渡に在りては、島根の言の葉を著はし、奈良に在りては「神武御陵考」を編述して古事記傳の誤謬を指摘す。其他縉紳一話、歷代古事私纂、讀論語、宋名臣言行錄餘論、自戒錄等の數篇又以て其學殖を想見するに足らん。

一、明治元年、官軍東に進み、江戸の落城目睫に迫る、三月十五日、聖謨事を以て家人を遠け、悠揚自ら、又に伏す、年六十八。明治三十六年、孫寬堂翁「川路聖謨之生涯」を編述して之を公にし、又舊幕有志の士、相議して力を聖謨の表頌に致し、大正元年十一月、贈從四位の天恩に浴す。

一、今、宮内省圖書寮秘藏に係る聖謨關係文書は元川路家に傳はりしものなり。由來聖謨の事跡資料、世に出づるもの尠く、學徒久しく之を憾とす。今回宮内省の允許を得て、之を會員諸彦に頒つを得るは本會の最も欣快とする所、今先づ其第一卷を上梓し、聖謨日記中の數篇を収録す。聖謨の日記多くは、父母の老懷を慰めんが爲め、其任地より江戸に脚送したるものに係り、其記事の詳細鄭寧、叙述の取材常に興味津津たるものを撰ぶことを忘れず、以て聖謨の心事を察知すべし。

一、本書出版につき宮内省の聽許を得たるは同省關係各位の厚意に待つ所最も多し、こゝに謹で謝意を表す。

昭和七年七月

日本史籍協會

○川路家略系譜

○並秋 川路八郎左衛門  
嵯峨源氏、河原左大臣源融之末裔、松浦八郎左衛門之子、故あり信州伊那郡川路村に住す、後幕府の  
世臣と爲る

○光房 三左衛門並秋より六代目  
小普請組、四谷に住す

○聖謨 左衛門尉、實内藤吉兵衛長男、初彌吉、三左衛門、初名萬福  
(略年譜參照)

○彰常 銀五郎、又彌吉  
長男、弘化三年歿(廿五)

○種倫 市三郎  
二男、原田氏

○新吉郎 三男、分家

○又吉郎 四男、原田種倫養子

○邦子 長女、高山準之助貞道室

○宣子 二女、貴志大隅守忠孝室

川路・内藤家略系譜

○寛堂太郎  
安政六年八月承祖

○内藤家略系譜

○歳由吉兵衛文政五年歿、室高槻氏  
甲州武田家浪人、豊後日田代官所吏員

○聖謨トシマツ  
川路家養子

○清直松吉、井上氏養子  
信濃守、外國奉行

○重吉後幸三郎  
内藤家を嗣ぐ

○川路聖謨略年譜

享和元辛酉年

一 歳 四月廿五日豊後國日田に於て生る、父は内藤吉兵衛

八 歳

歳由(日田代官屬吏、彌吉と命名す。

文化五戊辰年

父内藤吉兵衛に伴はれ江戸に移り下谷に住す、當時内藤氏は幕府の徒士組に用らる、後牛込徒士組屋敷に移住す。

同六己巳年

次弟松吉生る(後井上信濃守清直)

同九壬申年

四月、小普請組川路三左衛門の養子と爲る、川路氏は世々幕臣たり(弟松吉も亦奥力井上新左衛門の養子と爲る)聖謨此頃友野霞舟の門に入る。

同十癸酉年

元服カセト萬福と名け、後聖謨トシマツと改む、養父の願に由り小普請組に入る、夙くより同支配石川右近將監忠房に知らる。

文政元戊寅年

○仙臺會津の兵蝦夷地に戍る○英艦長崎に狼藉す。

○松平定信致仕、樂翁と號す。

十三 歳

十八歳

三月支配勘定出役と爲る、是年評定所書物方出役を兼ぬ。

同四辛巳年

六月九日、支配勘定に進み評定所留役を兼ぬ。

同五壬午年

實父内藤吉兵衛歿す、末弟重吉家を嗣ぐ。

同六癸未年

正月十九日、評定所留役に昇り初めて御目見以上と爲る。

二月廿一日、寺社奉行吟味物調役當分助を命ぜらる。

十月十一日、勘定留役に復す、此頃切めて小石川舟河原橋畔に居を定む。

同八乙酉年

正月、江州に出張、彦根領宮津領山境紛議取調を命ぜられ、八月十六日歸府。

同十丁亥年

四

○伊能忠敬、塙檢校歿す。

○上杉鷹山歿す○英艦浦賀に来る。

○奢侈の風起り、賄賂公行す。

二十五歳

二十七歳

十二月十六日、寺社奉行吟味物調役と爲る、奉行脇坂安宅を助け僧侶、道者、淫祠等を嚴制す。

天保二辛卯年

九月勘定組頭格に拔擢せらる、公務の餘暇劍槍を學び、通鑑、論語、近思錄、宋名臣言行錄等を讀む。

同四癸巳年

公事訟訴取扱格別出精に付特に賞詞を賜はる。

同六乙未年

三左衛門改稱す。

八月、出石藩主仙石道之助家政に關する獄あり、聖謨勵精糺斷名聲を博す。

十一月廿八日、勘定吟味役と爲る。

十二月十八日、將軍物を賜ふて、聖謨の仙石事件斷獄の功を賞す。當時の交友に藤田東湖、江川坦庵、岡本花亭、羽倉用九、渡邊華山、矢部駿河守、間宮林藏等の名士多し。

○仙石道之助領知二萬八千石を沒收せらる、世に仙石騷動と云ふ。

五



同八丁酉年

三月、聖謨を最も信任せし、老中大久保加賀守忠真卒し、水野越前守忠邦代て首席老中たり、聖謨復重用せらる。

同九戊戌年

三月十日、江戸城西丸焼失、聖謨再築御用掛と爲り用材伐木監督として濃美に出張、木曾山を巡視、賄賂不正を嚴制、七月十一日歸任す。  
是年大越佐登子(又高子と稱す)を娶る。

同十己亥年

目付鳥居權藏元より聖謨を忌む、華山の獄起るに及び其親交あるの故を以て權藏乃ち聖謨を羅致せんとせしも、陷穽の證なく遂に止む。

同十一庚子年

六月八日、佐渡奉行に任ぜらる、先是聖謨佐渡鑛山管理の流弊を論じ屢々革正の議を建つ、是に至つて此

○將軍家齊西丸へ移り大御所と稱す  
○十二代家慶將軍宣下○大鹽平八郎亂を爲す。

○渡邊華山、高野長英の獄あり。

四十歳

三十九歳

三十八歳

三十七歳

四十一歳

命あり、爾後任期一ヶ年間精勵積弊頓に革る。

同十二辛丑年

五月、佐渡奉行任滿ち後任久須美六郎左衛門と交代歸府、飯田町橋木坂上に居を定む。  
十二月十六日、從五位下に叙し左衛門尉に任ぜらる。

同十三壬寅年

小普請局の流弊を革新す、靈屋の修理、演殿の修繕其他大小の工事を監す。

同十四癸卯年

十月、普請奉行と爲る、此頃佐藤一齋を招請して經義を聽き、佐久間象山と懇交して易理の道を修め學益々進み識愈博し。

弘化三丙午年

正月十一日、奈良奉行に轉ず、在職中治績頗る多し、一々擧げず、聖謨奈良赴任の際、養父母と妻子(次男)とを同伴、母堂長男と共に江戸に留る、聖謨元より至孝、母

○前將軍家齊薨す。  
○水野越前守諸政を改革す。

○平田篤胤歿す。

○仁孝天皇崩御。  
○英佛艦隊琉球に來り互市を求む。

四十六歳

四十三歳

四十二歳

堂の孤憤を慰めむか爲め日々の行動を細叙して之を江戸に脚送し、殆んど十年一日の観あり、今存する寧府紀事即ち是れなり、其他聖謨が遠國在任中の日記概ね然り。

九月、嫡子彰常(彌吉)逝く年二十五、嫡孫太郎(寛堂)を嗣とす。

嘉永四辛亥年

五月、關老の召命に接し一旦歸府、六月廿四日、大坂町奉行に榮轉す。十月十八日大坂に着任。

同五壬子年

九月十日、勘定奉行に任ぜられ海防掛を兼ね虎の門外役宅に移る。

同六癸丑年

六月、ベリイ渡來、聖謨幕府の大議に參し臺場普請大砲鑄造御用を兼ね水戸齊昭に會して對外海防の議を論ず、齊昭聖謨に倚頼する所深し。

○米艦浦賀に来る。

○徳川齊昭海防の大議に參與す○將軍家慶薨し十三代

五十一歳

五十二歳

五十三歳

十月八日、筒井政憲と共に魯使「アチャーチン」應接全權(四品の格式を假附せらる)として長崎に出張、翌年二月廿二日歸府。

十一月、小石川門外新見豐前守邸を賜る。

安政元甲寅年

四月、下田取締御用を、七月軍制改革御用を命ぜらる。

七月、實母高橋氏歿す。

十月、魯使應接全權として下田に出張、滯在中大海浦あり魯艦大破す。

同二乙卯年

正月、下田表取締の爲め再赴任を命ぜらる、在任中屢々「アチャーチン」と應接、取締法規を確立、四月末歸府す。

六月、講武所建設御用、内海臺場修理御用、又水野忠徳、岩瀬忠震等と共に「蕃書調」所管理を兼ね。

八月、禁裡御所御普請御用拜命、九月上京御造營事務

家定將軍宣下

○日米和親條約成る○吉田松陰密航の計あり、佐久間象山連座處罰せらる○四月禁裡炎上。

○徳川齊昭幕政參與となり隔日登城○江戸大地震、垣庵○東湖歿す○蕃書調所創設。

五十五歳

を總監す十一月三日新皇居竣工聖謨殊恩を蒙る。  
十月、攝海沿岸を巡視、防備方策を攷究す。

同三丙辰年

六月、通貨改鑄御用を命ぜらる。  
十月、貿易取調御用を命ぜらる。

同四丁巳年

七月、ハリス登營準備委員並に其接伴員を命ぜらる、  
又勅定奉行勝手方首座と爲り、軍艦操練所監督を兼  
ぬ。聖謨日米條約奏上の爲め、特使京都派遣のことな  
建言す、此年同志と共に將軍世子に閱し内議す。

同五戊午年

正月、日米條約勅許奏請の爲め、堀田備中守上京、聖謨  
岩瀬忠震等と共に隨伴、四月末歸府。  
五月六日、西丸留守居と爲る。

同六己未年

○米國總領事ハリ  
ス下田駐劄

○林緯津田半三郎  
條約一件奏上の爲  
め上京○米國總領  
事ハリス出府登城  
す○阿部伊勢守卒  
す。

○井伊直弼大老と  
爲る○將軍家定薨  
し十四代家茂將軍  
宣下○戊午の大獄  
起る○米蘭英佛露  
五國と通商條約調  
印

五十九歳

八月、職を罷め退隱贅居を命ぜらる、敬齋と稱す、嫡孫  
太郎(寛堂)家督を承く。  
十一月、居を表六番町に移す。

文久三癸亥年

五月、外國奉行に擧用せらる。  
九月、職を辭し隱居す。

慶應二丙寅年

二月十二日、中風症發作半身不隨と爲る。  
十月、繼嗣太郎(寛堂)留學を命ぜられ渡英。  
十二月、實弟井上信濃守清直卒す。

六十六歳

明治元戊辰年

三月十五日、江戸開城の風説を信し其邸に自盡す、下  
谷池端七軒町大正寺に葬る、誠格院殿嘉訓明弼大居  
士と諡す。  
其絶筆に曰く

六十八歳

○吉田松陰橋本左  
内頼三樹三郎等處  
刑○横濱開港。

○將軍上洛○賀茂  
石清水行幸○長藩  
下關に外艦を撃つ  
○七卿西覲。

○征長再役○將軍  
家茂大坂城に薨去  
○十五代慶喜將軍  
宣下○高島秋帆歿  
す○孝明天皇崩御。

○正月三日鳥羽伏  
見の變○同十二日  
前將軍慶喜江戸歸  
城○四月十一日江  
戸城引渡

「天津神に背くもよかり薇つみ飢にし人の昔思へば徳川家譜代之陪臣頑民川路聖謨」

川路聖謨文書所收豫定書目

一道中紀事錄	一冊	一岐岨路の日記	一冊
一濃役紀行	一冊	一島根のすさみ	二冊
一玉川日記	一冊	一寧府紀事	四冊
一浪花日記	一冊	一長崎日記	一冊
一下田日記	一冊	一京都日記	一冊
一都日記	一冊	一座右日記	三冊
一千里飛鴻	一冊	一慈恩集錄	一冊
一史料舊柬	二卷	一名家古牘	一卷
一神武御陵考	一冊	一遺書	一冊
一東洋金鴻	一冊		

# 川路聖謨文書 第一

## 目次

### 一 濃役紀行

自天保九年四月廿二日  
至同年七月十一日

一頁

○本記は江戸城西丸再築用材の伐採監督として濃美に出張の際其見聞せし所を留守宅に書送りしものなり。

### 一 岐岨路日記

自天保九年四月九日  
至同年七月十二日

一四五

○本記は同上公要日記と見るべきもの、聖謨左右に置きて日々用件を記せしものなり。

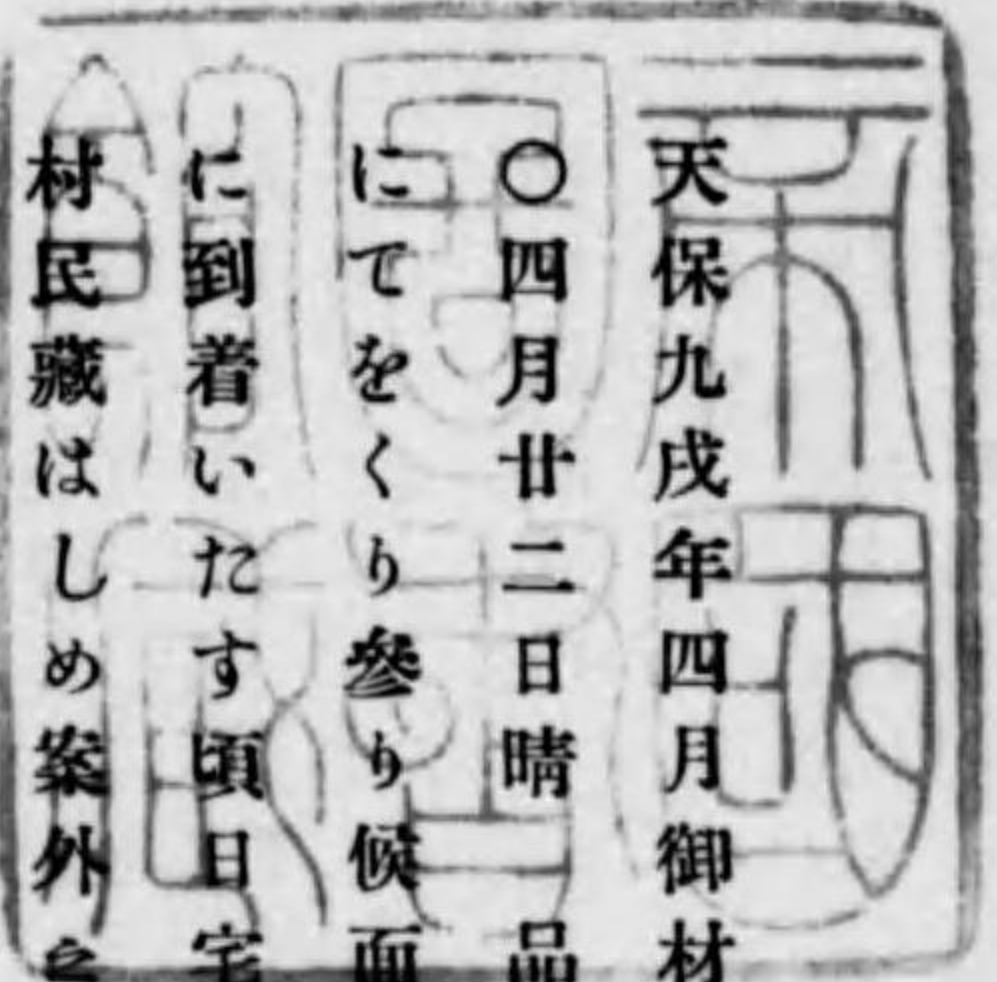
### 一 島根のすさみ

自天保十一年六月八日  
至同十二年五月廿六日

一九七

○聖謨佐渡奉行として任に同地にあること一年、其間見聞する故事傳説を綴りて留守宅に書送れるものなり。

濃役紀行



天保九戌年四月御材木伐出御用として罷出候旅中々體左に記す

○四月廿二日晴 品川宿はつれの釜屋とか申茶店にて晝食したゝめこゝにてをくり参り候面々わかれをつけ川崎宿の本陣夕七ツ時よほと前に到着いたす頃日宅のいそかしさに引かへ旅中は物こと閑暇にて用人木村民藏はしめ案内事と喜び候様子なり

きゝしよりことしけからぬ草枕従者はこよひそゆたかにやねん

川崎の宿は江戸を立てわつかに四り餘と聞へしかは

ふるさとのちかしと聞も涙かな母やいかにとおもひわひつゝ

なか／＼にうきおもひ哉故郷もおなし色なる庭のわか葉は

旅のうさまきれにけふ早居合刀をふり申候稽古鍵もちまいらさることを

くゆれともせんなし

深山なる猛きけものも寒からめ旅寝にもふる秋の霜には

夕かたよりきのふのくもたちにて風吹出せしに白雨わつかにて忽に晴れぬ

○廿三日快晴 のとか也今朝五時前川崎の驛をたちて神奈川程ヶ谷を経てあひの宿にて晝食かな川は海邊にて小松の石山あ戸塚より藤澤に至りて止宿民藏食當り候哉俄に腹痛直に快氣に成今朝の體左の如し

いさましまみち行駒のいなゝきて人きほひぬる旅のあけほの

明の選隠と申せし人の詩に豈無遠道思親淚不及高堂念子心とありぬ是は旅立なとせしもの

ゝ親のことおもひ出て袖ぬらすもなきにはあらねと故さとの親の子をおもひしほとにはあらずと申せし也某また此詩に類し候ひぬ母の御疾のいよ／＼御快わたらせられすこやかにならせ給ひしやいかにとは折々におもひ出候さてはまた母上の某のこと心に懸させ給はんはいかにやとおも

ひはかり候得は恐おもひ奉事は少からず候

○廿四日晴 六半時頃藤澤の驛をたちて宿外れまで参りしに下吏の参りて小田原の宿には諸侯の泊多くて差支候由かの宿のおとなより申來候よし申しぬよつてとりあへすわかこゝろはかくなりとて

うきといふうきよの中のうき旅そいかにあるともやとりゑてまし

いふせきはいとほさりけり御御朱印之心得也しるしの雨と露とにあたらさりせは

心の心に付可然よふに而已申置ぬ夫より平袴にて松原を歩行平塚をこへ大磯を経てよりは南は大海北には富士の根みへ絶景也大磯の濱邊は品川なんとの海原とはこと變り風なきにもきしなみ夥し

みなつきのあつさもいかに白波の雪かとはかりよする荒いそ

平塚のはつれにて晝の餉したゝめ七時前に小田原につきぬいかに驛人のなしたりけんことよろしき本陣にそありけりけふは相模川酒匂川を渡りぬ相模川は所謂馬入川にて大久保千丸領分に付彼家よりの馳走の家來

共出紅に塗たるれん臺といふものに十人餘の川こし附て越したてぬ家來末々までもれん臺越也酒匂川は船わたりにて外に記へきことも候はず候母上の旅中安穩ならんためとて護符給りて朝な／＼いたゞき奉れと仰ありければ某もとよりさまてにほとけを信し奉るにはあらされと仰の重きまゝ朝ことにおこたらず戴き候ひぬ其たひに此程はいかにおはしましけるなどおもひ奉れば

たらちめの給ふ守りとあさな／＼いたゞくことに涙こぼるゝ

小田原の宿は松魚の名物故求めしに今朝漁せしよしのめしかといふ松魚ありとて出す至多大なりさしみにつくり某もたうへ従者共にも遣す味ことよろし親族うちよりてかゝる鮮魚たうへなはといひし、大久保家より梅干袖もちさとう漬來る

○廿五日 朝少々曇にて日の出頃小雨に忽快晴に付宿立出候處途中に昨夕箱根宿悉焼失之由承候さては昨夕火事のありしよしは夫なりけり

と思ひぬ深山の大火山のおれなんことを恐れぬ夫等のこと従者共に物語畑の建場畑左衛門と申もの方にてひる餉まいる此畑左衛門は東照宮の上意などありし家のよし座敷に重箱畑草盆などの類の商ひ物數百品ならへあり庭は自然の山をつき山のこつくいたし小瀧三ヶ所ありて泉水にひ鯉などをり居宅殊によろしそを出て三町計りあゆみ参りしに少々の雲たちにて雨ふり來り候まゝ駕に乗る五六丁も参り候ころ雷鳴ありぬ扱は山あれとおもひしうち忽に黒雲晝のことくに重なり雷頻にて頂に参り候ころよりはことに烈敷權現の湖水も遙なる方はみへわかぬ程故家來共大におそれ候體也御關所をこへ箱根の宿に参り候處一軒も不殘焼失ぬ此所に沼津の役人参り同所は止宿は故障のことあるよし申に付三島宿はくりかへぬ今朝は至るのとかなることにて山の半ふくにて頻に鶯の聲など承りしにかたの如き雷雨にて山を下り候まで雷おひたゞしく三島宿の壹里程前より雷は止候得共雨のふることとの如し七時頃三島宿に参り漸雨



止日光みへ申候此通にては明日は快晴なるへし此所より相州にら山は  
二里に付江川太郎左衛門参り久々にて閑話におよひ候事

きさらきも深山は春の残るらんこへうらゝかに鶯のなく  
をとにきくみねに雨ふりかみ鳴ていとたひ路のうきをしりぬる  
こゝよりは江戸のみへけると申ところ参りしに雲たちかくしみへさり  
ければ

こゝろなやみゆと聞にしふるさとをいつくしらくもたちかくすとは

○四月廿六日快晴 江川太郎左衛門は昨夕参り物語段々おもしろく成て  
今曉夜明たるに驚て暇乞いたし歸る。昨日箱根は某か通行後よほとひよ  
うふり支配向之衆中通りのをりはことに迅雷にて駕を途中へ捨て人足木  
かけへ逃込候位之事之由也今朝六半時出立にて沼津原を経て村名は忘た  
りあひのたて場うなき名物の茶店にてひる飯したゝめ民藏のこゝろ忍に  
てうなきを爲焼候處味はか也しかはあれと醬油のことによろしからすま

ゝ赤蛙位の味也夫より吉原蒲原を経て由井に止宿今日の途中にて藤川の  
船わたしをわたり其邊川の堤防等一覽いたし候ひぬ。原とよし原とは富士  
の名所にて田子ノ浦邊をも通候ひしにあしたか山より上へは雲とちて更  
にみへ候はず

これも又歸りてのちにかたりなん風吹はらへ富士のしら雲

白くもよ世に名にしおふ不二か根をみる間はしはしたちなかくしそ

梓弓いるかことくにたつ月日たひにはおそくおもほゆる哉

故さとのいも忘するなと朝な夕な手足にさわる熊のしき皮

此歌はある人のいわく彌次郎喜田八とや

よみ人しらす

○廿七日晴 六半時由井をたち興津にいたるこれそかのをきつ白波とい  
にしへの人の云けん海原にこそあれさつたのたむけと申は前は荒うみひ  
たりに富士の高根より伊豆の山につらなり三保の松原海中にみへ海道第  
一の風景なりさつたのたて場に蜀山人か額あり

山のかみさつた峠の風景はみくたり半に書もつくさし  
夫より江尻府中まりこを經岡部にいたる。府中にては駿府御城番其外諸御  
役人より見廻之使者出申候町奉行牧野左衛門は懇意に付茶などをくりぬ。  
府中とまりこの間あへ川の邊に御代官岸本大輔出はり面謁こゝにてあへ  
川もち七ツ計給ぬ味よろし日々海原をみてこゝろもかつやおもひつゝ  
けて

きよからぬものをもいれてけかれぬはけにかきりなのひろき海原  
わか身なと海の心にては行たちまちに破なんとおもひければ

いさゝかの器の水のわか身こそけかれ受なは人の捨なん  
駿河路に参りて富士のみへさりければ

武藏にもみし富士か根は雲とちてあたに駿河の國も經にけり  
いたつらに

路用かせなと貧士のいはんかと富士は雲井に留守をつかへり

いつくの驛路にもうの花さかりなりければ

ひゝにみるあなうの花は旅人の行なやみたるしとやみめ

此ころは従者共いつれもなれて旅の勞もなくもとより江戸にていそかし  
きよしに人の傳へしはさにもあさりしにみなよろこひ居ぬ。此ほと旅  
宿はあま鯛の名所なるにいま海よりあかりたるありと聞しかは鹽やきに  
して給ぬ

○廿八日曇少々雨 六半時岡部の驛をたちて藤枝島田金谷日坂をこへ懸  
川に至りて止宿。島田金谷の間には名におふ大井河の渡りあり河原は半み  
ち餘もありぬへし水涸てれん臺にのる所はわつかに十軒計也其外の瀬に  
は橋にて渡る。金谷と日坂の間には菊川さよの中山なといふ名所あり菊川  
は昔後醍醐帝北條を誅し給はんとのみことり書たりし公卿の首刎られ  
し所也菊川の源には菊か淵ありて今も菊さくと承る仙家の花にちとせの  
齡のへなんよりは君のため首刎られていのちめたるこそ武士の軌則な

るへし都はいかに旅路にはまたほととぎすきかさりしかは

ものおもふ旅寝に聲なきかせしと山ほととぎす鳴すもあるか

さよの中山にて

又こゆるさよの中山としを経てむかしにまさる身そうれしけれさかへのみちものほるうれしさ

きく川にて

千とせふる壽よりもきく川に名をのこしぬる昔をそ思ふ

大井河のみな上のみねに烟たちぬるを尋ねしに炭やくなりとい言しかは

夏もなを賤は深山に炭やきて烟たつみゆ川上のみね

日坂にて

岩はしる川のをとかとみちの邊の松に嵐のわたるをそ聞く

○廿九日雨 六半時出立にて袋井見附を経濱松に至りて止宿懸川のはつ

れより四方うちくもり小雨ふり出しければ

本陣川口次郎兵衛

こすの戸を隔つるはかりうちけふり山影くらく小雨ふる也

今夜よりは  
しめて蚊帳  
を用ゆ

小原村にてかきつはたの咲しをみて

みちの邊にさくかきつはたいにしえの旅寝おもひてあはれにそみる

天龍川をわたりし頃より雨頻なりけれとも此末の川には橋にて川支にこ

ゝろおかれさりしかは

ふる雨も川の數々こへぬれはさまてうしとはおもはさりけり

濱松と見附の間なる野みちにて

ふる雨に田ことの蛙こへ高く行來たへたる野路のさひしさ

此ころは旅なれてこゝろにかゝること候はす只こゝろにかゝり候は母

上の御いたつきいかにおはし候はん次郎右衛門かこゝろみしかきことな

して人に後ろ指さゝれんことはあらずやなとおもひつゝけぬ次郎右衛門

は正直なる人なから柔克のこゝろ薄く候に付其こと門出せん前にとくと

ものかたらむとおもひしまゝにて過しぬれは殊に心かゝり也

おもふ哉母のわたつきわかふとのこゝろ短きことはいかにと

○卅日快晴 六半時濱松を出舞坂新居白須賀二タ川を経て吉田の宿に至る晝餉は新居にて給此所うなきの名物なりとて給候處味かなりに覺候○舞坂と新居の間はいにしへ湖水にてありしに當時は海につゝきぬよつて今切といふ此所に御關所あり海渡一里也吉田之領事より馳走として表黒漆内朱にて塗たる屋形船いたし被申候昨日よりの雨にて今曉もうち曇ぬれはいかにやとおもひしに五時頃よりことよろしき天氣とは成り候ぬ農人共多く單衣を着しぬ新樹之みとりなるさま全之夏けしき也江戸よりも暑早きかたにや濱松と舞坂の間より海をみて

雨の、ち一しほすみし海原の雲井をはしる沖つ帆の影  
晴たるのうれしさに

なにつらきなといひつゝも晴る日におもへはうしな雨の旅路は  
此頃は海とまつ原の眺望にはあき侍りしかは  
いくさとかいきつくしてもあらいその浪と松ふく風のみそきく

○閏四月朔日快晴 吉田を拂曉に立出て御油より赤坂に至る此驛の長は  
新右衛門の従弟違なる平松彌一左衛門にて兼て吉田の宿に参り迎て立よ  
りのこと望こふによりて彼かかたにて晝餉しぬ某より上下のかはりとて  
金五百疋を遣りぬ彼ものも菓子など送り悴迄も逢遣し候ひぬ夫より中山  
寶藏寺に参り東照宮の御宮を拜し御幼年の御時の御手道具等み奉りて御  
儉素のこと頻に落涙いたしぬ召具して参りしもの共も袖をぬらしぬ御宮  
には金貳百疋奉る彼是にてひまいりしかは驛路のものには常の外いさゝ  
かの錢をあたへぬ此所より藤川を經岡崎にいたりて止宿貞助四五日前よ  
り風邪なりとて臥しぬ醫に尋しに瘟疫なりとて三消飲を與たりよつて某  
かはからひにて大葉胡湯を作て與しに大に効ありて今日は快なりぬあす  
は全快とぞ思はる其外けふまで少も病あるものなし赤坂にて彌一左衛門  
に逢しに白髪にて以前よりは大に老の姿になりぬ折ふし庭に昔みし橋の

かはらてありけるをみて

たつ月日老の姿に知られける花たちはなは昔なからも  
寶藏寺にて東照宮御戰袍をみ奉りしに麻にてことに御汗の染もあり御机  
御硯御文庫の御質素驚計なりければ

とをとしな昔はかくもありしかとおもへはおつるわか涙哉

おもふ哉みあせのまゝのあさ衣世のかゝみとや神のとゝめし

危きのかきりつとめて世を救ふむかしおもへは旅はものかは

○二日曇 五時岡崎の驛をたちて池鯉鮒鳴海を経て宮ノ宿に至る此宿こ

そ海道第一の宿とそ今夕の本陣は惣高らいへりにて金すなこのはり附も  
くゝろへの天井庭に松葉蘭の鉢うへ三ツ四ツならへたり其餘夫に准した  
ることにて家來の給仕として出候子供六七人いつれも着類人柄とも驚入  
候計也けふ桶はさまにて

うつものもうたるゝものも今よりは只あたなりし夢とこそみれ

宮ノ宿につきたれはほとなふ柚かたにもかゝりなんとて

けにもとむこの君のため殿づくりよしさきくさの數つくすとも

此夜夢に母上をみ奉りしかは

このみなき夢もたのみの草枕千さとも近く通ふ故さと

たらちねとうれしくかたるものかたり夢とさめにしあとのほかなさ

こしをれも道中の補になりぬいさりしひれの顔へのほりし類にや

玉ひろふ事こそなけれわかの浦濱のまさこはよみもつくさし

ちとく高まん過たるよみかたしかし御一笑にはよかるへしにや宮に幾  
日おりなんやしらす只々こまり候は此宿に妓女おひたし綺羅玉をつら  
ね候様子みへ申候家來共には御用中堅門外不出之事申付候壹分の女良も  
ありとの事美なる筈也○尾張殿より御使被下御朱印改等定例の手續相濟  
別段勘定奉行其外の面々追々入來送迎其外の手續夜九ツ時過頃まで相懸  
其後支配向等参り候は八半時位也支配向のもの御料理給候は七ツ半時に

相成候由某の被下候御料理は三汁七菜御酒御吸物御肴御うすちや御菓子也御焼物など尺以上之鯛中間まで鯛之焼物也吉藏焼物を一覽驚歎兼一汁一菜の外は給不申候様と之申付と事變たりとて家來迄申出るかたしけなくも尾張殿より被下之御品に付不苦候まゝ十分給可申尤不敬は少も不相成酒は上下一同一滴も不相成給候御品々は膳枕皿之外はことごとく給候よろしくと申付る中間鯛之焼物驚歎尤之事也某の御交肴一籠御反物被下之御反物は相たのみ候堅一體の存意申述相斷不敬恐入候得共返上申上御肴計は拜受大なる籠に候得共一疋も被給不申候然れ共被下之御品故きす一ツ焼候難有頂戴餘は宿其外は吳遣す江戸に候は親族中へ遣し可申にと一笑民藏申候は鯛一ツみそにても漬置申度と之事尤に候得共至る御手輕之由に候得共當分は御賄被下候と之由に付給候義は如何いたし候哉と申候得は笑候止ぬ大笑也

○三日曇 今日より白鳥のみなとの支配向は參る船にては八町岡よりは拾町計也某今日參り候はこまり候由に付在宿旅宿の表至る賑はしく且

門前より船夥出る朝なとことにおもしろき事候由也旅宿表惣二階に候得共民藏心附にて一人も斷なく登り候を禁し申候尾州いせの浦々みへ江戸品川なとよりもおもしろき地に付二階よりさふらひ共見たかり候も尤也私もみたく候得共我慢いたし不參と民藏申しぬ朝飯至るおそし然れ共尾州よりの被下に付こゝとも不被申候朝飯手輕一汁五菜也但香物共出立前尾張殿御城附の今般之御用は少しも早く御殿出來三御所様御窮屈に不被爲在候様と之事に付焼めし香物こし辨當にて如何様とも極々之艱難苦行仕せめては平日之御報恩と存せしにかゝる次第さてく恐入候事に付其譯得と役人共は昨日相咄候處いさえ承知無之と見へ候まゝ今夕は嚴敷談し候積に候さてくいつ方も志の届不申候は困り申候是は矢張某まことのこゝろたり不申候故と只々恐入候旅宿の雪隠黒ぬりの□箱にて下に瓦の箱は白くきれいな砂を入置日々引かへ候様成居さてく氣のつまりたること奢たる隠居のそはにおく猫の糞しなと之如なるへし是も一笑

ひる飯朝と同斷薄ちや出る御菓子きうひまんちう貳をくられ三ツ蒸菓子  
は至るすきに付難有頂戴壹ツものこし不申候薄ちやは密に手水はちの前  
に捨る好み不申候故也焼物は太いなめのきりみつけ焼にいたしたるに  
て殊に美也中間は一汁一菜之由然れ共いつれも一尺計の鯛なりとて民藏  
驚て物語る時太郎奇人にて時々おもしろき振舞あり御料理に向ひ八腹の  
虫啼たり定めし虫のひつくりしたるなるへしと申し一同赤面候由門賑過  
ること都の市中のことくありしかは

都路に似るも哉とそ思ひやるにきわひ過る門のあおとに

朝夕にたうへぬるもの故郷にありし時の圓居にとおもひて

垂ちねやはらからよりし故さとの圓居にかゝるもうけありなは

○四日晴 五時より白鳥のみなとぬ参りぬ供立出立候節の如し牽馬具足  
弓無之計也白鳥と申湊に参るこゝは檜材のある所にて奉行役人も多あり  
則出迎として彼役所之奉行其外共一同罷出送迎共手重之事に至る氣之

毒也此所は檜材十萬有餘もありて聞しよりことくしき様子なり彼役所  
に出張中菓子三度酒一度被出候酒は素給不申菓子は追而相斷候積

○五日晴風 けふは在宿これは鼻之下左之かたにいさゝかの腫物ありし  
をこの頃貞助か打臥せしうち幸大夫ひけとゝもに刺たりしに段々と毒よ  
り大なる黒豆ほとなり唇之邊梅干くゝみたる位にはれたり然はあれと  
惡風もなく氣も常に變らすしかし腫物の進まんことおそれて何も給へ候  
はす候まゝ彼役所にて醫師を差越しぬ紀州花岡瑞軒の門人尾州目見醫師三村玄澄そのものゝ申  
は瘡疔と申候ものにいさゝかの出來物にてもとより惡瘡にはなかりしか  
剃もて切たるよりとかめて疔と變したるにてさしてのことにはなしされ  
とも若此上風邪などありなんにはよろしからすと申せし故一兩日は見合  
置たる也此所得と御一覽之上御取計之事後藤一兵衛より求候のり入之代并硯石之代何程に  
候哉嘉十郎より一兵衛家來迄懸合之上代料可遣事同鳥居八右衛門の餞別  
可遣道中文庫よろしかるへき事今日飯三椀宛鍵のすこき例之通氣分少も

不變きのふよりは頭痛大に快よし瘡疔と之義名古屋に聞へ御醫師被下右  
之玄澄詰切爲致可申旨尾州御用人より熱田詰御勘定奉行迄申參る是は則  
中間鯛之焼物と同事に而出來物もまた驚歎いたし候は不宜と早速に斷  
遣す謹按左傳に病二豎子となりたりしことありふき出もの驚歎すましき  
ものにもあらず。夕方尾州異<sup>奥</sup>醫師淺野春道入來御家老之沙汰之由脉上相同  
度旨申出る面謁診察之上至而輕き事恐悅之由申之立歸さもあるへし是は  
某熱田に到着已前今般御材木伐出御用之義取扱候尾張殿勘定奉行江尻よ  
り瘡疔に而歸國無間も相果候由夫放故と承り大騒に相成候由と内々承る  
今日鍵の素こきいたす平日にかはらず是にても瑣細之腫物之段分明也  
○六日晴 昨夜尾州より外科被<sup>前</sup>に<sup>み</sup>遣<sup>ゆ</sup>今夕詰切被 仰付候との事い  
か、斷り候も不聞餘義なふ申に任す今朝はよろしとてなこや歸りぬあ  
まりの丁寧あきれたる事昨夕腫物の口あきたるところはステレキをさし  
可申と之事ステレキと申候は硝石タンハンをらん引にせしものにて金銀

をもたちまちに水になしぬる藥也よつてこはいかゝと存せしか任申口の  
さゝせ候處夥敷いたみ也女々敷も不被申さして承候程にも不存と申置ぬ  
今朝に至り腐肉になりたるところを少々きりて絞りしにわかおもひしと  
は違ひうみ少も不出少計も、いろの水出候計也其あとの穴はこより三分  
計さし入て歸りぬ鍵のすこきも食事もなへてつねのことくに付にきひの  
大なるとおもひしに少しは謂ある腫物なりとはけさそしりけるいつか宿  
にありける時顔にみゆる腫物もかくこと、敷なしはこのたひのこと  
くなるかもしらすいかにも手重の御扱ひには困り候事也佐藤清五郎まこ  
との少々はかりの風にておして湯あみもなしぬるほのこと也然るにく  
さみせしとて醫師被 仰付いかに斷ても聞かすまことに當惑之由既に昨  
日も今朝も奥醫師參りたりとて清五郎只々あきれにあきれて物語り候右  
之次第に付まことに迷惑ながら今日も場所には不參。都筑金三郎は家内は  
も反物をくり頃日のこと謝し可申事忘るへからず。少々の腫物もけふはは



やまことにわつかに成りぬされと前々も記しぬる様にしあれば得も出すして居りぬさはあれと朝より古今集三冊松戸詠草一冊哥十首備忘録一冊よみ備忘録には評語など書入眠菊さしみれは至重やかなる鍵二日程前につくりたればそれにて千本餘の素こきなし此鍵なま木に其上大なるまわか番の品よりもおもやかなり其外鎌槍のかたち居合太刀遣ふことなど恒のことくなせしに八ツ時下りたる位になりぬおりふし尾州勘定方之下役といふもの参りて御勘定奉行より之書状并宅状をも届けぬ宅状は平安二字計みてさし置御用状披封候得はさしてのこともなしこゝろはおち居たれと尙此末のこともあれば下吏の面々に其こと申遣しぬ母上様の御ふみ拜見侍りしに第一にかはらせられざる御ことのうれしさかきりなし然はあれと御筆のあとかすれたる所もありなへてのおもむき例の臥ながら御床の上にて遊はせしにはあらずやと少々案し奉る御用の御事はおもひしよりも品によりやすらかなるめりとみへぬることもあるはさして御心おもひわつらはせ給はさらむこ

とほりするのみにこそあれ新右衛門の日記書状とも一覽さすよりの日記書状も一覽よくこそ記し給り候故さとのこと承り候は何よりにこそ御用のこといにし近江に参りしとはことかはり何ことも人にまかせ不申候半ては不参下吏の面々もよくつとめらるれば某か別て申さんこともなし只々己にかちて緩大のこの修行いたしぬ夫に付も君の御恵み山海もても高深をつくしかねたる御事にて御役と御恩に思慮とつとめのたらさることおそれおもひ候ひぬ御普請役てふものは旅より旅に家移して家をは立たるか如し然はあれと其やからうからのことおもはぬは怪しからることにそ

やからには逢れぬことになれやせし旅寝うからぬ人のこゝろは  
こたひ御紋の御羽織給りしことを

葵くさいく葉をり得て行たひのかさしにせよとかくるうれしさ

○今日到来の書状母上様から御書状新右衛門より之文通日記さすより同

斷古助殿より治郎右衛門から壹封古助殿から御書狀寺西藏太より壹封池田岩之丞より壹封嘉十郎より壹封玄關帳の寫民藏の壹封以上

○七日晴 今日も宅調。今日は全快なれ共無餘義在宅さてもちちようしられ候も又こまり候もの也。鑓のすこき等例に不變

○八日雨 今日は例之供揃にて場所の參る入湯をもいたしぬ

○九日曇 例之供立にて場所の參る。旅中によみたる歌とも書記して旅寢の友となつけぬ。此次の便にまいらすべく候

○八日落の分夕くれより快晴

○九日落の分風強く候尾州より被賜候かれいの事斷申旨もありしによりてけふより宿のものしつる調理して玉ひぬ朝ひるは一汁二菜夕は三菜にてかわらす鯛の焼物こそあれ熱田の參りてよりたとへは蒲ほこ指いれなといふもの迄も鯛にてけふまで鯛ものせぬ日はなし夕くれに入相のかねのねとても故郷はかくまてうくはおもはさりしか

ことかゝぬたひにもうしな夕くれの打もさひたる山てらのかねけふにていまた廿日は立さりけりと指かゝめよみて驚ければ

はたあまり經さる月日を二とせもみとせもたちしこゝろこそすれ

一日三秋のことしといひしからうたのことおもひ出て

ひと日さへみあきとかこつからうたをけにもとそしるうき旅寢には

たひのやとりの門なる海より朝な夕なに旅人のいせの桑名なる驛にわたりぬれば

うちよする波のよるひる行船のみるくわたるいせの海つら

○十日晴 昨日より殊に冷氣綿入にてよろし。五時過之とも揃にて白鳥の湊へ參る。宿のものに密に申含某計は一汁一菜にいたしもらひぬ密にいたせしは外の障あることををそれて也。麴町邊大火之由風聞

○十一日晴 常の時こうに見合せなは少冷なるかたなるへし。朝かれいたうへてのち白鳥の湊參ること例の如し。夕にゆあみしてのち下吏き訪るこ

と例のことし。煉ようかんをいたしみしにこと／＼にかひ生しぬあつさに  
 たゆるものなればかはらしとて水もてあらひたるにあされたることもな  
 し。こはこの頃菓子に飽たれはもたらし來たりしものは侍者にも呉はへり  
 ぬましてみな梅か香などは上下ともにこの頃は立れたるかことし恐入た  
 る御事也外にしあらは必家來をもきひしくいましめ候へけれと上の御三  
 家たる御方より給ふとの御こと辭し奉るへきにもあらさりしかは再たひ  
 もみたひも其こと申て菓子は少宛日々一度朝食後に酒も止み料理も手  
 かるに成りぬ白鳥の湊にて日々二度宛菓子給ふことはいかよふに斷りて  
 も替らす是は役方のものに  
細あるそと察候也然はあれと品も大におとり少にもなりたれば  
 予もこゝろよし尾張殿御材木方のかるきもの久米太郎戸のすきよりみしに  
附の裕絹の  
務なきたり夜密に參り彼もの常に刀術のこと好み直心影を遣ふ  
といひよし刀劔のことな  
 とことに好みぬ某もまた武術好にて刀劔のこと好みぬと兼て承りぬ刀の  
 拵さまなんとに心得にもなりぬることのあらは聞かまほしとて上役のも

のにも申さてつね目通もせしものなれば參りたり願くは其ことに付益あ  
 らんには教こひぬと家來貞助を以申聞ぬよりて某おもひしは江戸ならん  
 には逢ひて遣し候へし御つかひ奉りたらむものゝ日々に給事なとする輕  
 ものに逢へくもあらずとて貞助を以申させしは都は武士の輻湊せし地誰  
 かは武のこと好まさらんしかし某かときは朝夕に忘れもせずいとまあ  
 れは其蕙にもつらなりしかもとよりわさのなるへくも候はす只々をのれ  
 か業にかつことなんとたのしみ候ひしかこれも成り候はぬ武器のこと望  
 とて一覽の義甚以愧おもふ所也旅のことにしあれば輕き具足にひとこし  
 の刀たつさへ參りたる計にて見すへきものとはなしさりとてかくまで  
 に申せしをこと／＼に斷なんはことを左右によせて拒にも近しよつて甚  
 はつかしき事なから江戸にても人の骨よく切るゝとて申せしこともあれ  
 はとて貞助か取計て例の兼元の刀をみせ遣しぬ彼もの大に悦ひてをの帶  
 せし刀携參りりし鏑矢の根なとみせたり刀は新刀にて貳尺七寸もあるへ

し脇差は短刀にて燧袋をつけたり相應之ものにみゆ然れ共こしらへ等さ  
してみるへくもあらず。矢の根は兼氏の銘あれと疑はし明壽の作たるはず  
くれたるものとみゆ

○十二日曇午後晴 朝より白鳥の湊に参ること例の如し

○十三日晴 白鳥の湊に参ること恒のことし。けふ宿にてすゝきの羹なま  
すを出すまことに鮮にて至り美味なり。門前の海うち海故魚類品川の産の  
如し

○十四日曇 白鳥湊に参ること例之如し。けふなるみの商人参る母上の土  
産として可奉ちりめんのようにしほり壹反買求申候。歸り之節差上可申  
歟。夏の御召に付序のたよりに上げ可申哉。此次の便に被仰候様切祈候。此地  
木締は下直之様子也。壹分と申候。白木めんは至りよろし。三反計買置。其外は  
せと物かな物之類にても江戸程の重ほうなる所無之。宜品は江戸に参り居  
産所には却り無之候。幸三郎に申遣正義に明年たのみ置打直し可相成候刀

わきさしいまた出来不申候哉。長吉に申談。益までには出来候様御頼申候。刀  
貳尺四寸五分脇差。壹尺五寸巾はなるたけせまくかさねは至りあつく刀の  
かたは切先かるくつりあい第一にいたし。京大和の作と相見候様いかに  
もおとなしくし。勾ひ深く地うつりを焼申度候例の眞守の刀のことくに  
いたし。眞守よりも小作りにいたし。度候中心細きかたよろしきものなと  
よろしかるへく候。夜ことに母上を夢見奉る御不快等には無御座候哉と御  
案事申上候

○十五日雨ひる後より晴 朝の雨にて場所のまいらす候

○十六日晴 白鳥之湊に参事例之如し

○十七日曇 白鳥之湊に参りしに午後より雨降出候まゝ歸宿

○十八日 朝雨なりしに船人は晴の船よそひし侍れはいかにとみるまに  
こゝろよく晴ぬひる後より白鳥に参り七時過歸りぬけふ尾州より領産之  
焼物五六寸餘之重むし菓子うなきなと入被給候。いづれも甘し菓子は母

上様の奉りたしと申しきけふはことにあつし五月節句位之様子右之品は徒士迄の悉遣しぬ

○十九日曇夜雨 白鳥の湊に参ること例のことしけふにて此湊のことはまつやみて木曾へ参るとて尾張殿にて酒をも給りたりもとより給不申候彼かたの役人共わかれおしみたる體人情ながら不思議なるものに候支配向に給りし酒の相手に出役人計ひとり酔たるさまいつかたもおなしことゝ調役のことおもひ出ぬ

○廿日雨 木曾の山は荒くま出由ものかたり承候まゝ千太夫か携たりし袋鉾の鍵信國の作なり彼もの心懸のほとと褒し遣ぬ七尺餘の至る太やかなる柄を作り太刀打しつきなともなしにこしらへたり是は熊に出會なはとのおもひ也山中にはつねに携候心得也

○廿一日快晴 きのふは朝雨なりしか午過頃より晴たりけふは熱田をたちて木曾のまいる門出なるに梅雨のはしめにあれば必雨ならんとおもひ

しに快晴ければ

行駒のすゝむもむへやこゝろさへはれめつらしき五月雨の空

なと口すさみたりこの宿より名護屋までは壹里半の間家なみうちつき名護屋には芝居などあり通本町といふ所の繁昌いさゝか江戸にかわらす大丸のおりものみせ桔梗屋てふ菓子作る屋琴をしゆるもの手ならひをしゆるもの或は芝居わさ舞のものゝ晝さくら草かやつりくさの團扇商ふさま夥しきこと也本町六丁目醫師小宮山宗法と申もの方をひる休の旅宿と定らる此所にて料理給はりぬ朝と同じ二汁七菜酒肴菓子等也此所より壹里餘を経て大曾根村と申に参るまでは市中なり尾州の御城にかねのさちほこみちの左にみゆ是もまた 東照宮の御勳にて天より彼御神へ智勇を賜らせ玉ひ其神子神孫かゝる都城しろしめしぬることけにもかたしけなき御事候

東照す神の光そおほけなきこゝにもかゝる都なりとは

かくて小牧の宿に参りて止宿このみち船わたしかちわたりありてみちも

や、山里に近きさまみゆしかし稚子の青き昏もてはりたるかさしうるありこゝもはや江戸の邊なる農家のことく定おとろへたるへしと

みるもうしひなふりしらぬおさな子の目おほふかさの都すかたは

小牧の宿の脇に松の村立たる山あり是そいにしへ神君の豊臣太閤に討かち給ひし所也測量に而直立二十二間上りくたり半みち計の小山也

あなとをと直なるみちにいと安くかたき破りし昔おもへは

かはかりの山の名さへも萬世にいや高くしる神のいさをし

此山に名をなす心塵ひしもありなはたへんいかにうき世も

前に記せし宗法か宅にては間ことに金屏風ならへあり江戸にも多からぬ塗こめのいくらもありいと富たる様也親の代に紀伊殿立よりあり其後はけふ某かまいりしまゝ旅館に點せられしことなしと家來にかたりたりとそ右にて其おもむきおもひやるへし

○廿二日晴 六半時頃小牧をたち樂田古戦場也を經鶉沼にてひるかれひ

し夫より吉田にいたりて止宿みちの程ゆるやかなるは尾州の御領にて休泊もありて而彼御家來のうち、申旨もあれは也けふ樂田よりの鶉沼の間にて吉田川をわたる左右に岩山あり河原は丸やかなる手水つかふところをく俗にごろたといふ石ありて河ひろくして水深く山高からすして趣き多くかたつの山の頂に犬山の城の天守みへ晝も及かたき絶景にそあり夫より山と水とにそひて二三里か間の詠々に大なる泉水築山のことくにそありきかゝること東海道にはみもおよはす

あめつちの神や詠の庭ならめ筆も及はぬ山と水とは

谷川のちひろの岩にちきりぬる波の花こそ常盤なりけり

吉田川はみの信濃の谷々の集りて川と成ぬる末なるかけふみしところははは二百間もあるへく水六七拾間にも過たり岩はしる水おとなとすさましき姿也いさゝか微をつゝしみぬるいましめをもおもひて

見つやこのむくらの雫苔の露未千ひろなる川となりしを

○昨夜のやとりにてはもくめある衣きせし故寝かねたりと幸太夫申しぬ  
柚かたのこと奉りぬる旅寝なりともこゝろ得かねたることよもや板きせ  
て寝させしにはあらしと尋ねしにひのとんすに白き絹のうら打たるよる  
のものにて木目といひしは織あやのうきたるなりきをかしき事也

○廿三日晴 拂曉に吉田の驛をたちて船にて吉田川をわたりふしみの驛  
をこへ御嶽の宿にて晝かれひし夫より細久手を經大久手に止宿けふの  
みちにはたふけいくらもありて肩輿のものゝうきをもひやりしかは險し  
きみちは多く歩みぬ山水の咏よりも山路のつらかりければ

旅衣行なやみけりうつし繪にめつらしくみし山と水とに

昇行みねのつらさにくらふればくたるは安きものにそありける

流あへぬ汗もあとなくあらふ也すゝしくわたるみねの松風

朝に山よりくも出るをみてあれは何人と申と言って

けふりかともみやとはかむる都人麓路めくる雲の一村

○廿四日雨 曉より雨ふりぬ大久手の驛を未明にたちて十三峠をこへ大  
井にて晝かれいし中津川に至りて止宿此邊は海を去ること二十里餘もあ  
るへし然るに鮮けき魚なと給りぬこはいかなることや役人に逢なは必  
のちのこと斷ぬへしと心ひぬ恐入たること也尾州よりはいさゝかに思召  
とも民の患くるしむことあらはいかにせんと甚憚多く存し候ひぬ女にて  
駒ひき荷附なとするものあり都のはしためのうつくしき衣をも着て水ひ  
とつ汲まぬもありて悪事也朝夕早苗とる姿遠き山田に行かふさまけに百  
姓程あはれなるものはなかりき山より山をこへ出といふ文字にも似たり  
と出身のことゐはひぬるこゝろもて

末遠くのほるたよりのみちとてや山また山を重ね行身は

雨ふりして物荷ひ行賤のあはれにもみへしかは

輿のうちにはさまでなからに賤の身の雨におもきをになふあはれさ  
十三峠は數のみにてさしてけはしからさりしかは

わさ學ふこともかくなれ數多きたふけにあほきみるはなかりき  
同じ所の麓にて

人さとの近きそしらるくたかけのこへきこゆ也麓路のみち  
十三峠は美濃の國にて數のことくのほり下りあり尙それか上に坂七ツま  
てありぬこゝよりはこしのしらねなと晴る日にはみゆされ歌

十二分もひとつあかれ峠みちいやもよつたと足はひよろつく  
その上におゝひ分なるさかなつこれも美濃のうち斷をいへ

此雨に名所ところかやみくもなこちはしらねとしやれもようく

○廿五日雨 頃日本曾川水増居りしにきのふよりの雨にて船わたしなり  
かたしと昨夜申出るによりて滞留し侍りぬ木曾川はこゝより二十町もあ  
りて水のたゝえ百間計至るのはや瀬なりとなりきのふより雨殊に甚しこ  
れそこの蓑の毛もくつるゝと聞く五月雨なるへしやとりの窓より遙なる  
山田端山中津川みへてかなりのなかめはあれといかにもつれくには詫

果候ひぬ鍵を遣ひ刀を振り書をよみ候事書生の如し

里近き松の葉山の浮雲にみへかくれぬる五月雨の頃

あすも又雨にやあらめ遙なる山田にくもの立のほるみゆ

きのふきく瀬々の川なみおとたへて水は岩やの上を行也

晴間なくふる五月雨にきのふみし河原にけさは白波そたつ

旅衣しめりかちなる五月雨にかはこへかねてふりくらす日は

○廿六日南風強雨 中津川に滞留也木曾川十二三分之満水之由注進有之  
候あまりうきことにおもひて

遠からす山も木曾路を谷川にせかれてむねやわきかへるらん

旅衣かくもゝのうき五月雨は三十一もしにつくしかねてき

ふる雨に門田の蛙谷川の音や旅寢の友になりける

晴るゝかと咏むる空の打くもり又降しきる五月雨そうき

われこそはまさるおもひを五月雨にしらて蛙の鳴しきるらん



朝とく起しにはや賤の早苗とりければけふも及はさりける事とおもひて  
おもへ人此五月雨のあしたにも賤はいとはてきなへとりしを  
道しらて遊ひつくさは人なから鳥けたものとたかひやはする

○廿七日曇 けふもなを木曾川に常七尺餘みへし岩の水にかくれてみへ  
すなと聞へしにそらはおもふまゝにも晴やらてうき事にそありし  
わつかなる雲の絶間をかそへつゝやるせなくこそ晴間まちけり

こゝろなくうきしらなみのきしこへてせきとゝめにし旅のわひしさ  
きのふこゝの名産とて蕎麥給ひしにこゝろよくたうへける故にや又けふ  
もひる過になりて蕎麥給ひぬこゝ川さゝへの長かれとはこゝろなきこと  
ゝ笑ひし蕎麥をたうへたることの夥かりければ戯に

たへ過て御中津川の宿食に了簡信濃こゝはみのうち

○廿八日快晴 けふも水おちかねて中津川に止宿明日は附地村に参り可  
申とうれしく晴をよろこひ候附地村より檜木材有之候加子母と申所には

三里有之候右之三里は至る難所にて兩懸も通り不申候荷物はつけちにさ  
し置山こやの参り候山こやあまり宜出来候との事且は恐入且は治世の弊  
歟と密に患もいたし申候山に参り候はゝ急度一汁一菜にいたし可申と存  
居候最より晝夜繼にゝ薄しほのもの参り候由道中にゝ承り候以之外之事  
依之何となく當分山中にては精進と申魚類たへ申間敷と存居候

○本道外科兩人参り居候昨日外科参りフトヲ之藥とて何か粉藥差置参り  
候フトヲの藥と申候事分り不申候間得と承り候得は江戸にゝはシト又はフ蚊  
くひたる又は山中蚋ハのさしたるによろしとの事あまりの事にゝ士たらむ  
ものかく柔弱にゝはいかゝすへくともおもひ醫の心懸おとけたる事と漸  
に笑を忍居候然れ共是ことゝく尾州にて公儀を重し思召候より起り候  
弊にゝ則君の御惠にこそと君の御恩殊に難有奉存尾張殿の思召いとも難  
有候まゝつゝしみて禮を述置ぬ禹は裡の國にてははたかに成り玉ひ候と  
もみへ其國にて其大夫をそしらすとも承り候まして御三家かたしけなく

も上の御弟にゐおはしまし候得は只々恭敬のみ他事なく候よつて中間に至り候まで嚴敷いましめ置候得共あまり御丁寧にゐ内心是は過たることゝおもひ候程の事も有之候此事はつと御はなしは御無用に候。○加子母の山と申候はおくに至り候は美濃飛驒信濃の山々に連りみそれと申所有之候三境なるへし世に聞たる信濃の御たけ山の中ふくにつらなり居候由に候

うとむは横  
のかよひは  
のからひたれ  
のかよひ也

○廿八日曇但午後ひる前之義は前に記し候。○こたひ参り候加子母山の奥みむれといふはひた美濃信濃の三境と存せしに左にはあらさりけれ三浦と書てみむれと唱候由にしへいつ方より歎よしある落人の参りて住居せしか遂に一村といまは成りぬよし領所もしらすゆかりも不知只至強力の人と而已いふ傳るよし三浦の字と強力とによりて朝比奈なるへしとの考もある由也此所のもの男女のことはさたかには分らす男女共いづれも惣髪にて女にかねつけ眉するなといふこともなくたふといふものき

今般参り候  
所は此大に  
れより大に  
つと山にて  
候計也

てまことにゑその人とさしてけしめはあらさりけんと今日木曾材木奉行日比野源八物語木津川より道二十里其さま肥後五家の庄の平家の落人のこととに甚よく似たり此邊はもみとうひなといふ木ありて昔より切たることもなし御嶽山につきたる深山也去年源八かはからひにて切出せし頃人足壹人見へすなりければ尋ねしに二三里計わきにて其日に行逢たり曾あ人事をしらす只頻にうへたるよしを申に付飯給させ候處凡二升も其餘も給たり其まゝ息たへみるゝ殊に目くほみ肉おちて骨と皮而已にそ成りけりあやしといひしまゝにて里の親族に引渡しぬ追而聞しにわきの下にてつほうにてうちぬかれたることとき穴ありていかなる山の妖怪かそこより五藏六腹をくらひ血をもことゝくにすひしさま也飯もかの怪物もくらひたるなるへしとそその時人足の内頭分なるもの晝休の頃頻に胸のあたりを強くおしぬるものありて目にはさへきるものもなしよつて帯したる山刀をもて切拂たるに何のこともなくなりたり以上の二ヶ條は源八か

此山刀は双  
こほれたりに  
岩なとにあ  
たりたるこ  
しともあるへ  
しと源八申

まのあたりみたりしことなれば物語り候ひぬ餘はくさくさのこといふものもあれと受かたきこと多かりと申たり威權利欲にをされし時切拂ふことの得ならて倒るゝものは市中にも官途にも日々に多く子女玉帛のために血をすはれいのちの失ふものは玉樓金殿のうちにもまゝ多かり夫はしりたることにしあれば人怪ますして此山怪のみおそるゝこそおかしき事也壹人死せしより十人死せしはおそるへくまして千萬に至れるをや然れば世に欲ほとのおそるへく人を失ふ妖怪はあらさりけりけさ記へかりしに急きて洩しぬ母上の快ならせ給ふと承りぬ御とこあけ給はんととき召候へとて土産にまいらすへき單衣尾州の人にたくひて送り奉りぬ是はかさもの故序ならてはと申しき後れぬへし。歟五郎の尺とくうれしくも見候ひぬ今少しは出来ぬとおもひしにあからぬことにこそ尙怠たらずして學はゝすゝみもせんか。敬子の文筆のさまざまとけくしき故にや習らひのたからて和らかなる所なきにやこゝろはおたやかになりしや女の柔ならさる

は武士の勇なきと同しく捨ものなるへし。宣子の繪おもしろし尙精出さんことこそ。さよりの歌ふみともおもしろく候。嘉十郎よく勤候とのこと聞へ候安心に候序によろしく傳へ給り候へ

○廿九日 けふは曉より雨降出して申刻までにて止め木曾川のことまた通行いたし兼候との事川向の村より申來る此書面をみしに御矢文致拜見候云々と記し有之候間尋しにやしりなき矢の文通をくるくくと卷附岩の上よりたかひに矢ふみもて取遣いたし候仕來弓は強六分位之弓之由左も無之候ては百間に近き所はこされ申間敷候おもしろき文體也。けふにて中津川に六日滞留也めつらしきはいまた鳥を見不申候常に一番からすにて起候もの此頃は一番すゝめにて起申候江戸ほとからす犬の多こと他國にはなきことにて是は繁昌之地給物多きか故也。梟左あれば鳥犬はきりん鳳凰にもまさりたる目出度鳥獸也と江戸繁昌記に着せしは尤なることゝ此程おもひあたり候時鳥はありしや道中已來初承り候螢は至多し夜は

庭前星の如し江戸より至る大きく候

ほととぎす千さとの末の山住も音は都路にはかはらさりけり  
晴間まつころなくさむ爲ならめはたるは星とあやまたるまで

○五月朔日曇 少々は日かけもみへ申候中津川宿に滞留昨日の如しつれ  
くゝに所々の返事相認申候

雨もよふ心にかゝる高根なる行來定めぬ雲のむら立

五月朔日ひる後大に晴るころうれしき事也。川留中ひる後にそはうとん  
兩三度宛給りたり然るにかく長くなりし故にやけふは雜煮もち給りぬ。日  
々の御料理いたく斷りし故この頃は一汁二菜になりたり酒はいかよう申  
てもさかす是は子細あるへしとおもはる中間まで給はるものなしよき酒  
をしき事也。魚類のこと少鹽したるもの日々給はる道中人馬の勞おもひて  
斷れともさかすおもふむねもありて此程は菜大根の類出候得は殊におひ

たしく給へ魚類あり候時は少も手をつけ不申江戸よりさみそ類梅ほし  
などにて食事いたし候ひぬ某より前河渡こし候勘定奉行等酒好之由然に  
俄の出水にああと荷渡り越不申内川留に相成も引半てん計之由殊に好  
物のもの忽につき果て此節寒氣凌兼いかなる手段にてもいたし衣類より  
も酒をこし候へ左なく候は凌かれすと願参り候由矢ふみにては兵糧な  
るへく候處酒なくては落山すへしと之加勢のこひ方大笑也此事内々御普請  
役之小もの宿に

承り候由民  
蔵密に物語

○二日晴 朝きり夥し江戸にはかゝる朝きりをみす四ツ前よりころよ  
くはるけふ初めて單衣もちゆけふも尙川支にて滞留夫に付おかしき物  
語あり家來の給仕として十貳三なる童袴などはきて出る日このことなし  
みてたはれたることをも聞候よし雨の夕鐘きこへしを何時よと問ひしに  
あれは日ハヅル也と申ぬ夫は入相のことならめと申て笑ぬ日ハヅルと申  
は日果るにて入相よりよく字には叶へり又隠門のことをヲベンジョと申

せしよし關東などにてはヲメツチヨといふヲベンジヨは御便所なるへしよくことは字に叶へり田舎に古き辭ののこりたるにて關東にて申は轉しなまりたるなるへしけふ鮮のかれい來りしに此邊のものみなうちよりて海魚めつらしとてきよふせしよし彼童にさふらひ共給させしに殊によりこひたるとそ某かおもふ旨もありて精進なりとて河の魚類都而給不申候故味の程しらすさふらひ共の物語に古くあされたるにはあらず江戸山の手にてもてはやす鮮魚位なりとそ此魚かく三十里に近き山坂を參ること民の歎にやあらんと甚心くるしいかに斷ても聞さるにはこうし果候。この所を惠那郡といふ旅宿の前にかく惠那山みゆるのほり八里ありといふ木曾奉行はこれそ天照大神宮の産らせたまひし地にてかの山は御神の惠なを埋たる所にてうふね澤など申所もあり今も御神のみやしろの木は多此所より出るといふ實にやしらす○ほたるみんとて妻戸ひらきて中津川をなかめしに遙の川上に手まりほと火みゆる狐火ならんと申せしに家

來幸太夫か申せしはかのもの肥前の海にて船幽靈の火をみ又狐火をもみしことありしに妖火にはごこうなし是はごこうさゝめき候松火ならめと申しぬ果して松火にありける妖怪のまことの火用ゆへきようなし光あるとも火に似たるものなるへし燐の字をおにひとよみたるかと覺ゆ燐は隣にて火に近きとの字義にはあらずとおもひぬ歸りなは字書など穿鑿すへし是はつれづれの腔説也

○三日曇 午後より雨この様にては幾日此所に止宿之程も難計と下司之面々にも申談尾州之御家來等と相計りて樵夫などのかよふことはかなりに出來候由に付鶴飼ふねにうちのりて明朝わたり候積に相成尤かこ或は長もちなどは悉此宿にとめ置民藏番人として殘置つもあり

五月雨のうきとは聞とかくもうく日をふることは少かるらし江戸より持來りし股引脛中貳ツありしとおもひしに一ツならてはなし中津川にてとゝのへんとの事覺束なくおもひしか試に尋ねしに江戸はつか

しき程のこもん打たる木綿持來れり驚なから聊おもふこともありて御用  
中澤山是に而貳ツと成たり

よきこといひつゝも又おもふ哉ひなもかくまで今なりぬとは

○四日雨 おもひの外水おちたりけふは荷物等ことく渡すへき由矢  
文もていひ來りぬよつてとるものも取あへす強き雨をして宿出立ぬ中津  
川の宿の半より北へ曲りて飛驒の國の驛に向て參りぬ左右山に而山の半  
腹にみちありみちに隨ひて谷川流るそのけしき得も云れす都人のこゝろ  
にてはこはことく諸侯の下屋敷のけしき學ひてかくも大きく作りた  
ると云めりその谷川のおち口より木曾川の邊を行ぬわたしの邊に至りし  
に流の末一町計末は瀧にて其かみの瀨をわたる川の早きこと矢の如にし  
て殊に深くところく大岩ありて白波の立さまいかにもはけしきをお  
もひやりぬ舟はかの鶉舟にて至る薄き板もて作たる也あまりのおそろし  
きけしき故長持のせてわたる様をみしに小舟に船人六人うちのり四人は

棹貳人はかひ也又四人のものあさ瀨の流ゆるやかなるかたを岩のかしら  
を突なから川上へ遙にのほりて漸に急流のなかはにいたる時舟のかしら  
のかたを下のかたに向なから貳人ものかひもて流をたたくこと三ツ四  
ツいたす間に矢の如くに向ふの岸につきぬその時舟ゆるき白波はつと立  
しさま江戸の兒女にしあらは忽に膽きへ魂飛て前後を失ふへしとそみへ  
ける此川に鶉舟壹艘ならてはなし荷物を向ふの岸におくること三度にし  
て某か船にはなりたり鶉舟へ駕をのせわさと川上のかたへ舟を傾せて乗  
出しかのけはしき所にてはつかなる間にありしか舟ひくくと鳴しさま  
實におそろへき事也き夫より城坂といふ所十二丁計越へて苗木の城下町  
にいたる遠山美濃至る守城下也至るよろしき町也町年寄かたにて小休いたす表不殘こ  
し瓦にて大名の長屋のことし座敷明喜靖あり明晝の三ふくついかけもの  
惣檜の木つくりにてけしからぬ結構也こゝにて下役等不殘わたりこし候  
をまちにししに八時計にそ成ぬよつてけふは直に福岡といふ所に止宿せ積先

觸尙又差出しぬ此苗木の城下に賣女ありしや一軒十七八計の女三四人薩摩こゝより貳里餘をへて福岡に至るこゝは飛驒の國を去ること五里計山附にてすへてのさまひなふり也徒士以下のもの旅宿は坂をこへ一町計の所也参りし時はよくみへしか五月雨の又もはけしく降出て家の近邊の山々に雲翳しく出ければ徒士共の止宿の軒かすかにみゆる様になりたり是にて山家のことおもひやるへし

木曾川にかくを岩と申岩ありその岩みへさる程に水あるうちはわたさすと承りければ

待わひしこゝろもしりてはやわたせいつくみなそこ岩かへるとも

雲たちかくせし山とみへし峯を越ける時

花ならて雨にわけ行山ふみはまことに雲の中たとる也

當所の虫よけの歌千はやふると書てあり昔おとこやありけり吉原てふところにて千はやといふ遊女に振られたる時千はやふる神世もきかすの歌

よみたり遊女に恵にしあれば夫より千はやふるてふことは枕こととはとば申せしよし然るにこゝには千はや振と書てあればおとこおうなのみそかことせは必ふりつけられんとのましないなるへしかしこの娘には虫か附たるなといふ諺もあれば此うたおなし虫よけにはあるへけれともちわの虫よけならめといひてわらひし

○五月五日朝雨四頃より晴 六半時頃より福地村出立いたし田瀬村にて小休いたす此村名主の宅也なけし作にて本陣のことし此邊まことの山家にて一つ家などある體中にかゝる居宅あるへくとも不覺驚入此さまにては草そう紙芝居に山家一ツ家の娘に振袖など着せしもあり似合からさること然れ共必なくとも申かたかるへき歎夫より附地村にいたる本陣作門長屋等ありて古候得共よろしき居宅也けふの途中の咏都る唐畫の山水のことし附地村にて端午の故にや尾州より二汁七菜を被下然におかしきは宿のものゝ所謂なるへしなみのめしの外にもち米と粟と半分宛ませたる

強飯を出す珍敷ものに付給候處至るよろし本陣は山にわつかなる所三里  
 なれば村方もまた檜木山の麓にて旅宿の庭よりして檜山をかたとり作り  
 有也山裾のかたきり開てそこにもくさくら梅など植たりその上三十間許  
 には某が居間と凡五猪鹿の出けりとみへてしよけの垣あり附地村は長壹  
 里餘兩かは山にて開けたるは八十町餘なるへしけさきのふのやとり福  
 地村よりみへし山をこへかの村をみしに村雲かゝりてそのうちに白き壁  
 等かすかにみへければ

朝ほらけ山こへ行は雲のうちにきのふのやとりかすかにそみゆ

山里にありければ山中無曆日なといふ類にやまたは農業のひまなき故に  
 やけふの菖蒲ふく家もなかりければ

移行時のあやめはしらす哉けふも常なる軒の山さと

附地村のやとりにつきてのち空晴けるまゝ四方を見わたせしに山もてい  
 く重かつゝみたることく也いつ方も山にあらざるはなし雲の晴るに隨ひ

てみゆるさまおもしろし

さみたれのはれ行雲のたへ間より又も數そうみねやいくみね

壹村餘り大きく候間尋ねしに高貳百八拾石餘家數四百四十軒人數貳千六  
 百人餘と申しぬ巢鷹山ありと申しぬ深山のことおもふへし關東に候は  
 三千石の村なるへし尾州御領のよろしきこと相分る今夜之村より蚊帳を  
 不用といふさもあるへし夜綿入にてよろし

追加子母  
 山村也と  
 村内也と  
 いふこと相  
 分此隣村は  
 飛驒也

○六日晴 四時頃晝飯給候も、引半てんに相成附地村より昇續奥山い  
 ての小路山小屋に參る右之手續其外共都而言語同斷之珍事申中々筆昏を以  
 てつくしかね候義に御座候依之其九牛か一毛をこゝに記すみちのほりける  
 時尋ねる木はあ  
 りやなし呼子鳥おほつ  
 かなくもたとる山ふみ此所よりは馬は不及申駕も通り不申長持は勿論兩懸之  
 類迄悉に附地村に差置右之次第に付支配吟味方改役其外一同某は不及申  
 家來末々迄股引半てんに相成出立可成了に乘られ候場所はのり候へとの  
 事に而尾州殿より山駕籠被遣候此山かこと申候ものはめさるの大なるも



のに屋根を附夫に至りみしかき竹の棒を附たる也八丈まかひの蒲團并毛  
 氈を敷有之候これへのり候はほめ候御祭のけいこいたつらに申候  
 囚人のおくられものゝ如くなるへし一笑也珍事 供立之義第一に弓第二  
 に具足春負ひつに入有之候頼光山 第三狩人三人附たつれも鐵炮切火繩に西こしに簀を  
 具を附先立いたす是は猛 第四徒士貳人第五某第六吟味方改役同並吟味方下役  
 御普請役第七某が家 第八吟味方之家 第九足輕鐵炮二挺是も狩人 右之譯に山  
 のそみ候處風景得もいはれす高きみねにのほり又忽深き谷に下り其さ  
 またとへは上は山にて岩窟そひへ今にもおちぬへき體其山の中腹に小み  
 ちありてみちにそひてしみつ流れみちの下は目も及ひかねたる深き谷に  
 て水音幽にきこへ岩にくたけ候波白くよとみをめくる水深くしてみとり  
 なる景色咏はさて置行にあしもと無覺東おそろしき體也かゝる所江戸道  
 に候得は三里も其餘も行たると覺候頃以上中々木曾道中之如きにあらず  
 はしめてみし事に珍事 其五 谷へ  
 おり候頃丸木の長六七間なるを貳本わたしあしかゝりにはしこの如くな

附地村を小  
 ち三里と申  
 がことなりし  
 が中々五六  
 へし

な計にてこ  
 きりといふ  
 作るといふ  
 ものなしい  
 の替りしつ  
 れもふしつ  
 る也

るもの藤つるにてからけ置其上をわたる下は谷川にて十間もあるへし瀬  
 下は下り候處此處より尾州の留山たる由に候古き高札ありて岩より岩に  
 また十間計の橋板二板かけわ あり此邊のけしき別紙繪 其橋をわたり候と一し  
 ほ冷氣にて甚氣味わるき體也其所より山の中腹にはしこをかけたるか如  
 きものいくたひもわたり又は先に記せしことき山みちを行ことやゝしは  
 らくありて此間壹里餘もあ 出の小路山小屋に參る某并支配向之小屋に尾州  
 役人之小屋に夫々の紋附たるまく打其外袖方之もの共等の小屋料理小屋  
 等に至り候迄軒を並へ凡人数千人餘も居候様に相成居いにしへの富士の  
 かりくらありし時の假屋にも相類せしことなるへしと下役共申して笑ひ  
 き小屋のある所は谷川のかたわらを開きて建つゝけたるものなる某か小  
 屋は四軒半に十一軒もあるへし檜の木多く候所故屋根もはめも戸もすへ  
 て檜のへき板にて作り客に對話の所壹ヶ所八疊にてうすへり三枚宛かさ  
 ねしきあり其向は某か居間八疊是は疊しき有之客間と居間の間三尺に長

貳間の土間にて朝夕夜共に濕氣はらひとして常にこゝにて火を焚ぬ家來共の居る所いつれも同じ此小屋に民藏其外士共中間壹人足輕壹人居候其外徒士中間共等は貳間許隔向の谷川にそひ候而十間計の小屋あり同所にをり候某か湯殿は五六間隔たる山きしにあり兩便所は七八軒脇のこれも山きしにありよつて湯殿にも便所にも帶刀にて參る夜便所に參るにあまり遠きまゝ家來に燈火爲持候而參る以上之事共都某并士共のこと給士するもの山手代貳人百姓六人某か目通中間の給士するもの組頭壹人百姓貳人日雇三人附おかる中間共用事あれは手を鳴して人を呼遣ふ中間のにいよありて夫よりもかけ桶かゝりて湯のころは所々湯をかへる以上之事共し川は落るのみ水は清水をかけひもて所々の小屋に懸る湯殿の湯わかす所ありて夫よりもかけ桶かゝりて湯のころは所々湯をかへる以上之事共し○七日晴 五時頃より山見分に參る山ことにけはし中々きのふの類にあ

らす先つ一事を申さんに枝には五尺計にて細き齋口を用ること也けしからさる事とおもひしに山へ參りてはさきへのほりしものは跡のものゝ頭を踏かことき山にしあれば彼齋口を道のわきなる木など打こみ候而屋根へ登るかことくつ絶るさかり候而上るそのけんその事恐るへき事ともにてこゝに記さんには偽とこそ人のいふなるへし右を譯故徒士は不及申鍵弓をも爲持兼尾州の仕來たり候由に而山にては家來共迄いつれも羽織を着用におよはす長脇差壹本宛也鍵を爲持兼候に付用意の七尺餘の手鍵を爲持士貳人足輕其外都合十人宛召連る狩人鐵炮にて供いたす事きのふに同じ山中やしやひしゆくしやくなきなどいふもの多し假屋に蠅は常にかはらす蚊は壹疋もおらすありくもの類は大なるもの多し都而蛇は見不申候前に記せし様に付くま猿はもとよりいかなる山の妖怪なりとも遠くのかれたるへしとみなくいひき狩人はこの體にては當分得ものなかるへしといたくこまり居候よし谷川のおと桶をもる水大風雨よりもはけし

なれやらて雨ときしはかけひもる水のしたゝり谷川のおと  
山中の朝のなかめを

さしのほるあさ日のかけはほと遠き高根の梢てらすにそみゆ  
けふ御用状參る。宅状も來る。新右衛門より越前守殿御自書届來る。母上様御  
直書御機嫌能との御事奉伺恐悦と存候。瀧三郎船頭笠ひやめし草履にち稽  
古として罷出候由扱てく目出度事無此上此心持か上之御沙汰大切に存  
候は、我家長久之基と出立已來文通之内第一之大美事にち大悦無此事此  
ころ諸事にかよわせ度ものと夫而已のる也

○八日雨 天氣合に付一同場所なし今日は下々迄わた入にち土間三ヶ所  
に火たき有之候夫にち窓明置候ことひやくいたし相成不申候窓の向四  
五間計の向の山の木立より雨雲たちのほること湯氣のほるかことし、山岡  
清兵衛つれくそはを打たりとておくるまことに名人也いたつらに  
甲首打たる程の御手からつきて長きはそはの勳功

焚火いたすに付灰のたつこと夥し家來には客無候節は手ぬくひをかむる  
ことをゆるす某は貞助縫ひ候あさきの豆藏頭巾を冠り居候そはに大刀鍵  
有之熊のしき皮にち焚火の體山家の趣き繪本にみへ候山賊の頭のことし  
○九日晴 單衣半てん并胴着にて山道奔走いたし候得共汗出不申候。山中  
之けんそにて難義なることいふはかりなし。山に入候よりいまた獸類を  
見不申候と木曾之奉行に承りしに袖かたのことありては諸獸ともに三山  
も四山も逃去候間かの役人などもみしことなしと云

○十日晴 五時より山に參る。けふにて山中三日になりぬみしものは檜木  
之類聞ものはこま鳥。せきれい。ひよ鳥のことき聲の鳥。鶯のみ也ほうくと  
鳴鳥あり鳩にはあらずつゝ鳥と云もの、由也聲のみにてかたちはみす呼  
子鳥などいふもの此類かもしるへからすこへさたかならすさて又人を呼  
にもにたれば也是も亦旅考なるへし。袖の頭にきくにり是はあけまつ宿の市左  
衛門旦那といふもの也。二十六年巳前まではわれらかときも受負材木きり出しな  
たり其頃はかくは山はあれさりけり二十六年このかた田中や半十郎壺人の引受になりて

木曾山とくく猪鹿狼の類も里山には居り候ひぬかゝる深山には何にてもおらす品に寄熊と羚羊計はさひしきことまれにあり羚羊といふはかしかのし、或はに夫も柚かたにはおそれて遠く數里の外に參ると申しぬ。けふわた入二ツ位にて焚火にあたり候よろし。けふ新左衛門幸三郎より御用書物之儀に付委細之書狀來る入念候事右に安んじ候也。矢澤監物并大越より之書狀相届く。夜に入俄に雨ふる。

○十一日晴 例之通山に參るけんそにも大になれたりけふはくたひれ不申候日々のみち坂は中々以大二階の急なるはしこよりもけはしきのふより考候る皮の手袋をかけ大體之所ははひ候て登る鳶口よりもよろし。きのふ新右衛門書狀之内に廿九日附にて廿八日より母上様御快との事記し有之十日頃は御床上にも可被遊と之御事此上も無之喜悅何とも可申様無之候右に付かしこみ恐入候難有御事あり某か母上の御病承りしは二十八日に而則その日に恐入なから外にいたし候方も無之に付厚く東照宮奉

念その日則洗米其外護符等相添書狀差出候ひきさて又十日頃には御床上にても可被遊と之書狀則十日に相届候事も不思議なりまことに神の御恵にや此上もなき難有御事と落涙におよひ候直に袴着用手水を遣候る御禮の義奉念候。きのふはら并脊中の灸事いたすかたは一日をき三里は日々也。○十二日晴夜雨 五時より山に參る。けんそこのいふへき様なし留守の主は知給ふへししらするものにかたりぬとも偽とこそいふへけれ

○十三日晴夜雨 五時より山に參る尾州より山小屋に御使被下之。山のとけふは別おけんそ也。山橋殊に多し山橋といふものは山の半腹又は山より山に移り候ところへ小丸太ならば三四本大丸太ならば貳本程長さ三四間より五六間までに懸渡し右之上を通ること也。はしめは這ひ不申候難成様なりしかけふはさまでも不存候山中はこの葉をち重りて江戸のはきためより大に濕りたるもの也。夫をわらちにて歩行候間ぬれたるわらちにてかの山橋の上わたるは下は數十丈之谷故にあんし候。あしもう

こかさる譯に候得共人のみるめをもおもひ彼是にてさして疊の上にておもひたるよりもくるしからすわたりぬ是山内に而獸物よりも可恐もの也けふの道には夫等之所は三拾ヶ所も四拾ヶ所もあるへし山の木を切候而谷へおとせし時の音し殊に大造なるもの也雷の如し一通りの雷よりはおそろしきおと也

○十四日雨 けふは山に不出柚かたのことはおもしろき事あり其一二を記す谷こしに人を呼にくちのうちに笛を置呼ふかへりふれなと小屋前の峯に參り此笛をふく也聲をかくるにいかなる時か口の手をあてアハ〜と呼ふこと小兒の如し糞のことをそこにかみそりありなといふ剃刀といふ譯しらす晝と夜食の間の食事を二八といふ右之二八役人も給る尾州の役人出御二八に可仕なといふはしめはしらすりき此節養生のこと古の如し第一怠らす火をたき候事濕氣を拂ふ事多し朝は小屋の棟迄も雲懸候得共夕方夜臥る頃までは雲かゝらす小屋より先は雨中なとこと〜

二度目の御  
はちまたと  
といふこと  
かと民蔵い  
ふさもある  
へきが

火をたき候  
時は山の妖  
怪參らすと

申候由也い  
ふしさんよ  
うするめい  
つれも山氣  
よけ也

雲也こやの前五六間の處までは雲來る所々に而火を焚うちは雲其谷中に少しと柚は申候火は第一之もの也時々五葵散をのむ是は山水至而清し然れ共甚寒くしてつよし柚のいふ都人にはよろしからすと故に右之防也日々障氣散を飲む此藥山嵐障氣をよけ候故也山中日のあたる所は随分あつしみねにのほる程風つめたし日かけに休めは甚ひや〜いたしくさみ出申候其時茶の替にふり出し給申候家來共其外山中に參り候已來至而少々風ひきたるか如くにて進もせず又更になほりもせず醫に尋ねしに是則山障の氣を受たる也といふ右之防也熊皮并毛せんをしき其上に居る是又濕氣よけ也寝る時も同斷某儉素を好み候得共是は衆人に同じ木曾奉行并其下役共其外柚の親方といふもの悉くに熊或はさる或はてん或はかもしかの類にて作りたり六七寸四方の蒲團を銘々帶よりして尻之邊にさけ置戸江に而米つきの前をさけた一寸木の根にこしをかけ候而も右之皮をしき候事也るなうしろにさけたる也

亦は必用ひ候様尾州之御醫師申聞之并尾州よりも山氣の防とて某并家來  
 中間并支配向末々迄御酒被下之彼御家來も同様に亦別段犬山産之忍冬酒  
 壹器支配向并家來にも被下之依之中間徒之類六さいに酒給候義をゆるし  
 其節は家來相改候亦中間頭は渡す餘はのみ候義かたく禁し有之候某并用  
 人侍は夕方並之盃亦三はい至亦之小器に候得は五ツに限り酒給申候尤右  
 には一てうしの酒よほと残り候由也中間は日々酒給させ申度由尾州之  
 御家來より再應談し有之候得共用人民藏合點いたし不申よつて前文之通  
 也民藏はまことに少々の忍冬酒をたへ候由左なから常の酒は少しも不飲  
 候由今日迄家來之内壹人も酒のみたるかとみへしものもなし山こやは障  
 子一とへに寝起いたし候間可隠様もなし中間等の酒給不申候は不便の由  
 等申聞候ものも有之候得共民藏一圓かつてんいたし不申よつて本文之通  
 也同人かゝることいくらもあり安心也日々湯之時鹽を入はいる是もしつ  
 はらいの心得也うかいの爲歟濕はらいの爲歟参り候日より湯殿にしは有

紙をあけうは  
 紙をあけうは  
 紙をあけうは  
 紙をあけうは

某にはひそ  
 某にはひそ  
 某にはひそ  
 某にはひそ

之候よつて前文之通也。鏝の素こき居合等にて汗を出し候こと平日の如し  
 山へ参りくたひれ候時にても少もおこたらす是も發散之ため也。日々米麥  
 半々のめしをたへる是ははれ不申ため也。山を上下いたし候度々ひまあり  
 候得はしつかん。ふしの邊をみつからもみ不申候是はかつ氣を除ため也。山  
 坂上下の多き時ためしみ候時にふしの邊必こり申候こり候よりほめぐり  
 を引出し夫よりかつけになり候歟と右之防き也。日々三里の灸をこたらす  
 かた脊中にも時々すへ申候。茶の時必梅干を給へ申候。茶をけに胡椒入たる  
 菓子をこしらへ参り有之候間給へ申候。山きらいをせんし置日々給申候。蒼  
 求を雨の節は焚申候。夜は澁ひきの紙てうをつりいね申候。是は某に不限山  
 巧者のもの其外同様也。火の焚かた少節は紙てうしめり候由此度の山は前  
 後まれなる多人數故人氣にて帯てうしめり候ほとのことは無之候。寢候所  
 のたゝみの下の澁かみをしき唐からしを蒔置申候。是もしつよけ也。便所に  
 帯を置一夜に亦殊之外しめる幕なと夕かたはしめり甚し夫に亦餘の濕氣

なもつれた  
りと奢たる  
こと悪へき  
こと也

おもひやるへし。五月十六日は六月の節なるに晴候時にてもわた入裕位にて火を焚居申候以上風土之事なくも火を焚不申候内は小屋の内をも通るといふめつらしからさること也くもといふもの江戸にては空にのみある故前のことく記したらんには怪しくも覺え珍しくもおもひ可申候得共左にはあらさる也くもといふものは木立の濕氣。この葉のおち重りてはきためのことくになりたるもの。いつれも土の氣ともにもむれ立てかたちをなしたるもの雲也雲の小さきものは湯氣のたちたるとはきたための烟にて雲の至るうすきは水戸殿の御庭の木たちなどの類雨ふりの頃うちけふりたる則うすきくも也雲は以上二ツの至るこきものゝかたちをなしたると見候へはよろしかるへきにや右はけふ居る所のわき四五間又は十間もある所より雲をよくくみながらしるし候

○十五日雨ゆふへは雷氣也 山中の雨當惑之事共去ながら調物ありてけふまてはさしてつれく無之候

○十六日晴ひる後より曇 山は可行谷川のはしおちて通路なり不申候との事に付山は不參かの細谷川の丸木はし故さして出水といふにあらされとも流失せしよし也。けふは六月のせつと申にことにさむしわた入に而例の通小屋内四ヶ所にておひたしく火を焚申候終日焚候得はあつくはなけれとも冬こたつによひたると申様なるこゝろもちになり申候なかなか障子等少もあけ置ことはならずゆふへよりの寒さことにつよし民藏は曉ねふりかねたりとまことにうそよりも中々まさりたる事也。段々母上は奉り候日記御なくしなくよく御集め御とち置可被成候右はさと事きつと引受可然候

○五月十七日晴八時前より俄に雨に成 五時過より山は參るけふの所は山の字を高垂といふ。山のなかはは參りし時案内ものこゝに大なるたるありかけにてみへすといふたるは石にても成たを樽とおもひしに方言にて瀧のこと也。そはめつらし見可申といひしに歸り候節にと案内もの云

しまゝ歸り懸廻りみしに高たる谷の川にて橋のわきより下り大石の間つ  
 たひ百間計谷川の河原をさかのほればそれよりかみ川巾貳拾間計に右  
 右は高五六拾間計の岩にて其所を參ること百間計にして瀧壺に至る左右  
 之岩につゝしの花さき巾六七間に高さ六七丈の瀧也此所の咏すへて得  
 もいはれず木曾奉行等も深山の事に付初参りしといふ某熱田にありし  
 頃武邊の物語として参りし尾州材木方之御家來久米義太郎といふものあ  
 り子細もあれは度々相願しか某は家來に申せしはこたひ出ノ小路の山袖方  
 不達家來貞助めと出會之もの也ことあり此山往古より圍山と申て伐木のことも候はす然るに人の大勢參  
 りしによりて彼山鳴動し其こと預る白鳥の役所までも一夜鳴動して怪し  
 きことも多かり必こゝろさせ給へといひてかのものゝ信する佛の寶牘ウラカ  
 と贈りたり某はわらひてこゝろにもかけすありし夫より彼山に往向ふみ  
 ちにて往來の馬牽荷もつものなどの口々に申せしは往古より人のいらさ  
 る山へ人往たりしかは山殊之外にあれ袖人三人行かたしらすなりぬ又彼

久米義太郎の  
 信仰者にて  
 妙見のふり  
 なれは民蔵候  
 右はくれし  
 くはは遺し

山に神代よりの檜二本今も存して枝計にても壹尺餘の柱にやすくと成  
 めるもの數十本とり候へしかゝる不思議の大木を先づ參りし山岡清兵衛  
 の伐たりしに血迸出ホトハシリて袖かたのもの悶絶したりなといひきいしへ熊野と  
 本木と唱て大木貳本ありしよしは御代官より申また出の小路の圍山よつて家來な  
 にて往古より人いらさるよしは尾州よりかも執政之衆中に仰られたり  
 と懸念不少色々のこと申せしかゝ某はおもふ旨あれはこゝろにもかけ  
 す是は木は宮室つくり可申ためにて公の御城の材たらむは上もなきこと  
 也然れば山神等悦へきの一ツにそとおもひし計也こゝろにもかけすかの  
 山の參りしに出の小路の圍山なることはまことにてされと十八年山のこ  
 と奉りし木曾奉行水谷惣八は五度まで此山の木きりたりと申ぬ山中に伐木  
 いくらもありけるも二本木の唱はあれといつの昔しかあとかたもなくなり熊  
 野といふは二本木より三里に近き山也けりまして妖怪等のことはあとか  
 たもなき事也かゝることはまよひやすき事もあれはこゝろすへき也  
 高たるにて



紋所きつこ  
う三ッほし  
常通也

此いし支配  
勘定出役山  
岡清兵衛小  
屋窓の前  
人は山留  
りたる守

あほきみる名にしおひにし高たるの雲のみねよりおつる瀧つせ  
いかなれば来てみる人のなかるらん千世引つゝきさらす白ぬの  
くろの絹并かんしやにて羽織壹ツ宛御こしらへ置可被下候歸り候上にあ  
入用有之候。木曾奉行之話に山より大なる石落ることあり既に先達る夥響  
にて小屋の上は三間餘の石落小屋の臺所微塵になりたることあり其時は  
夜なりしか山より石のまろはるおとに驚て山そひのかた逃出しいのちを  
ひろひたりとは是も例のおとしならめとおもひ居たり然るにけふ七時頃山  
より石の轉りおつるおと聞ゆおとろきてまよりみしに某か居りし前よ  
り二三十間程のところへ石壹ツおちたり此所は中間と外々小屋との間也  
けしからの音也きけふそはしめて前の話の偽ならぬをしりぬ孟子の命を  
しるものは巖牆のもとにたゝすと申せしは實なること也敬身の君子こゝ  
ろあるへきことにて行軍などの山の下は小屋はたてまじきことにてや跡  
にて吉藏見に参りしに小屋より三四十軒計の谷川のうちへおちたり大さ

は六七尺も其餘もあるへしといふ其餘なを一ツ大石のおちかゝりたるみ  
ゆ是もおなし所也民藏いふかつばかこの大きなりと某もみしに民藏のい  
ふにおなし山の中ふくにてかくみゆれば下へおちたらんにはこれも七尺  
前後はあるへし某か居間になりたる所はいつれの山にも三四拾間もある  
へしかゝることをかねてはかりたるとけふそ心附候貞助いふ以前加賀之  
家來に道中にて山より轉おちし石にうたれ人馬ともに微塵になりたるあ  
りしとまことなるへし今日の目前にみしは中々はなしの出來筆のかきつ  
くすへきにはあらさりけり

○十八日晴ひる後より曇 某はあしたより六月七日八日の頃まで木曾の  
山々不殘見まいらんと 召連候支配向佐藤清五郎御  
普請役貳人狩人いしや等也 そのしたくにて山は不參  
御用狀等之調也

○十九日雨 樵夫の通路に付雨天には岩ぬけ等之義心配之由尾州之御  
家來申立に付出立延引雨にて山留とは珍事なるへし。けふらも女の人足參

るもとよりまゆ毛もありかねをもつけ不申候其上かのたちつけをはき居候間甚男女の差別不分明之もの也けふ參る人足の内に女壹兩人ならてはなし夫にておもひやるへしけふ某か出立延て其こと傳へ不申内は小屋の前の木の根岩かとのある所々にて男人足ともにねころひ居候。加子母村は前にもいふことく美濃飛驒信濃の山におち重りたる所に村をなしたるにて夫か内にも出合のものは鳥けたものに似たり常にし、狼を食としみそ少計と米五合あれは獸を食として三十日も四十日もやすくと山中に居候由也。加子母村のうち三浦のうち彼吉秀などの所縁を尋ねしにうけかたき事のみ也吉秀か誰かしらす三浦大夫之墓と計記せし墓ありそれかほとりに居る百姓は三浦を名のる迄にて其外のこととは知らずといふ。此みむれのうち小郷かしの郷と申はまことの田舎也わつかの民居の内獵師半に過たり夫か内公は尾州より被奉候巢鷹のこと奉候ものは辛苦のものにて既に夫かために眼を破頬をついはまれて人類とは難申もの多しと承るたか

はひなを取たるあとに日のまるの扇を置事常也とぞ

○廿日雨 所々の山橋損して通路なりかね候との事にあけふも出立ならす雨にて山留とはめつらしき事也。山居も今日にて十五日程こゝろみたるに變りたることもなく至るすこやか也よつてまたけふよりかの猪口に而二ツつゝの酒もやめ候けふはきひしき雨故にやみる間に四五間のさきもみえぬ程に雲かゝり又至る近き所の雲は消て漸にみねの梢なとみゆることくなることしはしの間にいくたひか變ることおもしろき事也けふは雨故別る山のしつ氣ををそれ朝より夕まで上下五ヶ所にて火を焚つめたるに小屋うちもの悉かわきて衣類なとまであたゝまりたり日くれになりたればのほせ候而冬こたつにあたり過たることくなりぬそれにてもみなくわた入也けしからさる事也。新右衛門心願のさた目出度かるへきとを風聞あるかたより申しぬ若左もあらは此程なるへきにやしはしも忘るへからさるは勤と謹の二字也けり

山のより下り  
衣類等けふ  
しまりたるよ  
しとおもひ  
しは其うち  
にあしきと  
にありしに  
てあしきと  
心付はそれ  
る也なれ

○廿一日雨 けふも途中差支に亦出立いたし不申候

○廿二日曇時々雨 山小屋出立いたす小屋には民蔵中間壹人殘置御勘定小屋方共外共小屋に殘るもの尙多しより附地村までは三里なりと聞しか五里も六里もあるへしと思ひしは山になれざる故にてけふは實に三里くらひとおもはる途中程々狝の袋入鐵炮等出候事山の參りし時に替らすはしめおそれたりし犬かへりの難所等いとやすくとこへたり是にて今迄の山中峻岨のほとおもひやるへし小屋より壹里半計里のかたへ參りければ山の姿もかはりいかにも廣々といたしたるこゝ地したりまた壹里計參りしに山に入たる時はこゝにも人は住居りけりと驚たる一ツ家谷間にみへさなへ植たるけしき等人里うれしく覺へたり夫より山なりけりとてはしめことゝ敷記せし庭そひの山にしかよけのある庄屋のかたへ參りたりしに山中とは都而格別にて江戸も程近きかとおもはる計也此所中山道より十里之山家なれともかくの如く右に亦けさ迄の山小屋のけしきおしはかるへき事也附地にて晝食いた

し夫より山みち壹里半の峯一ツこへて前にも記し加子母村に參る隣村は飛彈國也こゝのものは鳥けたものゝ如くにきゝ又山家のうちの山家なるに庄屋伊東某か宅惣門長屋に亦玄關貳十二疊敷鍵鐵炮おひたゝしくかさり某か居間は十八疊に亦床違ひ棚附次之間も十二疊にて同様懸物其外ともけしからざる事共土佐畫彩色武者之金屏風壹双居間に建めくらし天井は惣もくの本くろへ杉其外右に准したる事にて中々かゝる宅東海道の本陣には見し事もなし驚入たる事共是もかの珍事之内の一つなるへし

山ふみのなれしそしらる幾里かきしより近くおもふ歸路

いふせしとみし山さとのめつらしく都めきたるこゝちこそすれ

○けふは加子母の旅館もあさしゆはん八丈の單物にて少々あつき位也山とはわた入とたき火たけの相違有之候

○廿三日 曉より出てみうれの山三國の峠に登らんとせしにこの頃この邊の天氣くせのよし雷すさましく雷鳴て雨ふり出しければ登山は止め五

時頃より晴におもむきたりけふは朝は袷に單物位なるあつさ也ゆふへは蚊帳をつらす此邊は夏蚊なしといふ土用のうちもこれより少あつくなる位之事之由ほとゝきすは多きさと也

きぬかさねつゝもさつきはさつき哉おりはへて鳴山ほとゝきす

蚊遣せすうすころもきぬ山さともわかなへにこそ夏はしらるれこのさとは蠶もは口なりとみへて桑はことくく植てありければ

うへわたす桑にそしらる玉の緒をこかひのいにつなく里とは

旅宿には馬具ゑひらなともあり笠の善悪はしらすかけたるあめ色の茶碗をうるしもてつくろひたるに茶さくふくさなと添て茶點して給へよとて出しぬいなかは懸物の古書などは更なり今江戸にある五山天民等の書玄對などの畫の類贖物に付此茶碗も價は高けれとも贖物なるへしとおもはる甚しきは書畫のうち其宅に參りてふくろ戸なとかきたるとみへしものに贖あり人物も贖ありて某は文てう某は五山天民に候など申歩りもの

ありみへし山家の都ふりしらぬは可憐事也此邊海は三十里餘もあるへし遊女はなし民いづれも質朴也かしも村千百石餘にて家數五百軒高持四百六軒無八十人數貳千四百人餘ありといふ居間の前より子供數多遊ひ居る中に十三四才計なる女緋ちりめんのきれをかみにかけたり今はかゝる山家までもかくなりしにや此上もなきかなしき事にて家國衰微のしるし也可悲事也某八九才計の時父上に召具せられて牛込肴町のひさ門天に參り歸りに小の澤といふ香具店にてちりめんの如く昏をそめたる髪にかくるものをとゝのへて妹か土産となしたり其頃はかみかけの紙いくらも店にならへありたりと覺ゆ三十年に不及してかゝるさまいかに早く世は衰けんかなしき事也夫より又四五十年已前のことなるへし某か祖父にておはせし高橋小叟殿の二十才餘の頃奥平大膳大夫家來に主人の弟持しを賞候もの壹人至る奢候もの壹人以上貳人外銀のきせるもちたるものはなかりしと也經濟に預ものこゝろすへき事也遠からず眞に挽回せさらんには悔と

もをふへマ、よ脱カからさるへし可恐事也尾州の御家來木曾奉行日比野源八物語に尾州の御初代源敬殿ある時東照宮の御供にて御膳被召上候節御壹人辨當箱に入て被召上たり其時夫は何と東照宮の御尋ありしに辨當箱のよし被仰上ければ士のあるましき事何故焼飯持さりしや其奢の心にてはさてさて國政無覺束脊は亡國のしるしとてさんくくに被仰源敬殿甚御迷惑ありし由也是は尾州にて某か山中へ參候時所々にうすへりをしき茶被賜辨當など出候故殿敷ひゝゝ山中のこと焼めしみそこそ可然旨度々申候に付某か武篇好にてかゝる故實をもしりて申にやと源八申しぬよつて某答しはかつて武篇古實のことしらす只々百姓の嶮岨持運ひ割烹のこと可憐故に段々申せし也源敬殿の御物語難有御事と答置ぬ序にいふ源敬殿は木曾山被賜しは御勝手の賄入用之事御臺所引移し給ふとも大判壹枚宛日々たしたらぬには事足可申よつて木曾の山被賜候間此山より日々大判壹枚宛程の材木を伐へしと 東照宮上意ありしよし左候得は壹年に四千兩内外の

此杉つえの  
しま、枝葉生  
したれはも  
てくめも逆  
て枝も下に

ことなるへく間永代きるとも山のつき候事はあるましきをあるにまかせて伐出し近くは用途のこと夥其補として町人の受負といふものにして伐出せしかは大材のある山は出之に路壹丁所になりたり可哀こと也と材木方吟味方之内名はわすれ候こゝろある體にみへ候もの四月十九日熱田の旅宿へ暇乞として參候節物語候此もの塚田多門の弟子に  
多學問の心懸あるもの也○今日五月十二日附母上より御書狀十一日附之日記右に添候新右衛門書狀大炊頭殿公用向之書狀○土原次四郎より之書狀五月三日附坂本熊次郎より之書狀○さとら之書狀右之通相届○小川文菴等之醫案承り母上様御不快大安心いたす文菴には肴差遣可申候事○御帳狀寫來る。文菴之肴は歸府前迄に到來之品見つくろい可遣事

○廿三日 曉よりよくはれ月清し七ツ時より支度いたし途中松火てうちんにて小郷に參る是はかしも村之出郷也獵師多き所也文覺上人之舊蹟とある碑のわきに地藏堂あり三間四方計にてきれい也後に頼朝の杖を立た

向といふお  
ほつかい  
枝は下向  
たなからみ  
去るかも  
たのからし  
みて上は計  
み也

此邊温泉  
ありといふ

るか枝葉を生したると申杉あり三拾間四方計にはひこり四丈廻りあり根のかた所々皮を取有し小兒の夜啼なん産をこりの類のましないになるといふ此所より肩輿を下り山支度になり三國の峠へ上る加子母村より小郷までつま先上りにて壹里半麓より峠迄二里の上り至る急也西北のかたは水分れ候は飛驒國東南のかたへ分れ候は美濃の國也その兩わかれを境としあれば左は飛驒右は美濃の國を踏行也せつてうに鳥居あり此所より北のかたかと覺ゆ信州の御嶽山みゆる此せつてう眞北は信濃西北は飛驒東南は美濃の國にていつれも兩分水を境とす絶てうにてしようきかゝり境を尋ねしに加子母村住尾州木曾方吟味方并山守山木瀬衛いひしはしようきのある所は美濃あしのある所は信濃飛驒にまたかりたるとみゆと申しき此もの至る質朴の老人也申かた甚奇也戯に微身を以三國跨候は富士に似たる様にておかしき事也とて笑ひき此せつてうに赤き鳥居あり其所より御嶽を拜する事也某はしめいつれも拜いたす御嶽はさしわたし五里もあるへきよし麓の板敷平といふ

所より地獄谷といふゆをうに山もへけふりたつ所よくみゆる洞々には雪いまた不消してよくみゆるこゝより尙又飛驒信濃の境のみちを下り所々一覽之上もとの峠は上り半下りしに兩ふり出し前の小郷は参り小休いたし旅宿は七ツ半時頃歸りぬ三國峠は参り候ものは柱を建るよしにて則三浦山立木見分川路左衛門と認下へ召連参り候佐藤清五郎其下は下役出る村上愛助の名前をも記し裏は天保九戌年五月廿四日と記したる檜八寸計の角物を建たり○三浦の谷通りは則木曾川の源にて瀧の左右を以飛驒信濃の境とす此三浦谷通りは内所々に三十丁貳拾丁位に打開けて村をもなしぬへき所いくらもあり此ところ之内中さゝめきといふ所に三浦大夫の墓あり是三郎吉秀か古蹟といふ昔は此所に村ありしか當時は古き墓ともみゆるものいくらもある計にて石碑もなく三浦大夫か石碑のみこのりなるのち三浦一族は信州大瀧村三浦につゝきたる御嶽の峠也その大瀧と加子母は小郷に移すみ此二村今も三浦といふもの多く大瀧は三浦姓計に

て既に大瀧より小郷に移住候三浦彦兵衛といふもの此度も案内に出たり  
 此もの巢鷹のある所を尋ぬることを得たるものにも熊をもよくとり得たり  
 り既に熊を見附くみ合山刀に切し時腕を被喰今以あとありといふ此邊  
 のもの熊を手うちにいたし候は珍らしきことはおもはぬよし也此彦兵  
 衛下役愛助を某より先に遣し三浦山の奥まさ小屋其外所々を見改しめ四  
 日之間正小屋に止宿中彦兵衛案内に出其内鷹の飛行をみて木の上の登暫  
 見居候かこゝろや附たッけん其曉にひとり小屋出て鷹の巢を尋昨日歸し  
 といふ山中におそろしきものは山ぬけひるたに其外おそろしとおもふも  
 のなしと小郷の百姓はいふよし也○山廻り瀬衛いふ三浦には寶曆の頃ま  
 て山男住て出會しものもあれと此程はかけたにみしものなしと○彦兵衛  
 は三浦の末也とてかの大夫墓をことに尊信し愛助か案内中も度々参り拜  
 禮せしと愛助いふ三浦山に参り候途中の谷をへたてかしも前山に巾五六  
 間丈四五拾間の瀧あり遙にみゆ妻瀧夫瀧と二ツありよき瀧也

此事信し  
 したし尙尋へ

めつらしな山のなかはにかゝりぬる雲やおとある瀧の白糸  
 うらみせし千とせかはらてともしらかつれそひかゝるめをとてふ瀧  
 木曾川水源まさこやの下牛淵といふ所にはあめの魚たなひらいはなれい  
 山めはや至多し壹年此邊伐木として人足参らざる頃は川をわたるもの  
 魚の類也。かるさん。之内魚はさまり候あかる位の事也伐出中とりつくせしか  
 今も猶多し大さ八九寸餘のもの日々三十餘を得ると愛助いふ。文覺の舊蹟  
 尋しに昔此かしも村之内小郷にて文覺相果箱嶽小郷よといふ所に埋め威  
 徳寺多聞寺といふもありしか廢地に成當時は寺あとも唱來る地あるのみ  
 其外舊蹟曾あなしと土人いふ。小郷のものは鹿冢と遊ひ候眞の野人なりし  
 かれともけふ雨やとりせし宅は某清五郎か方ともいつれも天井を張床に  
 かけものをかけ短尺かけなとあり開けたる事也しかし疊はなし備後へり  
 附のうすへりを濫かみの下になにかはしらすいれその上へしき有之候。夕  
 かた強雨也

○廿四日快晴 初る暑氣を知るかたひらにてよろし六半時過の出立にて附知村より田瀬村福知村を経て苗木領遠山美濃守城下苗木町に止宿此途中之體五月三日四日五日の所々合せみるへし

十曲峠

○廿五日晴 苗木町より上地村に至り例のおそろしき渡りを越へてはけふ少して四日ほ落合と申す宿に至る夫より十曲峠之絶頂に上る此所美濃と信濃の境也絶てうよりわきみちの曲り峻岨みち十八丁信州湯船澤村に至る是惠那山に添たる山里也かしも村の内小郷など之類也名主宅至る狭し然れ共きれいなる坐敷あり古き湯殿雪隠もあり坐敷は六疊に天井あり明晝ともみへ可申懸物懸け疊もとより備後表也けしからさる事普請は至る古くみゆる中々百年位之ものにはあらさるへし

湯船澤山

○廿六日晴 六半時前出宅に湯船澤山に上り所々巡覽いたす此湯船澤山は閏四月中津川のケ條に記せし惠那山の麓山也澤のうちに澤とは谷川也つめた入谷川也ぬる川の名ありつめた入の川石はいつれも並より少々白きか

たぬる川のかたはよほと赤しぬる川は少々あたゝかなるきみありといふ赤く石に色あるをみれば雄黄の氣あるへし夫によりて湯ふね澤の名あるなるへし此湯船澤の水をもて天照大神宮の御産湯奉しといふうけかたき事也惠那山之名より出たるものか知へからす惠那山は美濃惠那郡信濃の伊奈郡に跨りいつれによりても惠ないなの名はある山也其名より胞衣子をいけたると申説あるにや又は此山よりは二百年度々いせの宮材を伐出し土俗神材山と申候故に惠那山へゑなを埋めたる事産湯のことまで附會せしやするへからす此つめた澤おち合風景ある地に兼好か墓あり此邊にしへの鎌倉みち也といふ此里よりその原山に岨出甲州に岨出かまくらに行たりといふ也今以山に驛場になるへき所みゆる也兼好か墓はいま猿屋敷といふ兼好をゑんこうと誤り終にさる屋敷といふに至る故寛政の頃尾州材木方之役人酒井丹下といふもの號月松軒兼好か墓といふ石碑を建また好事のもの經塚をも建たりと兼好か此所に至りし時



おもひたつきそのあさ衣あさくのみそめてくやしき袖の色香は  
立さる時

こゝもまた浮世なりけり餘所なからおもひしまゝの山里もかな  
と歌よみたりと村長新左衛門話也此歌の如くならんには兼好はこゝをさ  
りたる事明也丹下は外に證ありて墓をたてしにや中古ゑんこう屋敷とい  
ひしを兼好と改しにはより所あるへし新左衛門か申歌のみをもては證と  
なしかたし修験に圓光院と申かあるかあるひは同じ名の寺跡ありしをさ  
るやしきと申改たるを兼好と風流に改しもしるへからす歸りてのち考へ  
し兼好やしきは今杉貳三本建あり人家貳三軒そはにあり眞の山家也。旅宿  
の前の高山へ松火をともし夜往來するものをみてひかりものかと驚たり  
笑へき事也

○廿七日雨晝後より風 六半時湯船澤山出立いたし信州馬籠宿より妻籠  
宿に至り夫より夕方より雨計に成蘭村といふ山里之内尙又山寄之廣瀬といふ所にいたり止

宿。山里山家などいふことにはまことにあきあきて記へきこともなし道中  
旅宿ともに七子をまきたることし蠅居まことに當惑旅宿に参り候得は直  
に蚊帳を下け申候。木曾奉行水谷惣八物語に今般被差添候尾州之醫師之内  
野村隆榮の親はおもしろき男也若年之頃長崎に参りおらんだの學文成り  
たりとて歸り其後はいさゝかの事もおらんだの文學おもて記しおらんだ  
の辭を以いひたりとそねふとはチラストウミタルのひせ奇をこのみ候人情に付  
追々おらんだ文字の手跡の弟子出來草書はかみの髪のぬけたるか如きも  
の眞はわらひて或は合するしのこときものを記しておしへたりとそある  
時熱田の宿におらんだ人止宿のことあり隆榮か弟子の上達せしもの筆談  
のこと願ひて彼旅宿に行向ひ終夕隆榮より傳へし文字をもて筆談せしか  
曾ておらんだの人にはよめさりけりよつて筆談もならて歸り其後隆榮に  
告しかは隆榮さめくとなんたをこほひて申せしは世の衰行ことこそか  
なしけれわれか長崎のおらんだ人より彼國の文字傳受けし頃はいつれも

無筆のものはあらざりしか早此頃参りしかひたんは無筆にありけりと覺ゆと申せしよし其こと聞たりし弟子共おらんだの無筆をわらひていひのしりしよしよく聞は隆榮はおらんだの學はかつてしらさりけるよしおのれか不直不義をおほし君子をもて異物とし或は和をしらすといひて此蘭村之内廣瀬といふは山中の又山中とおもひしに驛場らしき事あり雪隠に大坂島之内播磨屋ひき同たけ其外某々との名前あり是同國清内路村みちに福島のうち御關所通なるか其内に拔みちありて女旅人并商人等此みちを通り候由家々にてくしたにさくをあきのふ也

○廿八日晴 冷氣也綿入にてひやくいたす寸<sup>す</sup>作物いかゝあらんとて尋ねしに雨あかり此邊の常なりとそひろせの丸山といふ所は五時頃より登る檜山也此所より飯田は山路三里也あらみちといふあり此みち御關所の拔みち也とみゆ女つれの旅人をもみたり旅宿は歸り夫よりあらゝき村山之内南澤に参る少々檜等ある所也此邊蚊といふもの曾てなしあらゝき村

は出郷ひろせとも四拾石の高にて人別八百人餘ありといふ關東候は、千石の村なるへし此節の咏

都にもまさる咏は蚊やりなき窓にすゝしき山さとの月

となりとて語らふ友も遙なる谷をへたてし賤か山すみ

いくなゝめおなしほとりをたとりつゝわつかなからも遠き山ふみ

蠅のことに多かりければ

やるせなしさる間しはしによるはへのかほとにうしとおもはさりしかみよはへのたることしらてあさりつゝ身をはかなくも捨るすかたを

旅宿の前にあけるの嶽一名なきひそかたけといふ昔金時山姥の居し處といふ今以岩に八疊計の穴あり是其古蹟也といふ國違ひにはあらずやおほつかなき事也

○廿九日晴 きのふの午後より冷氣にてけふは蘭村出立の頃は八丈の單衣の下へうすわたの胴衣を着たりしか妻籠の宿を経みとの宿に至りひるの食給へし頃は殊にひやくかにてうすわたにては凌かね候まゝ八丈無垢

の小袖を着たり夫にて冷にはあらさりしと申位のこと也けふ土用の入といふに甚敷冷氣也信州のものも作方に甚不宜といふ野尻に至りあすより此宿のあてら山見分として同宿に止宿

いなくさのことしおもへはすしきもあつさよりうしみな月の空

○六月朔日朝雨暮にいたりて不止 幾三郎より内狀來る別番に木曾の山中に此頃やとり給へるをしはかり參らせて 矩勝

いかならん君か夜床のさひしさをましらの叶ひ松風の聲

なれてすむましらは友や呼らむを君はた山にさそなさひしき

返 ましたらなくこへも中くたよりなやいつしかなれしきその柚かた

さひしさの友となしけり海山をへたてゝをくる君かことの葉

たはれうた

草結ふ枕に塵のつもるより君いか計たへまさるらん

易のおもて毫厘もたかふへからすと覺ゆ變爻あらはきかまほしくこそ返し

變爻か猿猴持かましらなく山おくないてひとり寢そする

○右之外新右衛門より五月十九日附之書狀來る

○二日雨 曾止之間なし至而冷氣也此體に候は、天氣に亦も木曾川のいかた越は相成申間敷由也いかた越と申候は二尺計の角物貳本藤つるにてからけ候而其上に乗川をこへ候事にて中々鶴船の類にはあらさりけり

○六月二日終日雨 同日書狀出し候より後也旅宿之手水鉢の前に參りし前より水多く溜り居候けふうかひの頃と風心附しにほうふりと申候もの曾てなし夫故蚊は居らさりけりみしらるほうふりは此邊になきものかと給仕之ものに聞しにほうふりはあり只蚊にならさる迄といふまことにや。此節漸竹の子盛也日々の汁にも出る菜にも出る風土はよほとかはりたると覺ゆきそには蚊なし同じ山中なから中津川上地苗木以上は美濃也夥敷蚊に亦

山上なから湯船澤などにも少々は蚊ありほうふり居候は、見申度とて家來遣せ承る其外近邊にはなしといふ前のほうふりの説彌信しかたし

○三日晴 木曾川満水に而明後日ならては渡出来不申候と之事に付當所之見分は跡に廻し明日麿香澤山の参り候積先觸出し同所は中山道上松宿の東也

○四日晴 六半時出立に而須原を經上松に止宿同所より明朝麿香山の参候積也今日之途中風景殊によろし東海中山兩道之内詠は中山道殊に多し其内木曾須原上松の間を以第一と可申木曾川百間も其餘もありて如瀧みなきり流其内に松の中島あるけしき絶景とも可申去なからまことに山水はあき果居候得はかこ之内より一通りみ候ひし計也此程みたきものは瓦屋根と海の生魚也山中の民屋いつれもへき板と申候ものにもこしらへ其上に五六寸位の石をのせたるもの也けふひる飯は尾州の御賄ひにて上松と須原の間寢さめの里臨川寺といふ□家の客殿にて名物の蕎麥并酒菓子

被賜之候御勘定方并下部も同様也臨川寺は驛路を去こと二丁計にして木曾川はた絶壁之上にありけしき別紙之繪圖の如し然れ共眞景中々圖之可及所にあらず御用として参り候ものにも驛路の蕎麥屋にて蕎麥を給臨川寺の庭一覽いたす迄也けふは同寺を休所に點せられこゝにて御料理被下候間御揃中門に出迎平伏客殿には毛氈を敷かこをも客殿の椽側迄かき上候たと恐入たる事也此客殿の奥のかたは某か休所次之間は御勘定方也石川左近將監老年に而旅行之頃も庭より下の川端に参りたりと木曾奉行申せしかはけふ某も支配向等召連川はたに参る至而急なる坂百八十間計もあるへしとそ中ふくより壹丈も貳丈もあるへき大石の自然石かきにて寺内の水瀧となりて流るゝさまよろしこしかけ岩此岩に浦島太郎こしなかけ釣せしといふ也浦島の名木曾の山中にはけしからの事也然れ共釣はいま人のする也けふ三四人ますといふもつり居たりうらしまの釣竿あり三寸廻り計の竹に貳本枝附たる也勿論偽物也といふは庭よりは小さくみへしか上を歩行せしに平なる所十八足あり屏風岩は水上三間餘もあるへし此所にては木曾川を大石もて自然にせきて巾三

間計ならてはなし實に底しらぬ淵也溺死せしもの此淵に入候水勢おそろしき事也此寺には詩歌等多あり近衛家熙公の

谷川の音には夢もむすはしをねさめの床とたれ名つくらん  
とよみ給ひしよし也木の額にほり附あり某も

名にめていかにねふりもさむる也たくひなかめの木曾の谷川  
とよみ候けふは御用中大に珍らしくいさゝかうつさんにもなり候住持圖  
と縁記をくるゝ間無據百疋遣し候高きもの也

○五日晴 六半時支度にて上松小川の之内麿香澤山に參るきのふのね  
さめの里のかみを船にて渡る小川入と木曾川をち合にて六拾間餘もある  
へし水ことに深し急流故にや川の太綱貳本わたし其内壹本は藤つるの輪  
を附輪より又つなを附船は懸四人に貳本のつなをたくり貳人にあかい  
を取むかふへわたる事也めつらしき事也さしておそろしくも無之候。歸宅  
後雨に成。けふの小川入の村方は女人足十人に五人もあり髪結たるも結ひ

髪もあり中々女とはみへす股引或はたちつけをはき四五十にもまゆ  
毛あり白齒也山中のけんそをかけ歩行候體重荷物を脊負ひ候様子曾も男  
と不替此邊男は袖方として所々に歩行女は村にのこり田つくりいたし  
又は歩に出候由也江戸の遊び居る女などにはよき手本也蠶はとりながら  
大かたたふといふものを着し米をも作りながら朝夕そはもち位の食にて  
ちやかたらいもといふ至るまつきものを□といたし居候由也居所多くは  
むしろを敷きて蠅の多きこととはにつくしかたし都の女共は承はりて  
有かたき事もつたいなき事をおもふへし

○六日ひる頃より快晴 六半時上松をたちて山中のちや并福島驛にて  
小休いたし夫より美保村に至り晝かれいたうへ夫よりはしとのわたり澤  
戸の手むけみさはのわたりを経て信州大瀧村に止宿也。けふは山中の小休  
にて尾州より某并支配向其外家來等に至り候までわらひもち給り候此と  
わらひもち夫を福島に至るき宿也此所のわきみちよりきそ川のみなもと川  
の名物也





とて今もい  
軒に五七  
軒唱も七  
しお相類  
候しる

あひなめは  
せいに赤  
く星たり  
き星たり  
魚なり得  
たりとて  
正木曾奉  
行より送  
赤魚とい  
ものなひ  
らといふ  
のあひな  
也といふ  
あゆに似  
赤き星あ  
り

涼しさのけふことはりやみな月もこほりかせてふきその山橋

右之所にしはし休らひてまた峯を上ること二十町餘もあるへし昔きその  
冠者か飛驒のものと戦ひしといふ所に至る此邊十町四方程の間平原也  
めつらしき事也こゝよりかの瀧こへの邊みゆる山みちなから三里餘もあり  
といふ女羅をみて

限りなき齡なるらめともしからめかつらかゝる千世の松ケ枝

かみくろ澤といふ所の檜松しけりける様をみて

いくとせも老せぬ色の深みとりかみくろ澤の松の村立

つゝしの岩にさきたるをみて

いく千世の根さしなるらん谷川のこけむす岩にさきしつゝしは

○今日痘瘡の事久米藏より尋ねしに山へ捨候事無相違此病ひ此邊も冬分  
となり希に行るゝよし若わつらひ候ものあれば數丈の雪中へ小屋作り痘  
瘡をやみたるもの尋出しそのものしてかん病をなさしむと此邊冬のいて

にて里さへ壁なくいつ方も板羽目也かゝる場所なる山の雪中に捨られ候  
而はいのち全するもの少きも尤なること也是は痘瘡のとかにはあらずか  
ん病人不手當ととか也けり此事もて考候得は此國にはいにしへ姥捨山な  
といふ畜生にもおとりたる風俗必なしとはきはめかたく候山のけんそ頼  
みかたきことひよとりこへ蜀の斜谷等のためし少からすかし母村より此  
王瀧までは二十里に及ふみち也然るに大瀧のおくかちわたりといふ所よ  
り三浦の奥山のみねを越候へは五里餘にてかしも村へ参るといふかよふ  
なることいくらもあり行軍防禦等の心得になるへき事也武士の心得へき  
事也近く譬ゆるにみねよりみねを越ゆると麓を行とは扇のかなめとひら  
きたる所とのたかひ也山は持行へきもの磁石と火打かま等の類也山にふ  
み迷ひ候事は山のひら地に多しけんそにはなしけんそのところは分水あ  
り分水を便れは谷川は出る谷川は便れは必さといふ出る故也

○八日晴 六半時早め王瀧村出立いたし同村御嶽山の遙拜所へ参る此所



上り三町計也石坂ことく天然石に似たる土地之石にて造り有之檜杉  
森立ものすき所也拜殿は高十丈も其餘もあるへしくり色之岩につくり  
かけ有之候此岩大きめくり壹里餘ありといふかくら殿に色々の額懸有之  
候。けふ宿人足福島へは不參途中より多分は替る是は此程同所には痘瘡病  
人之あれば也痘瘡を疫邪よりをそる可笑事也。けふはことにあつしされと  
出懸三里計は八月下旬位也夫より段々暑氣にて福島は大暑也木綿單物に  
てもあつしされと汗は出不申候木曾川に幼年のもの水あみ居候かゝるこ  
とみしはけふおもてはしめとす。黒澤村の庄屋傳兵衛といふものは公儀の  
難有譯知るものにや此度之御用にて公儀の御役人別々御朱印御宿いたし  
候事難有事に付せめて之もてなしとも存居りしかいつれも尾州より之御  
賄にて無本意事にありきあまりの事に湯あみにてもなし給り候へとて其  
したくせしよしをいふひるの沐浴すへき様もあらずされはとて夷民の情  
に背かんはこゝろなく候まゝ一兩日已前より風ひきたりとて斷置候此所

より貳三里谷へわけ入候得は雪も氷もおひたしくありそれとり置て日  
中に出たらんには珍事なるへきにいなともされは海魚の鹽物など取よせ  
て出すへくとす貧なる物は金錢を以禮をなさすと承る山のもの海魚の類  
もてもてなすへからすといふにこゝろつかて只々おのれかおもしろ  
き珍敷とおもふ事にて人を饗應せんとなしぬるそおかし卑諺に申亭主の  
好める赤き鳥ほふ子なるへしかゝること常におのれか人に應接する  
にもあるへきことにや己か好むところ聖賢のみちに相當しあるは美質の  
ことあらんとて必人もかくあるへしと取あつかいかたかるへし惣而のこ  
と必といふ所より弊は出るものなるへしこゝろしてこそ後日にあるへき  
と心附ぬ

○九日晴 きのふ瀧越へ遣せし御普請役富井 左右上 いたまた歸りきたらす候間  
福島の驛にてまち合候積に付逗留也村上愛助西野村に参りたりとて歸り  
委細に申す其内此西野村はきのふの黒澤村の隣村にあり此西野村と申は蕎麥菽

計にて米麥は出来不申村也愛助参りしに膳に附たるものくるみ。そはのもち。醫油也さて村々もの月代すりたるものは村役人計にあらは惣髮同前にてひけをもそらすいづれも怪けなるもの共計之由此邊五十年前までは髮結知近頃世のひらけにつれて月代そのことありといふ人足の内今般之御用珍敷事とて月代そのものもありしとみへて月代のそりたるあと眞青なりと愛助ゆふ。此そはもちといふものを愛助持参りてくれたり厚三寸二分餘大さ七寸五分餘にてそなへもちの如きものも此邊にあらは壹度に一ツツ、終日三ツツをもて食とすとチラシタ其外都而異國西洋之ものもて作りし此もちのことときもす小麥に案内之人足小き陣笠を冠り齋口を持頭高口の川の先いつること數寸也柳ひけ長生へ髪をもそらす珍敷先拂にて異國一行たるみちすとたもあるへしくるみ附しこと愛助何故といふことをしらすといふ考るに。す今のことをいまし。足をきひす。互に。かたみ。なといふ古き辭もしるへからす因に云軍陣のかと出にのし多々あれは来る見るの心かとかちくりを以賀せしはのしはうちあわひ故。討てあひみるに表せしなるへしかちくり。尾州より附られし醫伊東敬助は一昨日は則ち來たるなるへしくるみも其類か。夜五ツにたちて夜通しにみたけの嶽に参たりとけふ参るいろく薬をとりしか格別のものもなし蕃名エイヌラントセモス漢字勞廢の壽藥とて阿蘭人持渡りの藥草みねにあり多く取得たり高料のものなれともこゝには多

くあり蝦夷にあるへしといひし此邊のもの御嶽山の神靈を恐ること夥しきことにて既にことしも登山の行者貳人紛失せしか壹人は深林のうちより尋得て敬助登し時半ふくの小屋に寝かしありしといふ敬助か申せしは神靈さてく不心得なる事也此行者百日之潔齋にて上りしにかゝること逢しはいかゝといひしに案内之もの申せしは己か潔齋をたのみたる驕慢を神のにくみたる也とさらはこゝに銅燈籠ありて登山のもの金物を盗たるときゝしか何故にその人の手ちゝみ候類のこともなくやすくと被奪しやといひしに案内之もの大にこまりたると也殊に折々暴風雨雹のことあり殊に烈敷冷風は俄に吹候得は人の失しは風に吹おとさるゝなるへしといふわた入裕之上半てんを着し夫にてもあつからす家來は木綿襦半并半てんにて大にこたへたるといふ此みねよりは加賀の白山其外富士淺間等もよくみゆるといふ。昨日里犬の遊ひ居しを福島宿にて初る見るこれそ木曾へ参り毛たものをみし初也其餘猫鼠へひ等までもこれ迄みしこと

はなしされ共火はしよりは大なるへひを家來共山にて見かけめつらしかりしは聞しことあり山にて獸の糞壹度みしことありき山にて獸は人間の糞をかみそりいふいかなるわけやしらすさわりてたまらすといふことやし、狼の手當としてつほう持歩行候はおかしき事也せめて、うさきにてもとおもへ共更かけさへみす

○十日晴 六半時福島を出て上松須原をこへ野宿に止宿也。須原の宿にて尾州より名物をわらひもち被下候此本陣に附書院に恭しくまき繪之手拭懸をさし置夫は松皮ひしに三ツ柏の紋ちらしにて壽延る何と歎いふ狂歌そめ出しの手拭を懸あり其體江戸にて役者か清もとの太夫かのくはり手拭とみへたりけしからさる事也夫に付物語あり道中にて書畫多くみたりしに名こやの外は少し名のあるものは鵬齋等々書玄對か畫の類迄都る贗物計也よつておもへは信州の江戸を去ること百里にたらずしてかくの如なればましてみぬもろこしの名家の書畫定るみな贗物なるへしさて又

唐の趣を書齋等に寫したらむとも都のこと田舎にて學ひぬるよりも遙におとりたる事多かるへし異國より來るものは先王のみちを論せし書或は歴史等々類實用あるものさては筆墨藥種の外は用ゆへからさることにや殊に漢已來は曾君臣の別をもしらす成行てわか皇國に比しなはいか計歎歎敷國の風にて中にも武士の可學國にあらされは實用實踐の學なさんものは舶來ものみなりに坐右にをかさるも敬身のひとつなるへし西洋の事又夫に類して取捨あるへき歎武士は天正已來の武士の義と勇とに先王のみちを以取行ひなは間然することのなかるへきにや夫をみたりに異國の惠ひすを賞しておのつからわか父母の國をあしさまにいふものも世にある也某は夫等々ことは好ましからす思ふ也○けふは至る暑氣のよし旅宿にては單ものに汗不出候勿論よるは大夜着にて蚊帳は下け不申候

○十一日曇午後雨 六半時前之したくにて信州野尻宿之内あてら山に參



也  
十分候に上手  
行届候に不  
ら至るな  
用は鐵炮の  
か意はあり  
用は苦しかり  
て召候狩人  
を召連候人  
も召連候人  
州より行はし  
に山御免は  
鐵炮二挺持  
候兼ふ爲持

一度も用にたゝす土用之内にても夥火を焚候事故棚に置たるもの迄悉干  
也なか／＼／さうしづの類可及にあらず大に山巧者之ものに被笑たり山の  
水をのみしれぬきのこを食ふ類のこと急度上下ともいましむへし都而煮  
たるものを食ひ運動して汗をかく様にすへき事也以上後年見合えたためな  
れは記し置也

○十二日雨 六半時野尻宿を出立もとの妻籠を経馬籠にいたりて止宿也  
ひる餉は妻籠にてたうへ候

○十三日 六半時馬籠宿出立強雨に而途中の山雲殊に深し纔之先もさた  
かならず山口村に至る馬籠よりこゝにて小雨に成庄屋之宅に而晝食いた  
すよろしき宅也門構に而九尺計の石垣其上に黒板塀あり裏は腰見の土藏  
其外並之土藏とも貳ヶ所あり見附よろしひる飯の節かり受候場所三間あ  
りみかきよしに而黒塗之障子こしは赤身の杉に而秋の七種の晝ありきま  
りたるもの也此庄屋の宅より半みちにして木曾川之渡にいたる而而の強

雨の跡にて木曾川甚敷にこり川幅も廣し五月四日に渡り候上地のわたし  
の如ならんには甚恐へき事なるに至る穩也これは渡り之上に瀧つせあり  
て其下曲り居候間全のよとみにて且石もなく珍らしき平坦の渡也此渡り  
を越候得は美濃惠那郡也坂下村より川上村に至るこゝにて川上山立木巡  
覽いたす庄屋の宅に而小晝飯給る袖方之もの二八といふ此庄家舊家也といふ當時貧也  
とみゆ去ながら玄關之次に弓矢并鎗かけ有之候弓は博弓に而も常にすか  
り村重藤塗也にて弓かけうすへうの矢壹手添あり絃の仕かけ切れかゝり  
居たり常に用ゆとみゆ也鍵は貳間の素鍵に而おもしろくみへしまゝ取よ  
せみしに造りかた至而心を用ひたるものに而柄あまりふとからすしても  
ともうらも同じ様なる體也當時竹刀稽古にていにしへの鍵は鹽首の邊も  
太くせし古實おのつから失たりとみゆおしき事也いにしへの鍵はけふみ  
し如くなればたゝきてもをれかたおそし身も貳百年前のものこゝより歩行  
に而川上山に參り所々巡覽之上峠壹つをこへ廣瀬村に至る某か休所は庄

屋の宅なれ共道順不宜に付清五郎か休所<sup>の</sup>参り一同小休いたすこゝより又駕籠に<sup>の</sup>附地村<sup>の</sup>参りしに途中より風雨に成漸七ツ時前頃同村<sup>の</sup>庄屋の宅に止宿也けふらのみちもおひたしき見物にて甚迷惑也是は御用の旅行會<sup>の</sup>なき所なれば也木曾<sup>の</sup>内は尾州領<sup>の</sup>内も山村甚兵衛悉支配にて夫故尾州より被下候御賄にも同人<sup>の</sup>家來附居夫々膳部等見改ることに<sup>の</sup>家老壹人大目付壹人附添居此もの暇乞として目通申付吳候様内々木曾奉行申に付逢遣し候甚兵衛は至<sup>る</sup>貧士なりと聞しに家來<sup>の</sup>様子殊に立派なることにて家老大目付とも大名の物頭以上よき人品のもの也甚兵衛は五兵衛は四州<sup>の内</sup>信濃<sup>衆</sup>に<sup>の</sup>更替寄合<sup>の</sup>次に列するものかと覺へしに尾<sup>州</sup>御家老<sup>の</sup>次城代<sup>の</sup>格也といふけふ通行<sup>の</sup>村山<sup>の</sup>きに白かへ造り<sup>の</sup>寺の門か百姓の土藏かといふ造りに<sup>の</sup>あさて四方かけ拂<sup>の</sup>之高き棟作<sup>の</sup>家みゆる人足に聞しに鎮守祭禮<sup>の</sup>時村方<sup>の</sup>ものよりて狂言をなす舞臺也といふ此舞臺所々芝居<sup>の</sup>風みまほしき事也實にや田舎にては芝居にも系圖等を論して新田の水呑百姓由良之助にて庄屋家筋<sup>の</sup>もの寺

岡平右衛門にては寺に<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>列坐<sup>の</sup>節と相違に<sup>の</sup>以<sup>の</sup>外なりと老人大に憤り狂言作者など叱り受る類のことありといふ笑へき事のことくまた至<sup>る</sup>おもしろき味ある事也白石か猿樂のことに付義論是に近きことあり貴人の能役者等に打ましり俳優のことなしぬる時こゝろあるへき事に<sup>の</sup>あ笑ふへき事に<sup>の</sup>あ笑へき事にはよくおもへはあらさりけりけふにて木曾<sup>の</sup>内材木のあるといふ村々はことく廻りたり數十ヶ所故良材あるといふ聞への場所六ヶ山也いつれも深山幽谷の村なり去なからさてもよく開たり御治世二百年の御恩澤ありかたき事也扱其開たりといふに附物語あり開けたりとは云ふまでもなく花の開たることくなるへし花の開けたるをみるに末か末の所も不殘開けたるはいさかおとろへたるすかた盛なるうちにみゆる當時御世をとろへたるはしは某らか目にはみへ候半ねとも此開たりといふ所よりして經濟にこゝろあるものはいかにもして散かゝらすうつろはぬ様の手當あらまほしき事也夫には儉約より外はあらさらめり當時殊に儉素の御沙汰

ありと難有御事也木曾にても極の山中よりは宿は質朴薄く木曾よりも東海道はまた質朴薄く其内宮などいふ宿に至りては質朴尤うすぐみゆされとも江戸の町人のことと武士をも武士とおもはず又武士のうちをのれは四民の第一たる武士かれは卑き町人といふことはおもほへず只寶の有無にのみ目附たるものあるまじきにもあらずかゝるもの多出來ればおのつから町人の氣分高くなる也其もとは是も一分の驕よりいつる家貧にして町人に權を奪はれ候而司馬遷か所謂給を彼に仰くといふに至り夫より出ること也世の中に驕ほと可恐ものはあらずりけり驕より貧を引出し終に武士をもて町人に手をつき辭をいやしうして禮をなすに至りぬ恐へき事也其をこりも欲より出けり欲あるものは剛ならずと聖人も仰ありたるにはあらずやされば欲は百惡百凶の根元なるへし欲なき時は百善百吉に身はおろぬへしかくはいひなからも小人故日々亡ふる種となるものゝおもしろくおもふこゝろ多くしていつも凶と惡とにのみ居心に克カチかね候はか

なしき事也

○十四日晴 五時より附地村立出かしも村々山内出々小路に至る山路五六里もあるか如くにおもひしは初至あつかれたるにて實に三里也とはけふそしりけるこゝに民藏五月廿二日より待居まことにさひしき事なりとてけふ段々と物語る尤のこと也まことに落涙いたす程あはれにおもひしかさらぬ體にいたし置候深山の小屋に上下貳人と給士々百姓一兩輩にて番いたし居候はいかにも至あたいくつの留守居番也民藏の迷惑尤至極と内實甚不便におもひ候。けふ小屋に歸りしにおのか小屋とおもへは極の山中は忘れて故さとへ參りし様なる心も少しはありおかしき事也御嶽山の雪をみて

萬代もかけす崩れし雪さへもみな月はてすのこるみたけは

なれてしはおのか住家のこゝろ哉み山のおくの柚のかりいほ

○十五日雨 調物もあれはけふは山見分は休也。けふなども家來其外いつ





哉之評議迄  
ありしが夫  
にも不及候  
と申内談あ  
りし由等迄  
給士の百姓  
は家來の物  
語たる也

り前の山小屋よりいづれの山に眼のひかりおそろしきものをみたりたしか  
なること、申しぬ甚九郎は狼なるへしといふいづれも覺束なき事也熊に  
ても狼にてもよし怪獸にても某歸山の後參り候は、江戸の土産に皮を剥  
膽をとりて參らすへし繁太郎話に名こやの沙汰は夥ことにて山男の袖小  
屋にまたかりたる圖なともてはやすといふ其外雜説至多きよし也定而  
三卿は承り居るへし御尋候へし小屋へ家來の給仕として參る又助といふ  
ものあり性のかしこ村之商いたす百男振かなりにて山さとはこゝろきゝたる  
もの也江戸に候は、町内之若人かしら口利なといふものなるへし彼は鎮  
守祭禮芝居の時必女かたにて忠臣くからおかるなとよくいたすといふ役者  
の狩人になりたるは江戸にもあり狩人の類役者に成たるは珍らしき事也  
見物之ものいづれもおかるは男か女かゆらの助は足輕か平右衛門は家老  
かをしらす役者はこゝろやすき事なるへし顔見世なといふことのきりに  
金時山姥の所作或は墨そめさくらの精柚人の姿之類江戸のことくにては

承知いたすまし山さとのものいづれも山姥柚は己か身にて真物なれば也  
某なとも山又山に山めぐりしてはやをとゝひ迄に終りて候へは行衛たし  
かに一日も早く江戸へ歸りたき事也

○十七日曇ひる後にわか大雨忽晴る、今日下役之内木曾山々之内某  
か参りかね候所遣し候村方貧窮之所等は某か参村上愛助歸着變りたる事あ  
りやといひしに別に變りたる事なし木曾の西野邊にて婚禮にめつらしき  
事あり先よめ参りむこにあひてうぬを便に來たそよといふ其時むこの答  
にナニソウサハナイ居てみるといふ是則夫婦定之しるし也とそ又木曾の  
材木引受候白鳥湊之役人武藤庄三郎某も知る人白鳥と途同道して名古や  
の話を承りしにかしも村材木きり出しの山に壹丈餘の尺とり虫出たり或  
はおそろしき老婆出て昔より伐木なき所を何故に伐木せしやとて柚人足  
等をにらみたりといふことなど處の評判に其外天王の祭禮のあんとん  
に山男の出たるさま等晝ものあり異説怪談殊に多く入山之面々の家内に

ては甚心配いたし候由是は勘定奉行速見繁太郎話也 以上に似るはなしはあれ共かつて怪敷とおもひしこともなし江戸などにて若怪敷はなしあらは必偽とおもひ給ふへしされと木曾奉行日比野源八より村上愛助の物語に先頃高たるきり出しの時則小屋之わきにてよき瀧 人足の怪我いたすこと夥又病人多なりき然るによるくいとあはれに伐木のかけこへなと聞ゆふしきにおもひて考しにかの高たるには其已前材木きり出しの節一度に人足十一人即死いたし則其死骸を埋しことあり小屋を其上へ建たりと覺ゆ其こところ附しかは別所へ小屋を建たり其後は病人も怪敷こともなしと申せしよしこれらは此節之話の内にて真に近しとおもはる因て云材木伐出に怪我人ありとて驚へからず大材に至りては千五六百貫目も其餘もありかゝる品をきり倒し或は谷下の時其勢ひ中々おそろしき事也よつて其時あやまちてけしからざる所へ材木参り其響にて五尺六尺もある石みねより轉落候こといくらもあり其時木にしかれ石にうたれて怪我を以疵受およひ死に

尺先つお本よ  
木五十貫目  
前ふありと  
はい六尺五寸  
本は六十本に  
向ひ候もの  
り五寸もあ  
當り候大材  
は壹本の目  
かた二千五  
百貫目ある  
也

いたるもの常のきり出しにも大勢ありと兼而聞たり既此度もみねよりおち或は石にうたれて頭くたけ即死せしもの人壺もあり都合にては六七人にもおよふへし材木谷下け等之様子中々壘之上之論或は筆昏口舌のつくすへきにあらざる也材木を下るにさてといふものを作りて其上を材木通ることあり是はみねより谷へ橋のこときものを作り木の枝を以壘を敷たる虫損 □あたるもの也其上を材木通り候勢ひたとへ候は、大蛇の川をわたり候様にて其はつみにすれ合候而火出てなま木の材木よりはつとけふりを生し繩を附大木の切株くくり附ゆるめ候而谷下いたし候節も繩と切株とすれ合候而烟たつ也是は理の常めつらしき事にあらねとも見しははしめて也この類おしてしるへし廻村の次道の便よきによりて清五郎か休所へ参りしに宿の亭主こゝろして甚怪しけなる菓子へ江戸表にて鬼くるみといふものを殻のまゝましへ出たりよつて先頃愛助か蕎麥もちのもてなしにもくるみあり彌かの初見参のしるしにてくるみのしるしなるへしとい

ひて清五郎して宿のものに尋ねしに曾あそのこゝろへなし前裁のくるみ  
 味よしよつて奉りたる也其ことの聞へ候は、爐にて焼殻むきて参らすへ  
 し其外別のこゝろ候はすと云ひしかゝること古實古語などいふて穿鑿す  
 ることにいくらもあるへし書つゝりし人よりは遙に注せし後の人博學に  
 て先人地下に驚歎感伏する類もあるへきかおかしき事故こゝに記しぬ  
 美濃惠那郡田瀬 美濃惠那郡田瀬 晋稽叔夜か養生論にはや瀬の水をのむものにはこぶ多しと  
 かいふことあるかと覺へしか 歸り候は た木曾其外此かしも近邊之ものに  
 こぶありしものをみ不申候扱又こゝろ故歎袖にも日傭にも丈高きものは  
 なくいつれもこかたき様にみゆ尤のひくゝとしたるも希にはあれと十人  
 十五人之内にのひくゝとみへたるものは壹人もあらさるかとおもひぬ御  
 嶽山をふみ開たりし修験者の木履も齒壹本にて高しといふ右に付物語あ  
 り愚民は役の行者壹本齒の木履にて高山を上下したること不思議に思ふ  
 也予かこゝろにては壹本の齒に候は、上り下り足かへりて貳本齒の木履

木曾其外山  
 さとに井を  
 穿はまね  
 多くは山  
 也

雲とけふり  
 混同して異  
 色を顯す也

よりも必歩行いたし安き也品に寄候は、わらちにも類し可申歟草履など  
 より峻嶮の山など一本齒の下駄のかたよしこゝろみてしるへし宗謝靈  
 運か山へのほるに木履の齒かきたることあるかと覺ゆ歸りてのち考へし  
 僧侶のかゝることにて人を欺こと多しこゝろしてみるへし漢の高祖かか  
 くれたる山には奇しきも立て夫を便りに呂后の尋たりといふことを天  
 子の奇瑞のことく申しぬこゝろにおかしき事ありきその仙人之内に異人の  
 あるかなきかはしり候はす候へとも常に雨ふりくも立ちおほふ頃前の山  
 あひのくもは別の山々よりも異なる色也 白きにあかく黒きかこ 不思議にお  
 もひて日々ためしみるうちに與風考へしことありて人を遣してみしに果  
 してその雲の立候下に柚小屋數棟あり某かひかみたる考にては人のをる  
 所には必朝夕の烟たつ也夫も里に候は、心も附さるへし更に人烟を絶し  
 候山谷のうちに烟あれは必異なる色を顯す譯なるへし尤漢高は三代已後  
 の人物に亦呂秦の苛政を除給ふ天授の人におはしませはことなることあ

るましきにもあらず八雲たつの神詠も宮つくり給ふ時にそのと八色の雲のた  
國なりとも天授の人必ことなるこされと清の雍正天子は斷蛇雲氣のことをも  
とあらずとはいひかたがるへし されと清の雍正天子は斷蛇雲氣のことをも  
て衆を惑すものありと高祖のことを評せられ且はまのあたりみしことな  
れは後のためこゝに記しぬ

○十八日快晴 里方ならば清暑なるへし山は朝夕焚火夜具を着て昏帳を  
つり臥しぬ山に參り候にひとへ半てんにあよろし高き所の風ある所は涼  
過申候され共けふは山の小休にて火は焚不申候山に朝より夕より曇こ  
となきは今日計也朝か夕かの内快晴の日にてもくもらぬはなし今夕更に  
雲なきまゝ、柚小屋のある所并某等か居る居をみるにおのつから烟の氣あ  
りて蒼茫たる色みゆる也是烟なるへしよつて家來を高き所に遣しみせし  
むるに小屋のある所の外の山々谷々にはかの烟の如くもやの如きものな  
しといふ伏勢のある所雁行みたるゝなどいふも是等之類かするへからず  
今夜月ことによし四ツ頃にも相成候頃漸前の山の端へほのめき出るめつ

らしとしはし咏可申積なりしか綿入着せしまゝにて冷氣たへかね候まゝ  
山氣にあたらんことををそれて早々にうち入ぬひるもしはしにても障子  
を明置ことはなき也三尺の入口壹ツ小まと三ツにて西日なりはしめて少  
々日かけをみる其外居小屋のうちへ日さしていることなし、柚かたのこと怪  
物も居らぬ筈おもひの外のことあり第一人千人以上此節は貳千にも近か  
るへし名古屋より按摩髪ゆひ豆腐屋こま物を商ふもの等迄參り居ぬさと  
うなくなりければとゝのへしに四百文にて中白半斤計來るあづき壹合何  
程くろ豆壹合何程とて商ふ也甚可惡は口とり肴つまみものなど酒にいた  
る迄商ふよしきこゆ可惡事也是は某等被下候御品之内を貪り候密に  
商ふことゝきこゆ

○十九日晴 今日山には不參候御用狀の參るをまち居候尾州木曾方之輕  
き御家來林定之助より家來の咄にかしもの邊に若き夫婦と老母と住も  
のありしかそこに折々止宿の旅商人飛驒より美濃の往來にはかならずかしも  
村を通る也人馬なも繼候由也さりなから飛

驛の郡代計とまり候砌わかき夫婦宵より寝てむしろの屏風を隔てしのみにて寝物かたりいとかしまし田舎のものはあまりにけしからぬこと也とて商人笑たりしに彼老人大に憤り夫婦和合は子孫繁昌の源也わかわかかりし時も彼のことくにしていまの子供は出来し也かゝる目出度ことはなきまゝ兼てよるとなくひるとなくむつましく語ふことは我ゆるす所也夫をひなふり也とてわらふものこそあまりにけしからぬ事也人として人のみち好まさらむものにはしはしの軒もかしかたし早出候得とて以之外にのしりしかは漸くにわひてその夜はかのかたに止宿せしとそ此邊のもの婚姻の夜は其姑かあによめのうちかの類にて一夜抱きいぬる事也これを恵ひすに預するといふ其のち夫婦同じく寝るといふ以上は又助か家來の物語也夫等ふこと或は西野村の如くうぬを便にきたそよなんの造作ない居てみよといふことなと五十年に近くはなしといふ按するに西域回々國之ものをのか誕生の日には父母赤はたかに成て陰陽を出し子たるものことに尊みぬか

つきて再拜をして供物なとするといふ然れはかならす前の老婆のこときことあるまじきにもあらさため今ひなにも都にも新葬のことありて夫か七日と申にうとき親敷うちよりとよめきわたり酒くみかはし或は親の遺骸を火葬しむすめのまゝのかみかたちの妻迎るなどいふことしらぬ國よりしてみもし聞もせしならば回々國のもの替ことはあらさため

○廿日晴 けふも御用狀の否をまちて何事もなく山小屋をりぬさてく退くつのこと也山とめ川とめ此程は又下山とめとも可申歎をろかなる夢をたのみに都より便やあると待そはかなき

○廿一日曇 今日山は不參候御用狀如何と朝よりこゝろにかゝりぬ去なからまちてもまたすしても時來らは可參こはけしからぬことにこゝろを費しけんとおもひて

春の花秋の紅葉もおのつから時來ておのかいろみする也かくはをもひつゝけて支配向之ものなとに挨拶かてら申さんは格別こゝ

ろにまつことはせましとけさおもひぬ

○廿二日晴 けふも御用狀の參候義を待居候計也○こゝに物語あり歟五郎など殊に心得へき事也われこの頃山居のみにて曾あなすへき事あらずよつて刀をふり鑓を遣ひ或は書をよみ歌よみすること未明より夜は懸少も休み不申候常に久雨川留といへ共ひる寢せしこと曾あなし風邪にて快よ宮にて半日寝され共夕かた等さてくうみ果て人こひしく下役などの參るをまちし心になること多し其内ふとおもひしは漢董仲舒は書をよみて十年堂をくたらずと承る其外山林に入て書をよみ世を遁るゝものも多し然るに三日四日をつれくにいさゝかにても退屈の心あるはさてもいにしへの人にはおとりけり今のことなをいにしへのことしと申候へはいにしへおとりたるにあらす世の人より某かおとりたる事さても残念至極のこ<sup>と</sup>也とおもひてこゝろを勵して尙おもへは某江戸にゐる書をみることも成かたし然るに天幸にしてかゝる閑暇を給りて書をみよく其身を修るこ

とあらしめんとのことなるもしるへからすしかるにおゐては一章一句なりとも卒爾みたらむには天の錫たてものを卒爾にするにあたりとつゝしみおもひて小學のうち解兼しこと共かき附て小學備忘といふ標題の書をけふよりそ記しかゝりぬ歟五郎など此程閑暇しはしなりとも容易に心得候様之義あるへからざる様にとよくく心得可申ことにや山岡清兵衛は材木および普請さし物料理等品々鍛錬にて扱おもしろき事ある人也今夜參り同人物語に若かりし時尾州の神主吉田某といふもの祈禱のことに付誑惑のこと多かり其ものと義論の終に汝かこときゑせ神主の賈祈禱と申せしに彼もの承知せず余は格別職掌のこと悪さまに申しては不相成とて六ヶ敷申せし時清兵衛申せしは汝よく時日支干のさゝはりによりて命におよひ候もの其外人の天壽ともに必祈禱によりて善惡ありといふまことかといひしに實也其法を以せしことなれば必善惡共に其しるしある事也と申ける時清兵衛申せしはわれにも聊心得たる事ありよく人をいのりて苦

痛等なさしむるの法あれは汝先つわれを祈りて殺とも又苦痛なさしむとなせわれよく其法を挫て却る汝をして苦楚を受しめむといひしに彼神主の申せしは是至る易きこと也去ながら仁慈の道に背候間世の害なきものをして死痛等ことあらしめんことは予好不申候と申せし時左らは某か法力と汝か法力とをくらへ可申哉といひて大なる釘を柱へうち込て汝この釘を法力を以よく抜は我又わか法力を以よく抜なむいさゝらは互に試みん汝は神主われは俗人也汝先なせとて強ゐいひしかは神主困りて色々の遁辭を申せとも清兵衛聞いれす又々議論に至りて終に神主には釘を抜こと不能ことを申すよつて左らは汝か法力を以はしめになしてんとのこと  
は彌偽かとおして尋しに神主面色土の如くなりたれとも爲へき様のなきまゝ實に不能といひ扱然らば清兵衛か術をみんといひしにわか術を以釘を抜ことかゝる小さきはさら也いか様なるものにても手に應して忽に抜き候よしこと更にはこりてさらはみせなんとて勝手に行て大なる釘抜を

以參りわれ俗人なればわか釘を抜は是と申して出しみせたるに神主大ひ憤りしか仕方もなくて歸り夫よりかのを信しぬること止たりとそ  
○廿三日雨 けふも御用なく江戸よりの便りをまち居り候。今日朝鼠をみる深山にも鼠は居るとみへし是そ山中にて毛ある動物をみし眞物也都なともあるへきかわかみしはまことの山の中世間しらすの鼠にて只ちよろ／＼とあるき候計也木曾奉行水谷惣八いふ申年凶年の頃は木曾の山中すくまの類也いつ方の山にも多しおひたしく實なりて湯船深に五五百石と山伏のすゞかけも此いはれあるへし大瀧の邊にては夫は鼠附たること中々百を以數ふるの類にあら野村思左衛門物語也す柚谷水をためおとしを作りて一夕こゝろみたるに八十餘おちて死せりといふ程にて其時は鼠を食ふとてかの大瀧の邊狼多く出惣八もまのあたりみたりといふ鼠の山にさまで居しはけしからぬ事也實のなりしすゞはこと／＼く枯て三浦の山なと枯野の咏のことしされと追々に根より又芽

を出したる所もあり百姓はすゞめをふき盛になれば豊年つゝくと申候て  
悦候事之由也。暮六時頃支配向等参り候所々御用狀等相届一同よろこひ候  
一覽候處一向に歸り之程は不相知候相届候ものは高橋大助殿より之御書狀  
但御祖母様御ふみ也新左  
衛門より之詠草直し母上様并長屋御兩所様  
之御書狀六月廿七日附之書狀共外書狀共也

○廿四日晴 けふも御用狀の参るをまち居候未明よりきのふ御返書共認  
候御用はなくてもけふは書狀等認候ことありて日みしかゝるへし

高橋祖母きみのたま なつかしのこゝろはおなし難波津に  
ひし御歌のかへし みちもなかはのきその山ふみ  
此節はことに日 夏の日も谷間は早く暮行そ  
長くおもひ候 おもひの外の恵みなりけり

○おもひ出候まゝ相記し候はわたし歸府之義相知候も母上様御無理之  
御くし上げ御床上げ等其外當日之前あまり御世話に御やき被成候義堅御  
無用只々御わつらひ無之方と夫而已御心懸之義と奉存候歸り之上は如何  
様にも取計可申候歸り之上追々又々御不出来にやは以之外に御座候くれ  
ゝも御氣を御もみ無之無理之御世話御無用に御座候。怪獸其外はけ物之

事名こや其外之評判專に有之候由に付江戸にゐるも嚙可有之候得共山中に  
は決而何も無之候市川に参り山男出候由之咄なといたし候ものも有之候  
尤と奉存候され共決而無之候事に御座候江戸にも私ことき野父有之候得  
共山中には作物決而無之候江戸には按するに化物多有之雖第一にし、狼  
の上に居候わると申候もの貧家の御旗本は多く山出しの下女さへも江戸  
に貳三年居候得はそろゝとはけならひ化物とかいふ下着こしらへいさ  
や大はけにはけんとする時の用意に怪軽きつゝらのうちや入置此つゝらめも驚  
入へ二丁町之外武士のちりからうち或はもの前之七變化等中々此節のひ  
まにてもかそへつくしかたき様數々なるへし別におとなしくみせし狼物  
等尤おそるへしかゝることに木曾のし、狼等き、おちして遠くのかれし  
なるへし。

江戸ツ子の狼ものかこはしゝと蛇もみつちの下にもくらん  
以上母上の御笑草に記之



○廿四日 宅狀出し候後下役等參ること例の如し

○廿五日曇 朝よりひる迄は晴 夕かたより夜強雨也 九ツ時御用狀尾州之御家來に相渡之

○廿六日曇 御用狀をまち候こゝろも失てこのころは只山居のこゝろとそなりけるあまりのことにふるさとの夢さへなし

柚かたのこへ瀧の音になれぬればさてしつけしな山のかりいほ

○廿七日雨 弓持之足輕本多笛之助といふものは五十計に而至るおとなしき男也謠曲つゝみなと其外落しはなし淨留り等何にてもおかしき事は上手也此もの江戸より引拂きたより無之とて頃日精進に而御嶽山の願をかけ幾日に便あらむとてみくしをあけしに廿七日には必便あるへしと事との事なりとて中間共は悦ひ候由昨夕焚火に眷中あふりなから物語之時彙藏申せしかとおほつかなし夫よりも天氣ならばさんしよの魚にてもとらせ候かたよかるへしとて笑ひ居たり 是は中間へ屋のうしろの谷川にさんしよの魚夥居申候中間共一日に得こと百も其餘もありうなきの蒲焼のことしと小兒虫のくすりなれば土産にとおもひし也箱根山さんしよの魚は江戸に干ものになりたるも多あり味あるとは聞かざりきことにむまきよ

魚さん坐しよのたみ  
あなめかのあかみ  
にるあしめかのあかみ  
るとせしかのあかみ  
合とせしかのあかみ  
同、合とせしかのあかみ  
ち、合とせしかのあかみ  
熱、合とせしかのあかみ  
の、合とせしかのあかみ  
し、合とせしかのあかみ  
は、合とせしかのあかみ  
本、合とせしかのあかみ

し也くるきとかげの如くにして尾はなまつの尾のことし谷川石の間に居り申然るに候冷氣およひ人あまりおひ候節は山は上り申候さんしよは山生の魚なるへし 今日四時過御用狀到來都而伺之通と申候事に而一兩日中引拂之事治定せし也 治郎右衛門新屋より書狀相届く

○廿八日強雨 明日ひる時の出立と取究候處昨日よりの雨けしからす此體に而はきそ川又々とまるへしけふは雲深きこと甚し小用所に參り某か居候所をみればうちけふりたるか如く某かゐる所より小用所をみるに又同し時太郎と見おとろき申候是は小用所に參るみちの前より前後の山に入り雲も行通ふ故なるへし心附みるにあるときもなき時もありよつて終日おひたしく焚火いたす是は山濕殊にふかゝるへしとおもふ故也

ふる雨に袖ぬる、哉母君のまち給ひにしこととおもへは

○廿九日 朝雨なりしか六半時頃鍵遣ひ終りし後青天みへ晴候けしき也上下よろこひて支度いたし候處五半時頃より忽うちくもりて雨大にふり出しぬよつて出立は見合之積夫々へ申通しぬ四ツ頃より又々日の光ほの

みへて雨止みぬきて、こゝろならぬ事也かるゝこといく度かありて神無月ならぬしくれの如し其内はやひる後にもなりぬれはけふの立はやめにける清五郎等は雨をもおしてのこゝろかにて又某もしはしなりとも早きをそ願なるされと山みちは雨ふりては石おつるとていくたひか柚かたの時も登らさりしをけふ歸れはとて雨をも厭はすしては欽之助清兵衛は十一月の半まで残居るこゝろもありさては君の御用よりも歸には雨をもいとほさりけりといはれむも口惜し且は重きことに預るものゝあるまじきことゝおもひて止けるわか常にかはりたると清五郎等はおもひたるもしらす

○晦日 けふは殊に晴けるまゝ五時より早く山の小屋立出ける山にて常にもちひし机ツクエへかくそ記しける

わかれにしのちいかならむ朝夕によりて文よむ友となせしか  
柚かたのいほの柱へかくそ記しける

柚かたの山のかりいほ住なれてけさのわかれのをしくそありける  
欽之助清兵衛等山にのこるものいぬかへりといふ谷までをくりてわかれをゝしみければ

めてたしなわれても末にあふ水の名も歸るてふ谷のわかれば

朝夕に便をそまつ宮木ひくことし終らははや歸りてよ

ほとなくいの谷といふ所に晝かれいせしかは

位山のほるたよりとしのひてよしはしいの谷よしわかるとも

なといひてのこる下役をなくさめなとしてみちの邊おみなへし尾花をりとりうちけふしつゝいつしか山をもことなふ下り付地村名主のかたに参りぬこゝへ支配もの共うちよりて支配向其外わか宅に書状等認めけるけふにて山のことは全おはりて家來其外共煩ふものもなく獸に逢ひおよひ谷よりおちたるなどいふものもなくめてたふ來十一日には彌江戸着とは成りぬありかたき御事にこそ

○六月晦日快晴 同日之日記差立候後より記之尾州の木曾奉行等爲暇乞追々罷越木曾奉行を以御料理被下候由之斷有之難有之旨御受いたす二汁五菜ひら、うなき、しるこひ、あとは鹽魚也家來中間迄も御料理被下之候一體精進に候得共今日は尾州より御賄被下候終に付魚類被下之鹽物のくさきも甘くおほへ候鯉等猶更也六十日餘にてはしめて魚類たへ申候野菜とは又格別之事也。夜に入御用狀來る上納金願之通被 仰付候由也。今夜ははしめて椽頬の出夜けしきをみる單物によろし珍敷山そひなから螢甚多し六月菝のことおもひ出て

柚かたのうきをぬさと谷川の瀬に流しつゝ歸るうれしさ  
めつらしな山にみそきのはらひしてさとのあつさをうれしくそしる

○七月朔日朝雨ひる後より快晴清暑也 此邊の稻かなり也百姓はさして案したるけしきもみへす候。夜に入瀧越の遣し候御普請役井上富左右に面

謁同人は大瀧より手前に瀧越の参り候處途中歸り懸よ 同人瀧越の参り御用序穿謁り病氣に野尻に止宿快方に付今日長髪之儘罷出る 同姓性 同姓には無相違去ながら書物其外鑿いたし候處一村十五六軒いづれも三浦性性には無相違去ながら書物其外古物は無之先祖北條之亂を避候而此地に移候由并三浦黨之ものには無相違初は貳軒に追々家數相増候由申聞候由紋所はきつこうの内に三引或は丸に一之字などに丸に三引之紋はなしと云且貳軒之内詮方つは一軒に大力之もの有之馬など軽々とかつき候由之はなしは申傳候由其外穿鑿いたし候得共曾不相知候と云高札文段珍敷候と寫て參る左之通也

○二日朝四ツ時過より晴 馬籠よりみとのに中食夫より須原宿に至り止宿。随分暑氣也かたひらにてよろし此分に十日も續候は、稻可宜と人足共いづれも物語候

○三日朝くもりひる晴 六半時須原宿出立上松の宿にてひる休いたし福島之驛に至り止宿。上松にはかのねさめのさとみかへりのさとなどいふ名所あり夫より福島までの間實に木曾中のけしきある所也されと名山水に

はあき果屏風襖の晝も幽谷はおそれ候程に付一向に目にもかゝらす旅つかれのねふりのうちに例のねさめ見かへりをも過たり夫はしらてねさめには間ありやと尋ねしに蕎麥之名物あれば也いつしか過てはや上松の宿なりと從者の申ければ

ねさめてふ谷もしらなみ夢の間にはやうち越しみかへりのさと

○四日朝くもりひる後夕立其後晴ひる前後冷氣夕方は暑のかた也 六半時早め挑灯引に福島の御關所を参り少々待合門開候而後罷通候こゝより山村甚兵衛家來共の宅みゆる三百軒餘ありといふ門長屋二階屋などみゆるよほと手厚之體也夫より宮之越を参り尾州之御家來速見繁太郎と落合同人の伐木之義共申談いたし夫よりなら井の宿に参り飯給鳥井峠をうち越此峠より北にみゆる村は小木曾村也是即木曾川水源也夫より熱川宿に参り止宿

○五日朝雨ひる後より天氣暑氣也 熱川宿拂曉に立出て行こと十五六丁

餘にして橋ありこのはし尾州領と松原丹波守御領所之境也こゝにて山村甚兵衛より差出候先拂は暇乞いたし立歸る夫より本山宿に参る宿かたけしからす潰家ありて軒端くちくさ生目もあてられす此宿は御料所なるにいかゝのことゝ承りしに去る年の凶作にてかくはなりたりと承候てわけたつね民のやつれのあはれさに袖ぬらす哉庭のくさむらされと窮民共御賑恤のことはありし也けしからさることゝおもひていかにしてかくはなり劔うへ年もしらぬはかりの惠ありしかかゝる様は某など御勘定所のこと鑿察の事に預なから恐入たる事なりとおもひて

携る身はみるもうし大きみの深めくみにうるほはぬさと

夫より洗馬の宿にて晝かかれたうへ諏訪の宿に至り止宿也こゝにては浴の湯温泉也先年はこの宿の温泉に参り浴せしかこのたひはさはなりかねしまゝ旅宿に取寄候ひぬ

○六日晴暑相應之由也 下のすはを六時早めに立出和田宿にいたりひる飯給夫より長久保を経あし田にいたり止宿也。和田宿西の外にも倉を立有之某に慰同前に見吳候様申之輿中より見およひ候る宿方の手當賞し且以後之事共をさし遣しぬ。芦田の宿は中山仲藏長谷川晴事也書狀且鶏卵等差出同人参り申度候處養母至る大病に付罷出兼候由等委細民藏方は申越候

○七日朝曇夕かた天氣也 六半時前芦田宿出立いたし夫より岩村田にひる飯給輕井澤宿にいたり止宿。□を追る輕井澤打續たる淺間の麓秋草花殊によろし。輕井澤宿の本陣には夕飯の替り蕎麥差出之。望月の駒今も牧場ありやと尋しに宿より西に今も貳里餘の原あり其所に牧場のおもかけ残居候由申之。八幡の八幡たるは八幡宮のみやしるあれ也。鹽灘は一向山中海なき國殊に所縁なし宿の役人の申は此宿もと沼地同様也。しか筑摩川は岩きり通し當時の如くなりたるにて當時宿内に船つなき場之名所其外岩切通せし跡残居るといふくしらよる近江の湖などいふ類に山中珍敷

水地大川の引續き居ればかくは名附なるへしか

○八日曇夕かたより雨 六時過輕井澤出立いたし夫より坂本を経て碓氷御關所に至り松井田にひる休いたし高崎に参り止宿此宿昔より本陣なし殊によき宿は類焼せしと如何之旅籠屋は止宿也。宿村は人物男女のかみかたち至る江戸風俗に相成。蚊は高崎よりはしめてしる信州には芦田宿計也

○九日朝雨ひる曇夕晴 七半時過高崎宿出立いたし本の宿にひる飯給夫より熊谷宿に至る止宿也

○十日曇 六時前熊谷宿出立いたし鴻巣にひるかれい給夫より浦和宿にいたり止宿

○十一日晴 六半時浦和宿出立五半時過板橋の驛に参りぬこゝに忝弟等参り居りぬ其外元召仕たるものも参り居りぬ夫等ひる餉等まいらせ候る九ツ半時頃歸宅人々参りつとひぬ先つ母上に見参らせ夫より家廟を拜

し追々参り候人々へ挨拶等いたす

岐岨路日記

天保九年

○三月十日 曉よりひる辰刻までに西城の御臺所組頭の二階より出火して悉炎上なり即日御造營のこと被仰出御老中水野越前守若年寄増山河内守御留守居松平内匠頭御勘定奉行内藤隼人正明樂飛驒守御作事を奉行土岐丹波守梶野土佐守御目付三枝左兵衛松平兵庫頭御勘定吟味役鳥居八右衛門懸りにお造營のことつかさとりしに鳥居八右衛門は同四月九日に佐渡奉行を命被り某は其次に補せられしに同十日御材木伐出御用として尾州表に被遣候旨新番所前溜におゐて越前守殿被仰渡是は此度尾張殿に御手傳御用被 仰付候處右に上納金替として檜材獻納有之候に付也尤檜材之内熱田宿に裏白鳥に湊にあるも不少きその山中に立木をまゝにてあ

るもあり右は小役人にては彼御家來の對話等之事如何あるべきとのことにて某を被遣候由也此節御本丸には三御所様共御同居にて大奥を御取込恐察いたし候得は少も早く材木を伐出いたし不申候は難成候に付其旨密に越前守殿に申上一兩日中に發足いたし候積之處御同人御調有之候處布衣以上之ものは御序之節御目見有之拜領物被仰付候御例に付十五日御禮後發足いたし候様との御事に付右之含にて居候内□は不時御禮に同十八日に不時御禮有之候に付其序御暇被下候旨之由に同十七日中務大輔殿之奉書御渡有之候に付御受して参り同日は御祭禮日に付安國殿に参り九ツ時過頃間部下總守殿に爲御暇乞参りしに離盃可給と之事に御同人之居間に酒被給物語之内本町邊より火出て大火之由に付歸宅いたし候處ますくの大火に一橋外之御普請小屋無心元候に付七時頃より出宅参りしに付果て急危に付消防のことなといたし被りたる陣笠のかさあて焦候までにおよひぬ亥の刻に至り御小屋は患なき様子に付明日御

用召之事に付其旨相懸りにも斷退去いたす小屋場には若年寄堀田攝津守被参候御目付衆も奥より之御沙汰とて時々被参候夜中ふせり候間もなく大目付より明日不時御禮無之旨之達書來る然れ共御用召之事故御目見被仰候も差支無之手當にて麻上下登城候處御目見は素無之様子に付御同朋頭を以差替之義相伺候處大目付に可相伺と之御沙汰に付大目付神尾山城守に引合候處御禮無之候上は流れと心得候様と之事に付直に野服に成居候處内々御右筆組頭を以明日御序に御暇可被下と之御沙汰に付相待居候處明十九日四時登城候様之御書付中書公御渡に付御受として参り同例之手續に登城御紋之服沙御見之節御右筆部屋椽頬におゐて御老中列座に御材木伐出御用として罷越候に付拜領物被仰付之御序無之に付御目見は不被仰付諸事入念候様御意之旨中務殿被仰渡金五枚時服貳羽織被下之右之義取扱候坊主兩人に三百疋別段自分之存意に貳分西九方之壹分遣之謁其外とも例之通也謁之節大廣二之間三之間之境之御式居外

に御禮申上候處御目付加藤修理より已後は御式居内に入御禮申上候様  
 被申聞之同廿一日道中人馬之御朱印被下之人足六人馬五疋也長持御證文  
 并御用書物之長持被下之此長持は葵章之油たん洞油等迄渡る尤被下は桐に候處御  
 細工工の懸合之上かこにいたし貫右之代料貳分餘相懸る  
尤是は廿日にて受取之家來持人召連罷越此程御老中方其外より驢來る明日出立  
下役世話いたし夫々取扱筆墨紙も被下之之賀として参り候面々の酒など差出しぬ

○四月廿二日快晴 今日はきのふの夕くれ雨ふり大風なりしかはいかゝ  
 と安事居しにけふはことへの快晴なり正五時頃に賀として参り候面々の  
 一應之挨拶いたし直に出宅着服は服紗小袖今般拜領之御羽織着用いたす  
 革に袴とりたるした革そめのこくら小袴着用いたす供立は第一御用長  
 持御紋付也御證文自分長持具足臺弓駕やり貳本侍四人狭箱貳ツ馬くつか  
 こ持也用人は駕籠に不乗のりかけ馬に乗鍵を爲持刀さし壹人召連る草履  
 取は無之給人は四人之さふらひ之内に爲兼候御朱印は某か首のかけ参  
 り候品川宿外れ釜屋と申茶店に中食いたす同所の商之町人等参り居候

間町人并今般参り候御普請役の酒食差出候上金百疋宛遣す八ツ半時前川  
 崎宿之本陣田中兵庫宅に到着支配下役手代内田鯛助参り夫々世話いたす手代  
 吟味改役佐藤清五郎并改役並青山欽之助支配勘定出役山岡清兵衛も夕方  
 機嫌聞として参る日々かくの如くならんには互にわつわしき事に付御用  
 之あらん外は参に不及之旨申聞遣す旅のことはもとより不自由なるもの  
 に御用にこそ力はつくしなん御威光を以奢りたることはいさゝかもあ  
 りてはなりかたしと申こと忘候得は物ことにつき損多し

○廿三日晴風のなくのとか也 今日六半時位に出立いたし神奈川此宿は海  
 邊にてほんもくの崎近程ヶ谷を経て建場にて晝食いたす此邊石山小松山  
 くみへけしきよるし夫より  
 戸塚に至り藤澤の止宿本陣七郎右衛門昨日は支配向御普請役まで不殘機嫌聞と  
 して参り候得共今日より及断手附下役下田鯛助例之通参り候間外に可談  
 旨もなし今晚は参に不及旨申聞遣す

○廿四日晴のとか也 六半時位に出立いたし酒匂川に御普請之様子爲



心得下役鯛助の承り蛇かこひしうしくひ出しなと一覽いたす今日は平袴に而兩度歩行有之候平塚大いそをへて小田原に止宿本陣金左衛門大久保千丸より旅中安否之使者來る梅干一器贈之家來民藏罷出相應及挨拶尙又郡奉行杣もち并砂糖漬被賜之候

○廿五日朝快晴午後大雨夕曇 六半時前小田原宿出立箱根宿に參り休可申處昨日夕同宿悉焼失に付畑のたて場畑左衛門と申もの之方に而晝飯夫より御關所に參る雨ふり候得共家來共笠はかふり不申某は駕の戸を引候計也今日沼津に泊可申處故障有之候由宿役人共申出候に付三島宿泊にいたす脇本陣善藏是は俄のくり替に而本陣には大番頭止宿有之候故也着後支配向參る江川太郎左衛門參る江戸表之書狀たのみ遣す

○廿六日晴 三島より沼津原を経て吉原蒲原由井之宿に到着晝飯は原と吉原との間鰻名物之所也藤川御普請所大ひしり大々ひしり等鯛助案内にて一覽いたし置江川太郎左衛門の書狀壹封遣す

○廿七日晴 六半時由井出立與津江尻府中鞠子を経て岡部の宿にいたる

途中にて川除波よけの堤等心得之ため一覽いたすこと昨日のことし駿府に而は町奉行同心宿外に出迎名札差出與中より挨拶いたす宿の半に御城番其外之使者共鍵をもたせ一同出居る與中より一通挨拶あへ川の邊に岩(布衣御代官也)本十輔參り居建場の上り候と罷出一應挨拶いたす出立之節玄關體之所にて送る相應挨拶いたす十輔罷出居に付建場門外より乘輿牧野左衛門は知る人に付右之建場の使者差出茶一筥贈之家來民藏より相應挨拶其節十輔參り居往還並木井百姓持山之内の松木有之候旨御勘定所之差出候書付寫一覽爲改に付爲心得受取置右之談し等も有之候に付御用向有之に付面謁に不及候旨家來より申達す十輔之書付は清兵衛にみせ候様申聞手附下役内田鯛助に渡す

○廿八日曇微雨 六半時岡部宿出立藤枝島田金谷日坂を経てかけ川に至り止宿藤枝宿懸川宿にては領主町奉行罷出居駕中より及挨拶町方同心も

罷出先拂いたし申候。機嫌聞として御勘定方罷越候義は兼る斷置候處今日は大井河渡無滞相濟候賀として一同參る事箱根之義之如し

○廿九日雨 六半時懸川宿出立袋井見附を經濱松に止宿本陣川口次見附也見附之宿に中泉御代官平岡熊次郎爲機嫌聞參る本陣に晝休いたし面謁次之間まで送る

○卅日快晴 六半時濱松宿出立舞坂に至る此所に直に船に乗吉田之領主より馳走之屋形船出居る屋形には具足鍵持草履取乘其外は供船也海より上り御關所にて例之通駕之戸引之新井に晝支度いたし夫より白須賀二タ川を經て吉田宿に止宿白須賀二タ川は平岡熊太郎御代官所に付案内之手代出る吉田宿に晝は町奉行大手外に下坐罷在一通り駕中より挨拶いたす着後支配向等罷越候義例之通也

○閏四月朔日 六半時吉田を出立御油赤坂藤川を經岡崎に止宿赤坂宿向

屋本陣平松彌一左衛門は新右衛門養母の從弟に先年江州に參りし時も歸り之節立寄年々このわたなど送ものに付同人方に晝食いたす上下代五百疋遣し彌一左衛門并悴にも逢遣す彌一左衛門より菓子差出す三州寶藏寺に參詣いたし金貳百疋奉納いたす此宿に熱田宿役人出迎いたす夕方支配向等參る明日之打合いたす

○二日曇 支配向之面々は拂曉挑灯に晝出立熱田に參る暫見合五時頃出立場所着に付侍三人用人馬に乗駕に引續歩士貳人鍵貳筋箱貳ツ其外馬を省計餘は江戸出立之節之通也尤手附下役下田鯛助はいつも次に續罷越建場などに晝は必罷越物語なといたし候事也今日は鯛助は先遣し候間下役代り村上愛助罷連るちりうなるみを経て宮に至る尾州領に參り候は若哉御家來之出迎等有之候におゐては御先拂之事故身分に寄下乗いたし候積之處着いたし候迄は同心も不出尙役人出迎等恒より少々心添たる計也旅宿は本陣に晝は差支可申歟と海邊之平旅籠屋を七軒明け候る支配向一同軒

並に旅宿也平旅籠屋に候得共上段もあり檜作に天井惣黒部杉茶室等  
までありて本陣には見も不及さる程之普請也ちりう之建物大渡といふ蕎麥之  
名物とて前宿まで申参り候に付小休いたす蕎麥一宛差出其外之品々は斷  
る不差出暫相休候蕎麥代貳朱遣す支配向之ものは吸物肴其外蕎麥粉等  
差出候故金壹分差遣候由蕎麥計にも某は壹分遣し候方歟旅宿に着いた  
し候と間も無之御使可罷越と之事に付從是可申上旨申遣す是は宿役  
人取計支配  
向参り候に付送迎等之義聞合候處佐藤清五郎以下之面々一同談判之上取  
極候旨に夫々申聞さして如何之義も無之候に付都申聞候通末に記し  
候通取扱支配向罷越候一寸茶漬給る是は御料理被下候由内々承り候處家來の  
之應接等間もあるへく空腹故宿に申付爲  
差出左候宜候旨申遣す某は白紋服紗麻上下に着替御使之御禮として名  
護屋罷越候積鍵など爲出置是はいつも通行之  
節にても如斯也暫有之候御使入來に付玄  
關之上迄出迎いたす用人給人は下座敷を少々之外に出る直に某先立いた  
し主人之坐に附御使は少々床之間を外床之方に着座尾張殿御沙汰遠路

大義所用も候は、承り可申と之御事存含有難奉存候旨御受申之御省略中  
に付贈物無之旨申聞る存含候旨申之一寸時候之挨拶いたし直に罷歸るに  
付玄關之上迄相送る其節家來より御料理被下候間打くつろき候被下候  
様申聞之難有奉存候旨申之御使者門之邊迄参り候を見受直刀持より刀受  
取門外出咳拂いたす御使者立と、まりいつ方申候に付名古屋之御  
受として罷越候旨申之左候は、宜可取計旨申之に付頼入候旨申之直に罷  
歸る此御使は熱田奉行所附改役山田爲次郎と申候もの也引續御朱印改江  
崎清左衛門入來此程は夜に入候に付燭臺手燭等爲出置以前之御使は表座  
敷體之所に面謁御朱印改は居間體之上段之間に受る是は御朱印の對  
し上段に取計候心得也清左衛門麻上下に参り家來用人上段之次迄案  
内いたすに付某是はと申候得は上段の上此節某は早羽織袴に旅服  
に着替居一通時候を述御太義之旨申之家來を呼手燭等之眞を爲切候而扱  
御改可有之旨申之御朱印は兼而袋より出之箱之儘三方に差置右を取候而

静に御本書を出し開候而拜見可有旨申之御朱印は某開候而持居る暫拜見  
 いたし候上にも平服いたすに付直に御朱印は如元包み箱に納る扱又一通  
 致挨拶候而退去也其節御品柄有之候に付不送候旨申之人念候事之旨申之  
 相歸る以上は定例  
如此事也夫より御勘定奉行速見繁太郎  
松村新兵衛繼上下にも入來右之御使受候  
 座敷にも面謁宜相頼候旨申之に付今般之御用之大意申之畢而尾張殿より  
 贈物内々有之候旨申之差次々下役之ものに可有候罷出其ものに御品を與  
 申候得は夫々家來に引渡之義と相見家來給候繁太郎外壹人之前に夫々差  
 出す畢而御内々相贈候義に付御禮等には不及扱反物之義は取扱に而代料  
 を以被下之候中目録書并手控共差出し八丈織十反上布十反交着一籠也  
 代料は紙包にいたし臺にのせ有之候儘拜受いたす夫より今般之御材木伐  
 出方之義申聞手控差出に付受取置支配向之ものも有之候に付追而可及挨拶  
 旨申聞之退去之節玄關之上迄相送る畢而物頭以上之格木曾材木奉行水谷  
惣八郎  
日比野源八入來同斷取扱是は口上計にも贈物は無之候退去之節玄關之次之

間迄送る夫より白鳥材木奉行服部喜八郎  
渡邊萬右衛門來る右同斷取扱物頭以上之格勘  
 定吟味役頭取淺野加六郎來る右同斷取扱右之迎接等支配向之もの共定め  
 候義に而夫は宿役人共に承り候より割出候ものに付惣而丁寧過候様に候  
 得共今般は御材木伐出方として彼方に世話にも相成に付わさと其儘に差  
 置右に付微意有之候得共費に付不記之引續御料理被下之彼御家來之忤之  
 由幼年もの手長いたす内實は町人  
之忤之由也羽織袴にも頂戴之三汁七菜中酒御肴貳種  
 也家來中間共迄同斷酒之義は家來某共不給下部は嚴敷申付る是は御用中  
 禁酒と申候故を以也畢而被下之反物代拜見候處金百五十兩有之甚過當之  
 義に付支配向其外にも申談返却之積にも用人民藏に明早朝清五郎可參旨  
 申聞置候處引續清五郎來る青山欽之助山岡清兵衛も同斷清五郎には同様  
 之手續にも百兩欽之助清兵衛は七十兩宛之由に付某存意之趣申聞明日勘  
 定奉行呼寄某返却いたし候に付銘々も同様可取計旨申聞扱又御三家より  
 は御別段之事に付被下候もの返上いたし候而不敬に相當り候而は恐入候

得共然れ共多分之贈物拜受いたし候義は相成兼候に付勘定奉行迄相返候間可然取計吳可申と之趣意也下役支配向同様之趣意に爲取計候事也下役下田鯛助も呼に遣す同人は金三十兩贈物有之候旨に付外御普請役之義はいつれとも可申聞候得共同様可取計旨をも清五郎より申談遣す勘定奉行繁太郎外登人羽二重二疋宛下役を以相贈是は自分之心得に相贈候に付及斷直返却いたす支配向にも同様之由に付其通爲取計候事尾張殿より反物に添被下候交肴は拜受いたす然れ共御料理をも被下候處いたし方無之に付拜受之品爲腐候は甚恐入候と之譯を以宿役人に爲取計勘定奉行夫々の内々福分として遣す素内々之義に付禮として罷越候儀等は堅及斷是は宿之もの吳遣候も濟候事に候得共左候は敬意無之に付如斯申遣候也清五郎も肴被相贈候に付受用之義申聞遣す給物等御三家より被相贈受用素之義に銘々伺にも有之候間其通に取計候事

○三日曇夕晴 今日是在宿白鳥湊之支配向其外一同參る是は某今日參り

候は差支候故也今日尾張殿勘定奉行呼に遣候處速見繁太郎參る面謁之上御贈物之内御肴は拜受いたし可申候得共反物代之義は拜受相成兼御先柄之義不敬に相成候は恐入候得共何分にも受用相成兼候筋之旨得と申談反物代は支配下役より尾張殿支配勘定之もの返却之積申談尤支配向佐藤清五郎も差出置是は如何之義無之證據之ため也追而支配勘定之もの來る内田鯛助面謁昨日之反物代目錄書其外共密其もの渡し遣す支配向其外共密返却相濟候段鯛助を以申立る

○四日晴 五時より白鳥の湊に參る供立之節場所着同前尤弓具足は爲持不申候白鳥材木之役所に參る同所に柵門有之三ッ道具等有之其内又壹ヶ所有之外之門より下乗いたす下役其所に出迎いたす事淺草御藏之例之如し門番下座いたし小役も罷出居いつれも至而手輕に會釋いたし門内に入玄關敷出しの小役罷出居る夫より下座敷にも罷出式臺には御勘定方兩人并白鳥材木奉行罷出居白鳥材木奉行并御勘定方之挨拶いたし玄關之上に

上る同所の御勘定奉行出迎いたす挨拶いたし材木奉行先立に坐敷に罷通る夫々勘定奉行初小役のもの共と一同罷出る小役もの内には坐敷椽頬の出候ものも有之いつれも相應挨拶いたす夫より御勘定方に面謁無間も高つきの干菓子出る勘定奉行罷出挨拶有之相應挨拶之上厚手重之取扱無之候様申斷無間も場所宜候旨支配向申出る材木奉行案内小役のもの先立いたし所々見廻る小休所補設有之同所の小休いたし材木場所密一見之上元之役所の罷歸る暫いたし供揃宜候旨御勘定方申出候に付玄關上に御勘定奉行の着座罷在候に付着座いたし挨拶材木奉行御勘定方式臺に罷出居立居候間立ながら挨拶下坐敷出に罷出居候ものにも夫々挨拶いたし立歸る今日白鳥に御勘定奉行食事少義を承候に付腫物有之候旨申聞候處名古屋表より醫師可差越旨申之歸宅後勘定奉行附書 役松田常次郎召連尾州目見醫師三村玄澄罷越に付居間に面謁疗瘡之旨申聞る尤全之疗毒には無之疵とかめいたし疗に相成候義に疵疗と申候もの、由申聞る相應挨拶および膏藥煎

藥貰受る。夕方より支配向之もの罷越候義例之通也

○五日晴 宅調佐藤清五郎外貳人の材木見分いたし方之義申談、疗瘡之由名古屋表に相聞奥醫師淺野春道是は上手之聞へあるもの、由也被遣尙前文之玄澄詰切可被仰付と之御事勘定奉行共被命候旨勘定奉行申聞候旨場所より鯛助申參るまことにいさゝかの事に付堅及斷遣候處今夕春道診脈之上全當分之事之由申之罷歸尙夜に入玄澄參り附切可申と之事に付堅及斷候處熱田の旅宿に控居可申とて罷歸り候

○六日晴 今朝は欽之助清兵衛は場所清五郎は旅宿に御用狀取調候由申聞る承り置。内藤隼人正外貳人より御用狀八半時頃到來外書付壹通來る三百本計材木其外之伐木に取懸候は、早々可申越旨也。別番宅狀來る。以上いつれ勘定下役之もの持參民藏より受取遣す御用狀は清五郎呼寄相渡す。青山欽之助山岡清兵衛來る七百本餘改相濟候旨物語候

○七日曇 不快に付宅調尾州奥醫師淺野春道目見醫師三村玄澄來る。池田

岩之丞方の書狀出す。下役衆被參候事例之如し清五郎より印狀之下案貳通本書貳通差出す

○八日雨在宿夕かたより快晴 例之通支配向其外參る。印狀貳通は存寄無之貳通は加筆いたし壹通は相認候之草案一同清五郎に渡す外壹人も存寄無之候旨申之。今朝鯛助參り尾張殿より贈物圓藏義持參いたし候由に金五十兩反物十反代也家來共迄差出例之通申達返却いたす。清五郎外貳人も贈物有之下役御普請役も同様贈物有之候旨申聞自分同様可取計段差圖いたす。宅狀封し候之尾州いたのみ遣候積鯛助に渡す西丸下の母上の新右衛門の治郎右衛門等西藏太の日記壹冊磯野半左衛門に

○九日曇風 今日圖其外共皆出來候に付尾張殿家來に渡御用狀江戸に差立兩度之印狀返事に場所之様子之狀右に付内狀圖三名宛にいたし候自書之内狀也今日いまた疔瘡不愈に付不出。大井帶刀□の手附菊田泰藏來る逢遣す帶刀之自書壹封其外山々之様子之風聞書并板本上持參帶刀之返書認渡す材木川下方之義に付書付是は評議之

積

○十日晴 昨夕内藤隼人正外貳人より木曾山伐出等之義御柱に□立人歩に陸送出來候哉之義申來る右之書付は佐藤清五郎に渡置則今朝勘定奉行兩人呼出右之由申達夫より白鳥之會所に參る同所は木曾材木奉行參り居陸運送出來兼候旨申之左候は、得と書付にいたし差出候様申達す。同役より御用狀來る。西丸懸り支配向之ものは別段御手當として御扶持被下候旨之御書付寫。書狀壹通支配向より之文通等來る其次月御用番書來る大田備後守堀大和守大岡主膳正堀田攝津守牧野備前守駒木様大内記大藤安房守内藤隼人正深谷遠江守柳生いせ守吉見義助美濃部新右衛門大岩新太郎佐久間忠房加藤雄五島三五郎木原半兵衛志賀次助 ○菊田恭藏明日發足いたし候旨に暇乞として參る  
○十一日晴 正四時前より白鳥湊參り例之通材木をみる。支配向等參る事例のことし  
○十二日曇午後晴 朝より白鳥の湊參ること例の如し。支配向等參ること  
是又常のことし

○十三日晴 在宿調物印狀之大意取調清五郎に遣す。尾州家來より人足に  
あ持出候義に付書付之通彌無相違之段尙又爲尋清五郎に申聞材木之義爲  
尋處三百本は選木に爲爲伐可申旨勘定奉行申立候旨清五郎申聞る。今日は  
清五郎欽之助參る。鯛助清兵衛も參る。

○十四日曇夜に至雨 風邪に付在宿調物支配向罷越候義例之通也。山岡清  
兵衛今日五ッ時出立爲暇乞出懸罷越下役村上愛助差添遣す。勘定奉行の先  
達の人足に材木持出之義に付相達候處出來不申候旨之書面差出候に付  
相談落等有之候あは不相成候間右等之趣再應得と申談可相成は肩持に  
差出候様と之義をも申達候處彌出來不申候旨書面いたし今日勘定奉行松  
村新兵衛速見繁太郎木曾材木奉行日比野源八同道に差出す受取置尾州  
之侍醫淺野春道參る。印狀之調出來一覽之上□□いたし候様申達清五郎欽  
之助に相渡す。夜に至り内田鯛助呼寄内狀之案文清五郎方に遣す。御用狀出  
來いたす十五日附に宅狀封す。新右衛門の西丸下の母上の市川の帳面壹冊注文書也 十六日附に九日返

書右に付内狀共報す明日差出候積候

○十五日雨午後晴 いたまた風邪不快に付在宿下役等罷越候事例之如し。印  
狀内狀とも清五郎其外に及相談いたすもいつれも存寄無之旨也

○十六日晴 在宿今日江戸の書狀出す三日附に申遣候由也。是は材木肩  
持之義に付返書内狀等也。下役等罷越候事例之如し。穩密調として差出候御  
代官岡本大次郎手附すかたをかへ夜分罷越面談之上書物圖共受取内田鯛  
助連參り同人宿に止宿也

○十七日曇 白鳥湊の例之通出勤に付雨に付晝後より歸宿下役衆被參候  
事例之如し

○十八日朝雨 四過より晴に付晝後より白鳥湊に出勤。尾張様より燒物之  
重箱被賜候。江戸より御用狀來る觸書之義其外幾三郎同役より内狀也。表  
向之狀に御書付寫并青山重左衛門出役被 仰付候旨之書付來る。柴田善之  
丞より風聞書來る。手代をも差越面談いたし遣す。お文之御用狀は江戸表よ



清五郎の遣す。幾三郎同役より之返書は則相認る善之丞の返書をも相認候

○十九日曇夜雨 白鳥の湊に参ること例之如しけふは終りなりとて尾州より酒をも給り候菓子等□□の常に替らす尾州之勘定奉行支配向等参ること。是又例のことし白鳥之材木奉行爲暇乞罷越面謁。白鳥奉行取扱に尾州より陶器賜りぬ西田圓藏持参内田鯛助に相渡候由同人持参吟味方改役の陶器の重下役の茶碗被賜候由夫々申立る承置

○廿日雨午後晴 明日出立に付白鳥のまいらす。支配向等参ること例之如し江戸向之御用狀内狀御用狀は材木之員數之書付場所引拂等之義内。池田岩之丞の内狀差出す

○廿一日晴 五時頃の出立にて熱田宿より名護屋に参り晝休いたし夫より同國小牧宿に止宿。今朝并晝共尾州より御賄被下之二十七汁菜并酒肴也勘定奉行預同心と申もの貳人案内として罷出る。昨日宿之もの下男下女迄

一同罷越候  
もの  
佐藤清五郎  
青山欽之助  
内田鯛助

御醫師  
井上富左右  
近藤彌藏  
木曾奉行  
日比野源八  
其外木曾方  
之もの共數  
人也  
野村 榮  
伊藤 圭介  
尾州支配勘定  
平井甚九郎  
勘定時味方先立  
西田 國藏  
勘定奉行  
速見繁太郎  
木曾奉行  
水谷惣八  
召連候支配  
勘定出役  
山岡清兵衛  
下役西田圓藏  
同手代  
村上愛助

目錄遣す不快中爲見廻被遣候醫師にも金五百疋外科三村御醫師淺野春道  
の肴遣すいづれも家來より書狀遣す春道は宿之取斗に金三百疋遣す

○廿二日晴 六半時出立にて樂田太山を経て鶴沼に至り此所にて晝休いたし夫より大田宿に止宿。平井甚九郎來る。支配向下役來ること例之如し

○廿三日晴 六半時大田宿出立伏見を經みたけにて休晝食夫より細久手を經大久手に止宿。支配向参ること例のことし

○廿四日雨天 大くてを六半時出立大井にて中食中津川に止宿。昨日山岡清兵衛より御用狀來る清五郎差出す一覽之上返却是は人足出之積其外之事共也彼地着之上可申談旨申聞遣し候。今夕雨天に木曾川出水に付明日出立不相成旨申出る

○廿五日雨 木曾川出水に付中津川宿に滞留。支配向下役等参ること例之如し

○廿六日雨 木曾川出水に付中津川に滞留。支配向下役等参ること例之如し

し。木曾川十二三分の満水之由申出る。川禍之返書に調印清五郎に渡す

○廿七日曇 川支に付中津川に滞留支配向等参ること例の如し

○廿八日曇少雨 右同断。昨日七夜過御用狀到來御用狀は去る九日に差出

候書狀之返書同様遣候贈物之返書も来る右は持参之鯛助に直渡遣す。宅狀

は阿部遠江守池田善之丞母上様跡部山城守市川丈助古助新右衛門兼五郎之尺腹宅之日記幸三郎敬之文宣之畫妻之文等也右之内母上様御病氣之

義有之候に付直に今日返書右之事計記之新右衛門幸三郎に遣す右は尾張

殿御家來に遣す。木曾材木奉行來る右談話およひ候事

○廿九日雨 八時頃止支配向等参ること例の如し今日も中津川宿に滞留

也

○五月朔日曇午後晴 今日も中津川に滞留也。支配向等参ること例之如し

木曾奉行并平井甚九郎當日之賀として参る。けふ序あらはとて宅狀壹封平

井甚九郎方に爲持遣す跡部山城守中野又兵衛幸三郎に御養父様阿部遠江守日記新右衛門の母上様

○二日晴 今日も川支に中津川宿に滞留支配向來ること例之如し

○三日曇晝後より雨 小雨にも木曾川は渡差支候に付今日にも又成人計相渡候は、今晚より可相渡旨申談候處今晚はいつれにも差支明朝兎

も角もいたし人計渡候荷物は残置候積申談即評決夫々手當之義取計。支配

向参ること例之如し尾州之御家來は本陣に支配向より申談いたす明日

苗木の城下の止宿之積下役鯛助より添追觸差出す

○四日雨 四時後出來之旨上地村より申來候に付五時過より支度いたし

鶴船にてきそ川を渡り苗木領上地村に至る遠山美濃守城下此所に小休いたし

候處至る空腹に相成候に付辨當給下役之悉渡越候否相待相揃候處刻限よ

ほと延候様子に付五里之山みち弱人足に無覺束候に付此所より添觸

差出し福地村に参り止宿

○五日曇微雨 四時過より晴端午に候得共道中に付相替候義無之五前福

地村出立いたし山路二里を経て苗木領田瀬村にて小休辨當いたし夫より

附地村に到着八時過也。福地村より附地村迄四里之由に候得共至る遠し且山路計也。

○六日晴 四時頃より半天も、引に於支配向並同様之服に相成候。附地村出立いたす途中之義は木曾奉行附山守と申もの案内いたす。尤木曾奉行案内いたし可申處先達。山岡清兵衛一同入山いたし有之候に付る旨斷有之候。此所具足は脊負籠に入爲持長持其外とも附地村名主方に目錄書いたし相添預置途中猛獸用心之ため之由足輕鐵炮三人狩人三人附添有之狩人先立尤鐵炮切火繩也。足輕も同斷途中に於爲試玉込不申爲打候處聲に隨ひ打放候體馴たる物共と相見附地村より出之小路迄三里程と申候事に候得共悉高山深谷を上下いたし候義に付五六里も有之候歟と被存いて之小路途中に所々小休所補理有之一ヶ所は辨當所に於可成之板小屋出來有之候。同所に木曾奉行出迎いたし居候に付相應挨拶いたす。夫より出之小路に參る途中之嶮岨言語同斷也。小屋は八疊貳間壹間居間壹間は座敷之如き心

得也中に土間有之下々之もの共同様之體に於貳間有之次に貳間有之給仕之もの附置有之候。尤下々之もの共は面々小屋有之木曾奉行下役支配向等夫々一同罷越山神之社有之候に付參懸拜禮いたす。追る家來民藏麻上下に於名代として供もち神酒相供候事。

○七日晴 五時より出之小路山の登る場所殊之外なる難所に於中々以供立之沙汰は勿論之義帶刀にてはとても難能上旨清兵衛申聞候に付改役一同申談小屋より羽織をも不着家來に帶を爲持尤家來は羽織無之脇差計也一同鍵を爲持不申尤某か八尺計之鍵爲持參り候に付右を供立之外爲持候案内として木曾奉行下役之もの罷出る木曾奉行は不快之由に於斷有之候山中之嶮岨中々以難認取候八時頃曇候處雨天に於は途中甚以案事候旨案内之もの共申立候に付嶺通り之立木一通見守候。下山也。速見重太郎勘定奉行等參る。七時過御用狀到來いたす。越前守殿御沙汰之由材木直吟味いたし申聞敷と之一條材木不及陸運候旨之返書。尾州に早々材木可相廻旨之書狀。同役一同

上金之進達并書狀殿中之義凡之書付支配向より之禮書宅狀母上様新右衛門  
越前守殿御直書

善左衛門よりと嘉十郎也壹封共

○八日雨 天氣合に付宅調。鯛助より贈物員數之義申聞る不承知之義等も有之候に付尙又清五郎欽之助呼寄委細等申談遣す。勘定奉行速見繁太郎呼寄材木人足持に不及候旨申達并取船之義并御材木早々相廻候様可取計旨申達す清五郎も罷出居候

○九日晴 五時より山に參る支配向其外共來る事例之通也

○十日晴 五時より山に參る。七日に受取候越前守殿之御狀返書認善左衛門之壹封をも添井上新右衛門方に向差出す内御用狀之段は口上相添平井甚九郎に相頼遣す

○十一日晴 五時より山に參る。上納金之義に付進達書并返書別番共壹封にいたし同役之書狀壹封にいたし鯛助に渡可申と遣す。尾州より鯨被賜之候

○十二日晴夜雨 五時より山に參る。内田鯛助來る明日尾州より御使可有之旨内々申聞る。支配向參ること例の如し

○十三日曇夜雨 五時より山に參る。尾州より御使可被下と之御事尤山小屋之義に付野服を以可罷出旨名護屋表より申越候旨をも鯛助迄爲心得申越す依之某は自紋をかたひら羽織袴に而小屋表屋根下うすへりしき置候場所に出迎いたす上座に相通し御受申上る山内居小屋之義諸事不自由にも可有之候に付被下物有之候旨勘定奉行速見繁太郎申聞目錄書相渡反物拾反也。銀于其節名護屋表に而可相贈分とも追而御品は鯛助迄可引渡旨申聞る難有旨御受申上る是は江戸表に懸合濟之義有之候故也歸り候節小屋外うすへり敷有之候所迄相送る小屋内は玄關も坐敷も無之便所湯殿に參り候道少々の板式有之其所に口有之出入いたし候故送迎右之通相成候。木曾奉行日比野源八呼寄加子母に參候義申達す

○十四日雨 今日は場所道無之旨に而見分相延し吳候様申出有之に付不